ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第55号

考古学と中国古代史研究・前編—ある方法論の探求—----------杜　正　勝-----1
金谷1号墓の発掘調査----------石崎　善久----13
市坂瓦窯の発掘調査----------森島　康雄----19
—平成6年度発掘調査略報—----------25
12. 北谷墳墓群
13. 奈具墳墓群・奈具古墳群
14. 裾谷横穴
15. 宇治市街遺跡
16. 金ヶ辻遺跡
17. 甕原離宮推定地
18. 梅谷瓦窯跡
19. 弓田遺跡
20. 長岡京跡左京第329・330・331次
研究ノート　上人ヶ平遺跡の馬形埴輪
—馬形埴輪の一例—----------石井　清司・河野　一隆----45
資料紹介　京都府の古墳時代鉄鏃----------野島　永----54
研修だより　平成6年度全埋協近畿ブロック海外研修報告
—中国　北京・西安を中心に—---岡崎　研一ほか---63
府内遺跡紹介　65. 栗栖野瓦窯跡----------70
長岡京跡調査だより・52----------74
センターの動向----------77
受贈図書一覧----------78

1995年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版　　上人ヶ平遺跡の馬形埴輪

(1)　上人ヶ平埴輪窯全景(手前に馬形埴輪が出土)

(2)　上人ヶ平埴輪窯出土の馬形埴輪

考古学と中国古代史研究・前編
—ある方法論の探求—

杜　正　勝

1．序

考古学は、20世紀になってようやく西洋から伝った知識で、中国古代史はどちらかといえば中国本土の古い学問であった。世界のいかなる民族の古代史にも多くの神話伝説が混じっており、科学的歴史知識と観念は考古学の洗礼を受けなければ打ち立てることはできない。この作業は、西洋人が行った古代オリエント・エジプト・ギリシア・ローマの歴史研究にすでに先例があった。中国では、学問の方法論の導入、遺跡の発掘、考古学概念のレベルアップにしたがい、信頼度が比較的高くて内容が充実した中国古代史研究もしだいに形成されてきた。しかし、キーポイントになる問題は速やかな解決を待っており、現時点では理想的な古代史研究からはまだ遥かに遠い。

今世紀初め、中国古代史は一つの激烈な改造運動を経験した。つまり、これが世界的に有名な「古史辨運動」である。儒家の経典をもとにして古代史観を構築する伝統は、なんども批判され、徹底的に打ち砕かれた。ある方面では、中国古代史研究は「古史辨運動」によって経学(孔子の教えを書いた経書を研究する学問)の牢獄から解放され、歴史学の特色を回復した。ただし、別の方面では、伝統的な古代世界も顧頡剛氏の著名な「層累造成説」によって空洞化された。古代は、数千年の長きにわたっており、この長い期間内に中国人が築いた社会・形成した国家・創造した文化は、すべて朦朧とした虚無の世界に陥った。歴史家は、四つの文字を用いてこの運動を評論した。それはつまり「破而不立」である。

「疑古運動」が破壊することはできても建設することができないということは、客観的条件により規制されたもので、文献史料を一度疑えば、歴史の再建はそのよりどころを失くしてしまう。まして、その当時の中国考古学は未開の状態で、具体的な資料を提供して空白を補充することはまだできなかった。しかし、方法論からいえば、李玄伯氏は当時「古代史を理解する唯一の方法は考古学である」と指摘している。[注1] 陸懋徳氏は、西洋古代史の研究にかんがみて、歴史学者は考古学者の論拠を引用すべきであると提唱した。[注2] 彼らは、すべて古代史研究の基礎が科学的考古資料にあると信じたが、ことさら強調すること

はなかった。1928年に中央研究院歴史語言研究所が設立され、傅斯年所長は、「我々は読書人ではない。我々は天上から地底まであらゆるものを追究し、みずから手足を動かして材料を捜そう」と宣言した[注3]。同年、中央研究院歴史語言研究所は殷墟(いんきょ)の発掘を開始し、新しくて信頼できる古代史の新材料を捜した。そこで、歴史研究は古文献から抜け出し、経学のしがらみから逃れただけではなく、文献批判を乗り越えて、実証的に古代世界の様相を再構築した[注4]。

殷墟の発掘は、当時の先端の水準に達していたが、古代史研究が資料を必要とするというところからいえば、結局殷墟の発掘結果という１本の柱だけで研究を支えることは難しく、全面的な新資料の充実は1950年以後になってからである。最近20年は、中国各地の発掘調査は相次いで展開され、考古資料が大量に累積し、古代社会に対する学者の討論もさらに深まり、中国考古学の黄金時代といえることができるようになった[注5]。しかし、方法論からいえば、新出の資料をどのように合理的に解釈するかは、どんな学問でもつねに心掛ける目標である。近代中国史学研究、とりわけ社会史に関しては、方法論上、理論をもって資料を解釈することと、資料から出発して理論を検証(あるいは新理論の創出)するという二つの論争があり、この二つの方法論にはおのおのその確固たる根拠がある。

本稿では、歴史学の立場から過去数十年の何人かの考古学者が理論的に導き出したものを検討し、考古資料で作った歴史解釈を利用し、その上で中国古代典籍を引用して説明してみたい。新出材料をまとめて述べれば、大筋では世界のその他の地域の歴史と必ずしも相違しないものの、中国の実情にあった中国の特色ある古代史を打ち立てたい。当然、ひとえに考古学自体によって20世紀の中国古代史研究を論じる。とりわけ、考古年代学と考古型式学により古代社会成立の時間と空間を組み立てた。また、歴史学も考古学の多くの成果を採用して発展してきた。そこで、今、考古学と歴史学の二つの方面から説き起したい。

２．考古学による古代史の時間と空間の構造の再構築

歴史学の基本要素は時間である。時代の尺度が確立されなければ、複雑な歴史事件を適当に順序よく配置する方法はなく、本末が変わり、歴史知識がないというべきである。

古代史年代学は資料が少なく、正確さも充分ではない。中国で、はっきりして疑いのない紀元は西周の共和元年すなわち前841年で、この年は一般歴史学の中では新しくないが、古代史の範疇では終末に近い。夏・商・周の三代は、伝統的な年代学で多くの誤差が存在する。例えば、夏朝の成立に関しては約二百年の差があり[注6]、まだよりどころとなる文献があるが、夏朝以前は頼るものはない。『史記・三代世表』で、太史公司馬遷は黄帝から夏代禹王(うおう)までの紀年が不確かで、古代史紀年を充分に証明することが難しいと嘆いた。まし

て、我々が現在研究しなければならない古代社会はなお遠く、黄帝以前のことになる。

かつて、考古学は複雑な考古資料を整理して編年をするために、地層学と型式学に頼ってその年代を組み立てた。[注7] しかし、この種の方法で得られる年代は、ただ相対的意義を具えるだけで、歴史学が要求する絶対性と符合することは不可能である。したがって、考古学と歴史学の年代観はもともと相いれないものである。1950年代になって^{14}C年代測定法が採用され、絶対年代の概念がようやく考古学に入った。^{14}C年代測定法の数値は二、三百年の誤差があるが、地層学と型式学とともに証明されれば、やはり概略的な年代観をうち立てることができる。この方法論はまず夏鼐氏によって推し進められた。[注8] かれは89個の^{14}Cの数値を根拠とし、時間を縦軸に空間を横軸にして、前5000年から前1000年までの重要な文化と大多数の遺跡を、四つの段階・七つの地区に分けて編年し、前2000年(ほぼ伝説上の夏朝の成立に等しい)に歴史の基準点を立てた。これは極めて偉大な業績である。我々は、各々の重要な文化類型にだいたいの年代をあてはめて、その文化要素にふさわしく古代史を再構築する。前5000年から前1000年までの時代は、もともと伝説に属していたが、ついに歴史の流れの中に浮かび上がってきた。これは、粗略ではあるけれども、かえって信じることができ、古史伝説の時代はようやく歴史研究の対象になる可能性をもった。前2000年から前1000年に至るまでの間は、大体夏・商の二代に相当し、^{14}C測定年代の効用は大きくはないが、いくつかの遺跡に関連する歴史問題に対してはなお意義をもっている。

夏鼐氏が引用したのは1975年までに発表された資料で、最近次々と多くの新しいデータが公表され、それを補充した人もあるが、[注9] 夏の基本的な組み立ては依然として有効である。概略的に述べると、前5000年から前3000年は仰韶(ぎょうしょう)文化段階、前3000年から前2000年は龍山(りゅうざん)文化段階、前5000年以前の「前仰韶期」とともに考古学の新石器時代に属し、前2000年以後は青銅器時代に入る。前2000年はほぼ文献史学の夏代にあたり、この前はすなわち伝説的な「五帝」と神話的な「三皇」の時期である。マルクス史学の用語では、前2000年は原始氏族社会と奴隷制の段階である。つまり、社会発展の角度でみれば、村落から国家に入ったということもできる。[注10] 当然、いわゆる前2000年は非常に粗略な定点であり、現在300～500年以上さかのぼる可能性が考えられる。しかし、この時間構造はすでに古代史学者によってよりどころとされ、適当な資料を採用し、ある一つの社会段階の特質を描き、この社会の具体像を再構築している。

1949年以前、中国の考古学的な発掘は点状に分布しており、50年代以後は基本建設につれて、発掘調査が全面的に展開された。30～40年経過し、大量の資料が累積した。これらの出土地点が明確な資料をもとに、蘇秉琦氏は考古学の区・系・類型の考えを提出し、各種文化の時間と空間の関係を築いた。[注11] 彼は、同一のトレンチから出土した遺物の層位関係

を根拠にその類型を比較分析し、層位学と型式学の編年を築き、全国の重要な新石器時代考古遺跡を大きく六つの区域に分けた。すなわち、陝(陝西省)・豫(河南省)・晋(山西省)の中原、山東を中心とした東方、洞庭湖と四川盆地を取り囲む西南、揚子江下流の太湖を中心とする東南、鄱陽湖から珠江三角洲までを中軸とする南方、そして燕山長城地帯の北方である。各区毎に新旧の文化系列や、地域間に互いに錯綜して複雑な文化関係があり、各種の考古資料はそれらの特定の時間と空間の位置にあてはめられる。張光直氏も類似の概念を提出され、「相互作用圏」と称し、中国古代文化形成の過程をはっきりと述べた。(注12)

空間構造と時間構造が同じであるということは、考古学者が古代史学者に送った大きな贈り物である。伝統的な中国の古典が記述した古代史は、もともと華夏(中原地区)を中心としている。黄河下流の「中原」地区を除き、中国国内の各種の人々は「蛮夷」でなければ「戎狄」とされ、筆舌を尽くしてこれらの人々を全力で攻撃した。このような観点は、当然現代歴史学の要求に符合することはできない。考古学の区・系・類型の樹立によって、古代史学は華夏中心の歴史観から離れることができ、ほぼ全面的な歴史の発展を理解することになった。各種文化類型が内在するものをもって、歴史家は古代各地区の文化史を再構築することができるようになっただけではなく、各民族の文化交流を認識することができた。考古学の成果によって古代史にざっと目をとおすと、「戎狄荊舒を討伐する」と古典に書かれるほどではない。

層位学、型式学にかかわらず、あるいは^{14}C測定年代を参考にして築いた考古学の文化の発展系列はみな考古学者の領分で、別の分野が代わって行うのは難しい。現在にいたるまで、考古学が中国古代史研究に対して貢献したと評価される最も具体的なものは、時間と空間の構造のほかにない。これを基礎とすれば、古代史研究がようやく厳粛な歴史学の要求にこたえることができる。

3．よく社会組織を反映する考古資料の有効性

1950年代に尹達氏が提唱したとおり、考古学者の任務は遺跡・遺物を通して、当時の社会組織と人々の生活を理解することである。(注13) 数十年来、中国の多くの考古学者は考古資料が反映する社会の内部構成と性質を探究し、さらに人類社会進化の規律を論証し、多くの解釈を提出した。若干の成果はあがったが、うまく資料を解釈しているかどうかは議論をまたなければならない。逆に、今ある資料は異なった理解を産み出す可能性があるかどうか、我々も考えなければならない課題である。

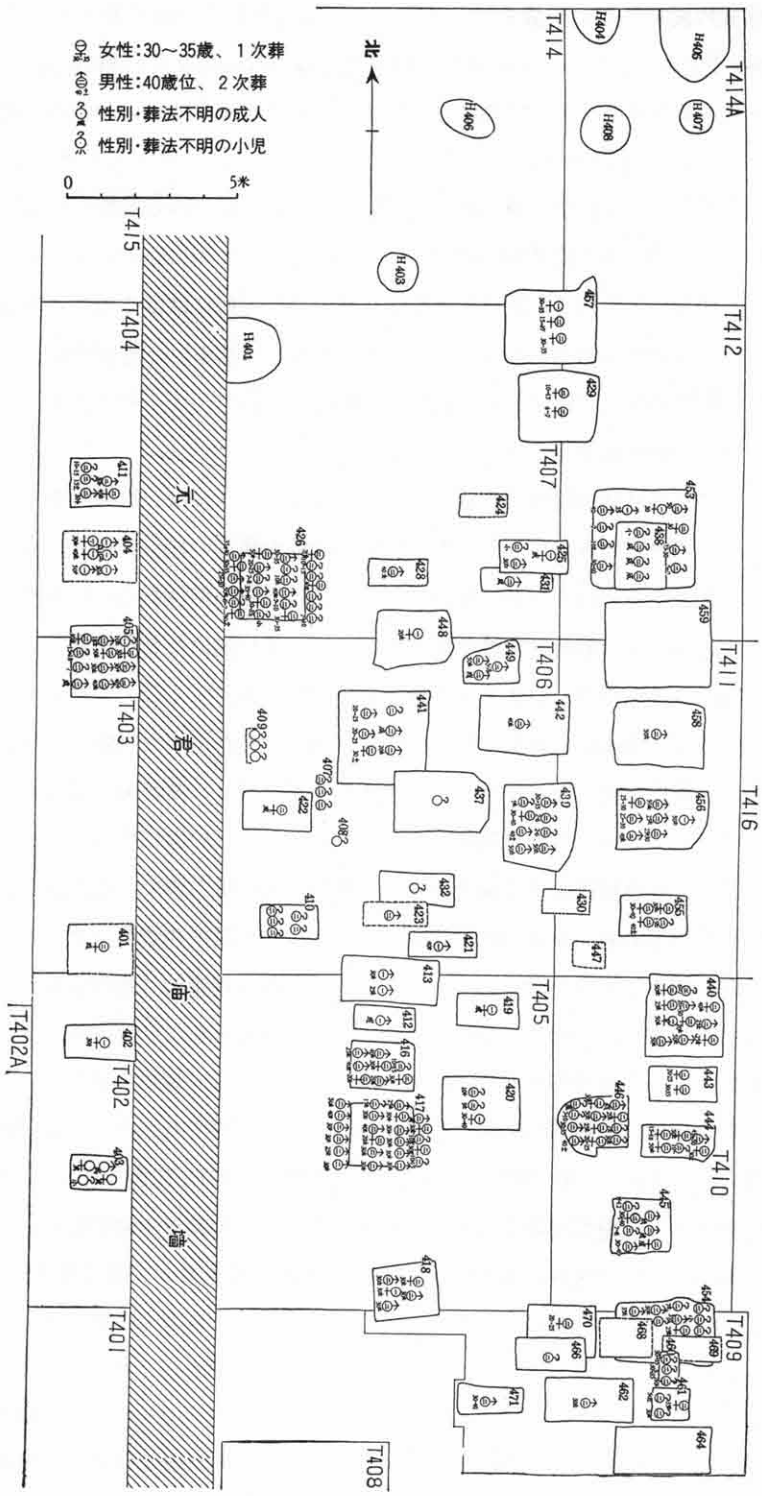
3000年以上続いた新石器時代は、かつて「氏族社会」と総称され、考古学者あるいは古代史学者はその社会構造を論じて、一般に家族→氏族→部族の三つの段階に分け、ある人

は氏族と部族の間にさらに胞族を加える。その社会の性質と変化を論じて、多くの人は「母系」から「父系」になると主張する。母系社会はほぼ仰韶文化に相当し、父系社会はほぼ龍山文化に相当する。ある学者は、所有制を比較的重視して、いわゆる母系社会は基本的には「公有制」、父系社会になってようやく「私有制」に発展すると考える。

これらの説の基本的な根拠を調べれば、1970年代以前には『西安半坡』の資料が比較的詳しい以外、一般的に多くは非常に簡略で、はなはだしいものにいたってはあいまいなものさえある。1970年代には『大汶口』が発表され、1980年代には多くの重要な遺跡の発掘報告が相次いで世に問われた。例えば、『宝鶏北首嶺』、『姜寨』、『元君廟仰韶墓地』、『淅川下王崗』、『鄒県野店』、『膠県三里河』、『青海柳湾』(注14)があり、ようやく氏族社会の内容を詳しく述べた報告書が充実してきた。

考古学者は、氏族社会の組織・性質・変遷を論証するときには、埋葬の方式と集落の配置を根拠にしなければならない。なぜなら、埋葬制度が現実の社会の投影であると確信するからで、一次葬あるいは二次葬、単人葬あるいは多人葬、同性あるいは異性合葬、成人あるいは成人と小児の合葬及び墓壙の配列、墓地の支群の摘出などを根拠として、氏族社会の人間集団の関係を探求し、家族と婚姻の形態を明らかにすることを意図する。この説を支持する学者は、基本的に仰韶文化の多人葬が当時行われていた対偶婚の母系・母権社会をあらわし、龍山文化になって男女一対の合葬墓が出現し、妻が夫に従う父系・父権社会に入ると認識している。これに関係する論文はおびただしい数にのぼり、玉石混淆である。その中でも、張忠培氏の『中国北方考古文集』(1990)は力作で、質が比較的高く、またわりあい体系的である。集落の配置に関して、1970年代以前の資料はかなり少なく、半坡集落が一部分調査されただけであったが、近年『宝鶏北首嶺』、『臨潼姜寨』、『鄭州大河村』と『秦安大地湾』が相次いで発表され、ようやく討論することが可能になった。考古学者は、住居の大小、家屋群の形態、広場、環濠、墓地そして窯跡の分布から、氏族社会の集団・階層を説明し、彼らの生産関係を推測し、各段階の所有制から社会発展を論断した。この種の研究方法は、厳文明氏の『仰韶文化研究』(1989)を代表とすることができる。

張忠培氏著述の『元君廟仰韶墓地』は、墓が反映する社会制度を詳細に研究したものである。陝西省華県元君廟遺跡の仰韶文化では、1か所に多人数が二次合葬された墓地で、六列あり、各列は若干の合葬墓からなっている。報告では、墓地を近接するもの同志で二区に分け、それぞれを三期に区分した。張忠培氏は、墓地の配列と埋葬形式が死者の生前の社会組織を反映させることができると考え、北米インデアンの氏族社会の墓地を参考にして、各土壙は一つの家族を代表し、区分した二区は二つの氏族を代表し、墓地全体で一つの部族になると考えた。合葬墓に葬られた者は性別も年令も違う。年令が違うことは世



元君廟遺跡　仰韶文化半坡類型墓地図

代が違うことを意味する可能性がある。ただし、二次葬であるため、骨の鑑定で成人あるいは小児を決められても、親族内の長幼の序列に必ずしも対応するとはかぎらない。同じ墓壙に葬られた成年男女の多くはペアになっておらず、性別が異なっても夫婦である可能性はない。同じ墓壙に葬られている者は直系親族でなければ姻族であるという前提で、張氏は同じ墓壙の死者は同じ血縁の成員で、母系氏族の組織を反映していると推断した。[注15] 年代が元君廟よりやや新しい渭南史家村仰韶墓地でも多人数の二次合葬が流行している。そこでは、成年男女の人数が同じものもあるが、異なったものもある。また、ある墓壙では小児までも一緒に葬られているが、ペアの成年男女あるいはペアの成年男女と小児の合葬墓はまだ発見されていない。だから、張忠培氏は母系社会と定めたのである。[注16]

もし、多人数二次合葬墓が母系社会を示すならば、成年男女二人の合葬墓は父系社会の標識であるかもしれない。時期的に新しい考古資料によれば、西は甘粛・青海(例えば蘭州土谷台、永昌鴛鴦池、楽都柳湾の半山－馬廠文化)から、東は山東(例えば泰安大汶口、鄒県野店及び江蘇省邳県大墩子大汶口文化後期)に到るところでは、皆ペアーの成年男女、ペアーの成年男女及び小児、成年男子及び小児、はなはだしいものでは男１人と女２人の合葬墓も出現する。これらの合葬墓は、当時の社会ではすでに父系が主になっていることを反映していると、張忠培氏は考えた。その後、斉家文化の柳湾と武威皇娘娘台遺跡では、葬法及び副葬品の配置が男子の権威と男尊女卑を十分に現している。張氏はこれらの前後する時期の墓を総括して、父系制は一つの発展過程を経て、おおよそ前2300年になって黄河流域に等しく父権制がはいってきたとまとめた。[注17]

中国古代の「氏族社会」は、「母系」から「父系」に至る過程を経たかどうかは、全面的な考察に値する問題で、本文では十分に論じることはできない。現在、我々はただ考古学者が資料を根拠として作り上げた解釈が合理的かどうかに関心がある。元君廟・史家村の墓地の配置と編年は妥当ではないと疑う人もいる。[注18] 考古学者の発掘技術に関する議論についてはここでは論じない。上述の張氏の立論の根本的な前提は以下のとおりである。すなわち、埋葬施設が社会制度を反映することができるとする主要な根拠は、モルガンの北アメリカインディアン氏族社会と埋葬施設の研究で、いわゆる「およそ肉親は、おたがいに遺体になっても、永遠に分れることはない」ことによる。ただし、埋葬方式は一種の習俗であって、社会組織・構造とむしろ必然的な関係はないと認識する方がいいという人もいる。汪寧生氏は、世界民族誌の二次合葬の例を列挙し、合葬は各民族のそれぞれ異なった宗教・信仰を反映し、「母系家族」とは関係がないことを証明した。[注19] 邵望平氏も中国文献上の少数民族の資料を根拠として、合葬墓は一種の信仰あるいは霊魂観念と関連する可能性があると推測した。[注20] 同様に民族誌から出発しても、考古資料に対する解釈はこのよう

にまったく異なっている。したがって、モルガンの「古代社会」の論断はただの一説であり、通説にすることは不可能であることがわかる。

しかし、いわゆる埋葬法が社会を反映するという説が直面する最大の難関は、おそらく考古資料自身からくるものであろう。考古学者は、埋葬制度を利用して新石器時代の社会組織を証明しようとしたが、実際、新石器時代の合葬の風習は普遍的ではない。たとえ上述の遺跡であっても例外ではなく、当時は単人一次葬が主であった。ここまでが方法論上の矛盾。第二は、時間の矛盾である。一歩譲って、方法論上、特殊な遺物を根拠に普遍制度を考えてみても、氏族社会がいわゆる母系から父系に変わるという発展序列に照らし合せて述べれば、多人数二次合葬の母系制はまさに新石器時代前期にかなり発達していなければならないはずである。しかし、現在の資料は、仰韶文化半坡類型前期では一人一次埋葬が実施されていたことを表しており、多人数二次合葬の初見は半坡類型後期で、汪寧生氏はおおよそ前4500～3000年に流行し、前3500年前後に頂点に達したと推測した。[注21] 張忠培氏は、大汶口文化を討論して、合葬は劉林期にはじまり、花廳期に繁栄し、西夏侯には衰退し、龍山文化になって合葬の痕跡はみられなくなると指摘している。[注22] これは、新石器文化のある段階で比較的流行した一種の埋葬習俗だから、その起伏曲線は「母系」氏族社会の興廃の歴史と決して符合しない。母系説によれば、まさに半坡早期・姜寨一期と下王崗一期は、もっとも肉親が分離してはならないはずであるが、この時期はほとんどみな単葬である。そして、「母系」氏族社会が下り坂にさしかかり、いわゆる肉親不離の規則が弛るむときに、かえって肉親がいつまでも分離しない多人数二次葬の出現が開始される。第三は、空間の矛盾である。張忠培氏は、半坡類型の埋葬法に地域差が存在すること、つまり涇水（けいすい）以西は一人一次葬が主で、涇水以東は多人数二次葬であると認識した。[注23] 厳文明氏は、半坡類型文化の埋葬制度を四期に分けて、多人数二次合葬の流行はただ陝西省東部の一隅のみに限られており、広々とした涇渭区と隴東（ろうとう）区（甘粛省東部）ではすべて一人一次葬が実行されたと考えた。[注24] 同じ仰韶文化半坡類型に属し、同じ関中の一隅にあって、時代が接近し、地域が近接していても、埋葬制度がこのように異なっているのである。したがって、単葬・合葬が確かに埋葬習俗ではあるが、社会形態の進展変化を推測するのは不可能である。

いわゆる母系・母権社会では家産を女性が所有するため、母から娘への相伝が主要な継承方法となり、その考古学的証拠はいわゆる女性の厚葬である。この論を支持する者は、往々にして副葬品の平均的数量を列挙して半坡類型期の女性が男性に比べて普遍的に厚葬であることを証明した。しかし、厳文明氏は、元君廟・史家村・姜寨・半坡・北首嶺・紫荊（けい）・王家陰注（いんけい）・何家庄村などの遺跡で男女の埋葬施設（一人または同性合葬）の副葬品の統計作業を行って、男女両性の副葬品の数量がだいたい等しいことを発見し、女性の方が男

性よりも多いという説は偏った資料をもとにした誤解であることを証明した。[注25] その埋葬施設の記録カードを調べると、男女両性の副葬品の数量は個別状況によって差があるものの、平均数はたいした差ではない。この論を支持する者は、半坡あるいは姜寨の女児特殊厚葬の例を繰り返し引用して母権制を説明する。ところが、なんと姜寨には男児の厚葬例が存在するのである。また、下王崗仰韶文化一期(報告者は陶器の形態を根拠にその年代を古く西安半坡下層に比定しており、当然一般的ないわゆる母系社会隆盛期に属するべきである)からいって、副葬品を有する埋葬施設は男性の方が女性よりもかえって多い。個々人の副葬品の数量も男性の方が女性よりも多い。[注26] したがって、仰韶文化がいわゆる母系・母権社会であるという概念は、財産と継承の面でも合理的な根拠を欠いている。

埋葬施設の他に、集落遺跡を利用して社会組織を再構築する考古学者もあり、厳文明と鞏啓明両氏が行った陝西省臨潼県姜寨一期村落の配置の分析が最も代表的なものである。[注27]

この遺跡には五つの大きな家屋があり、各大家屋付近には若干の中・小型家屋があって、一つの氏族を構成している。五組の家屋が規則的に配列されているので、それらの間には必ず血縁関係があり、更に高い社会組織に属すると推測される。厳氏は、姜寨一期をちょうど母系社会の発達期にあたると認識し、当然「胞族」がこのクラスの組織に存在すべきで、したがって村落全体は部族ではなく一胞族になると推定された。彼は華陰横陣村の一つの大土壙の中に若干の小土壙を配するという特殊な葬法を分析した結果、各小土壙には若干の人を合葬しており、当時は少なくとも二つの社会組織が存在していたと断定した。[注28]

考古学者は、各クラスの社会組織に対して異なった認識をもっているが、社会の階層構造と「氏族」の発展段階の度合いからいえば、彼らにはほとんど異議はない。主要な相違点は社会構造の解釈にあり、厳文明氏は家系の概念を放棄し、「所有制」と生産関係に着目した。[注29] 半坡・姜寨の中小型家屋から出土した工具と生活用具(大型家屋ではまだみられない)は、生産と消費の単位であることを示す。小家屋の空間は、わずかに一組の夫婦及び1・2名の未成年子女が収容されるだけであるが、竈(かまど)と炊飯具を持つことはある種の形式の「家庭」であろう。ただし、当時の生産工具の原始性からみて、一組の夫婦が独自の労働をしたとすることは困難であり、この種の家庭はおそらく独立の経済単位とはなりえない。小家屋は狭くて子供と一緒に生活できず、このような家庭は後の世代とは明らかに差があり、完全な社会単位とみなすことは不可能である。多くの小家屋(家庭)がともに一つの大家屋を環状に取り囲んで構成した「氏族」組織は、一まとまりの生産単位であると推断される。集落外の農耕地・森林・牧場が氏族単位に分かれているかどうかは、今は調べることはできないが、集落の求心力(共同体規制)が強ければ、全集落の公共の土地に属するものとも推測される。厳文明氏が氏族社会組織を基礎として唱えた三級所有制(集団

所有制)は、皆「公有制」に属する。

いわゆる仰韶文化早期の集落の求心力が強いということは、明らかにその建物配置に現われていることである。姜寨の五群の住居跡の入り口は、皆中央広場を向いており、村落の四周には自然河川と人工の環濠があって周りを取り囲んでおり、防衛の役目を果たしている。半坡と姜寨は、集落構造がまったく同じようであり、それらと北首嶺・大地湾は集落内の家屋の分布及び対外防御措置がまた基本的に同じで、当時の同集落内の成員の結束力と一体感を明らかに示している。ただし、鄭州(ていしゅう)大河村仰韶文化晩期遺跡では、集落は一条の古河道によって二つの部分に分けられるようになる。この集落は、もとは姜寨一期と同一の集団である可能性があり、仰韶文化晩期になって二つに分かれ、お互いの関係が早期の密接さにおよばないことは明らかである。厳文明氏は、「この現象は『胞族』クラスの社会組織の解体を意味する可能性があるが、この二つの集団は依然として婚姻・共同防衛で互いに過不足を補い合っている」と説いている。(注30) 原始社会集落の結束力の解体は、すなわち公有制の滅亡を意味し、「公有」に相対するのは「私有」であるから、それは私有制の誕生を意味する。

人類が村落生活を開始して以後、厳格な公有制が存在したかどうかは、ここでは十分に論じることはむずかしい。ただし、副葬品が一種の私有財産であると認めるならば、個別の副葬品の質によって早くに区別があり、少なくとも相当程度の「私有」の存在を承認しなければならず、換言すれば、新石器時代早期の考古資料は当時私有財産があったことを肯定している。半坡類型ではたとえ異性あるいは同性であっても、副葬品にはすべて多寡がある。この点すでに張忠培氏の指摘があり、彼の分析研究によれば、この時期の個人あるいは家族が占有する財産(個別財産)は著しく不均等であるから、母系・母権社会の中に私有制が存在すると考えられる。(注31) この点からすれば、厳文明氏が集団生産によって推論した「公有制」の理論はたちまち矛盾に陥る。仮に、いわゆる「公有制」理論がもっぱら土地などの不動産を指していうならば、中国の伝統的な文献史料によると、土地の各種「公有」形式は古代まで依然長く続いている。たとえば、いわゆる「私有制」がただ動産を指すとしても、しかし後世の儒家が「父母存不有私財」(『礼記・曲礼上』)とあるように、いわゆる私有制の観念はたとえ古代であっても相対的に希薄である。厳文明氏は、新石器時代社会の性質と変遷を論じて、「母系」から「父系」に至る法則を放棄し、別の一種のモデル、すなわち「公有制」から「私有制」を採用したが、家系説に比べて問題も多い。

新石器時代を総合してみると、早期から晩期にいたる数千年間は、一般埋葬施設の副葬品は早期に比べて晩期の方が確かに豊富で、時代が新しくなるほど、生産力が高まることを反映している。同時期においても、個別の埋葬施設の副葬品は徐々にかけ離れていき、

同一社会内の貧富の差がますます大きくなることを反映している。集落形態は、早期には求心性をもっていたが晩期には拡散していき、原始社会組織群が日に日に瓦解することをも明らかにしている。要するに、原始社会はまさに一歩一歩崩壊の道を歩んでいった。その原因を追及すれば、「家系」あるいは「所有制」は一種の参考概念にすることができても、古代社会は遥かに遠く、現在把握することのできる資料は断片的である。昔から中国内外の学者であっても、獲得できる古代史の知識は、例えば無理にひさごで海水を汲み尽くそうとするようなものであり、中国古代史を解明する道程は遥かに遠い。

（以下、次号）

本論文は、『考古』1992年4期（科学出版社）に掲載された「考古学与中国古代史研究——一个方法学的探讨」の邦訳で、訳述を公表するにあたって、杜正勝先生の承諾を得た。

（Du Zheng Sheng＝中央研究院歴史語言研究所）

（訳者・木下保明＝（財）京都市埋蔵文化財研究所）

注1　李玄伯：『古史問題的唯一解決方法』、『現代評論』1巻3期、1924年、『古史辨』第一冊下編所収

注2　陸懋德：『評顧頡剛古史辨』、『清華学報』3巻2期、1926年、『古史辨』第二冊下編所収

注3　傅斯年：『歴史語言研究所工作之旨趣』、『歴史語言研究所集刊』1本1分、1928年

注4　李済：『再談中国上古史的重建問題』、『歴史語言研究所集刊』33本、1962年；『中国上古史之重建工作及其問題』、『民主評論』5巻4期、1954年を参考にした。すべて張光直・李光謨編『李済考古学論文選集』、北京、文物出版社、1990年所収。

注5　「中国考古学的黄金時代」は普遍的な体験で、関係する引述には蘇秉琦主編『考古学文化論集・2』（文物出版社、1989年）所収、兪偉超『我国考古工作者的歴史責任』、張忠培『浅談中国考古学的現在与未来』と蘇秉琦『中国考古学从初創到開拓』の三論文を参考にすることができる。彼ら3人は現在のいわゆる「黄金時代」に対して皆満足しておらず、更に高い期待を提出した。

注6　杜正勝：『夏代考古及其国家発展的探索』、『考古』1991年1期。

注7　蘇秉琦：『地質学与器物形態学』、『文物』1982年4期、『蘇秉琦考古学論述選集』、北京、文物出版社、1984年所収を参考にした。

注8　夏鼐：『炭素—14測定年代和中国史前考古学』、『考古』1977年4期。

注9　例えば、安志敏：『炭素—14断代和中国新石器時代』、『考古』、1984年3期。

注10　杜正勝：『从村落到国家』、『中国文化新論・根源篇』、台北、聯経出版公司、1980年を参照。

注11　蘇秉琦：『関于考古学文化的区系類型問題』、『文物』、1981年5期、『蘇秉琦考古学論述選集』所収。また前掲『中国考古学从初創到開拓』。

注12　Kwang-chih Chang, The Archaeology of Ancient China, Fourth edition, Revised and Enlarged, Yale University Press, New Haven and London, 1986年。

張光直：『中国相互作用圏与文明的形成』、『慶祝蘇秉琦考古五十五年論文集』、北京、文物出版社、1989年。

注13　尹達：『新石器時代』、北京、三聯書店、1955年、226頁。

注14　中国社会科学院考古研究所、陝西省西安半坡博物館：『西安半坡』、1963年。
山東省文物管理処、済南市博物館：『大汶口』、1974年。
中国社会科学院考古研究所：『宝鶏北首嶺』、1983年。
西安半坡博物館、陝西省考古研究所、臨潼県博物館：『姜寨』、1988年。
北京大学歴史系考古教研室：『元君廟仰韶墓地』、1983年。
河南省文物研究所、長江流域規劃辨公室考古隊河南分隊：『淅川下王崗』、1989年。
山東省文物考古研究所：『鄒県野店』、1985年。
中国社会科学院考古研究所：『膠県三里河』、1988年。
青海省文物管理処考古隊、中国社会科学院考古研究所：『青海柳湾』、1984年。
以上これらの本はすべて文物出版社の出版である。

注15　前掲『元君廟仰韶墓地』、52～83頁。
張忠培：『元君廟墓地反映的社会組織』、『中国北方考古文集』、北京、文物出版社、1990年所収。

注16　張忠培：『史家村墓地的研究』、『考古学報』1981年２期、前掲書63～65頁。

注17　張忠培：『中国父系氏族制発展段階的考古学考察—対含男性居本位的合葬墓的墓地的若干分析』、『吉林大学社会科学学報』1987年１・２期、前掲書278頁。

注18　伊竺：『関于元君廟史家村仰韶墓地的討論』、『考古』1985年９期。

注19　汪寧生：『仰韶文化葬俗和社会組織的研究—対仰韶母系社会説及其方法論的商榷』、『文物』1987年４期、『民族考古学論集』、北京、文物出版社、1989年所収。

注20　邵望平：『横陣仰韶文化墓地的性質与葬俗』、『考古』1976年３期。

注21　汪寧生前掲書、117～119頁。

注22　張忠培：『中国父系氏族制発展段階的考古学考察』、前掲書155頁。

注23　張忠培：『史家村墓地的研究』、前掲書58頁。

注24　厳文明：『半坡類型的埋葬制度和社会制度』、前掲書280～282頁。

注25　厳文明前掲書291～295頁。

注26　『淅川下王崗』、333・338～339頁。

注27　鞏啓明･厳文明：『从姜寨早期村落布局探討其居民的社会組織結構』、『考古与文物』1981年1期。
厳文明：『姜寨早期的村落布局』、『仰韶文化研究』所収。

注28　厳文明：『横陣墓地試析』、『文物与考古論集』、文物出版社成立三十周年紀念、1986年、『仰韶文化』所収。

注29　厳文明：『半坡類型的埋葬制度和社会制度』、前掲書296頁。

注30　厳文明：『仰韶文化房屋和聚落形態研究』、『仰韶文化研究』　238頁。

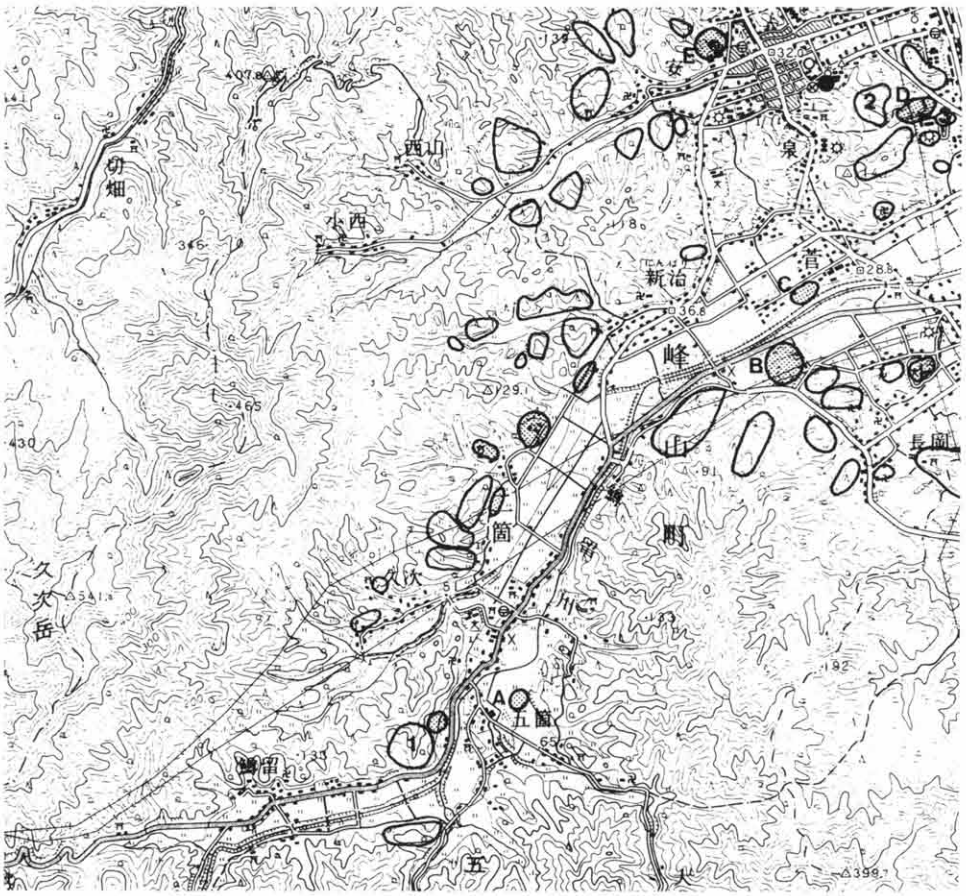
注31　張忠培：『母権制時期私有制問題的考察』、前掲書75頁。

金谷１号墓の発掘調査

石崎善久

１．はじめに

今回報告する金谷１号墓は、京都府中郡峰山町字鱒留（たるどめ）小字金谷（かなや）に所在する。国道312号線改良事業に伴い新たに発見され、調査の結果、弥生時代の墳墓であることが明らかとなった。そこで遺跡名称としては金谷１号墓と呼称し、同一丘陵に所在する古墳とは区別す



第１図　調査地位置図及び周辺主要弥生時代遺跡分布図(1/50,000)
1.金谷１号墓　2.カジヤ墳墓群　3.七尾墳墓群
A.中岡遺跡　B.途中ヶ丘遺跡　C.菅沖波遺跡　D.扇谷遺跡　E.古殿遺跡

ることとした。調査は平成６年４月25日から着手し、平成６年９月２日に全ての現地調査を終了した。

調査地周辺の弥生時代の主要遺跡について概観してみると、金谷１号墓の正面には弥生土器の出土が伝えられる中岡遺跡が所在する。鱒留川を下ると弥生前期の拠点的集落である途中ヶ丘遺跡・扇谷遺跡などが存在する。また、丹後でも有数の弥生後期から古墳時代前期にかけての集落と考えられる古殿遺跡がある。古殿遺跡は当該期の拠点的な集落と考えられ、周辺に所在する墳墓との関係など問題になる点が多い。

当墳墓の調査でもっとも大きな成果として、腐植した木棺の棺材痕跡が極めて明瞭に検出された点にある。丘陵上の墳墓の調査では木棺の腐植痕跡を土色変化として認識し、失われた木棺の構造・形態などを調査するが、土壌あるいは腐朽過程などさまざまな理由により実態の把握が困難な場合が多い。今回の調査では、木棺材が基本的に淡黄灰色細砂に置き換わっており木棺の形態あるいは棺材の組み方などについてかなり詳細な観察を行うことができた。

２．調査概要

墳墓は東西にのびる主丘陵腹部から派生する枝尾根先端に立地する。墳墓からの眺望はよく、鱒留川の形成した谷地形を一望することができる。

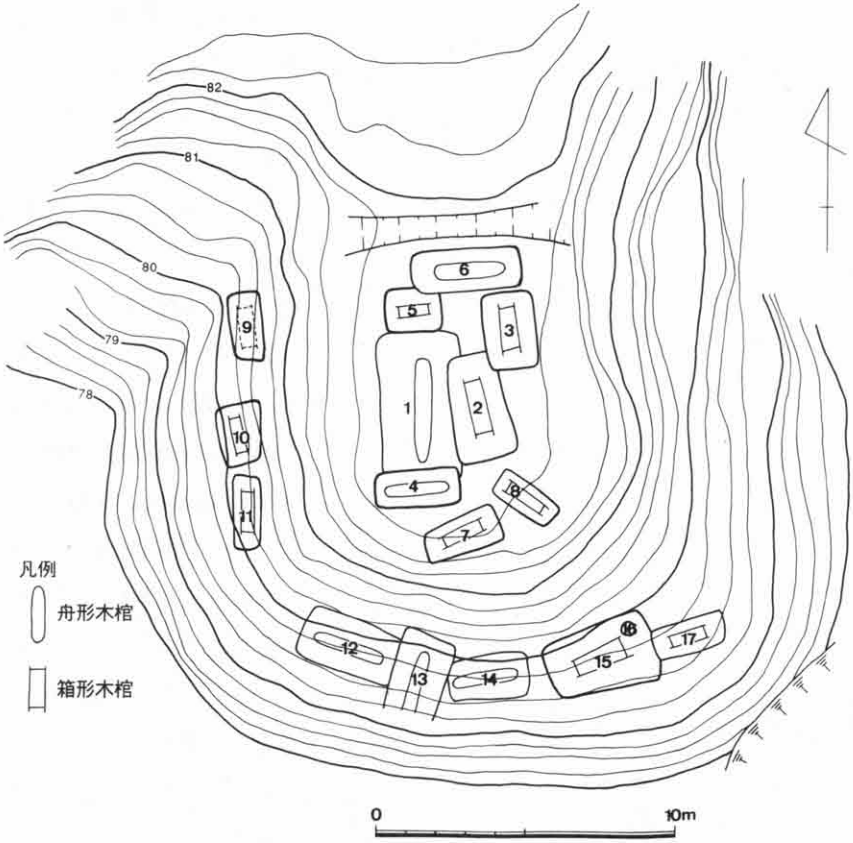
墳丘は地山整形により三方向を削りだした方形墳墓である。また、墳丘北側には自然地形と切り離すために幅0.9m・深さ0.3mを測る直線的な溝が設けられている。盛り土による墳丘の築成は行われていない。規模は墳頂部平坦面で南北約10m・東西約９mを測る。墳丘の裾部については地山を削り出し、平坦面を造成しているため明瞭に判別できる。基底部分での規模は東西15m・高さ約２mを測る。三方のテラスの規模は西側テラスが幅2.5m、南側テラスが幅2.5mを測る。東側テラスは幅2.5mの掘り込みを行い、その際生じた排土を低位側に盛ることにより平坦面を拡張している。

三方に設けられたテラスの機能については、西・南側の各々のテラスが埋葬施設を設けるためのものであるのに対し、東側テラスでは埋葬施設は検出されなかった。しかし、テラス上でも壺・高杯などの土器類が検出されており祭祀をとりおこなう場であったと考える。

埋葬施設は、墳頂部で８基・東側テラスで３基・南側テラスで６基の総数17基を検出した。土器棺墓である第16主体部を除いていずれも木棺直葬墓である。

各々の主体部については別表にまとめたので詳細は割愛するが、当墳墓の特色として、基本的に２種類の木棺が使用されている点をあげることができる。

一つはくり抜き系の木棺であり、６基の主体部で確認された。木棺の形態は底部横断面

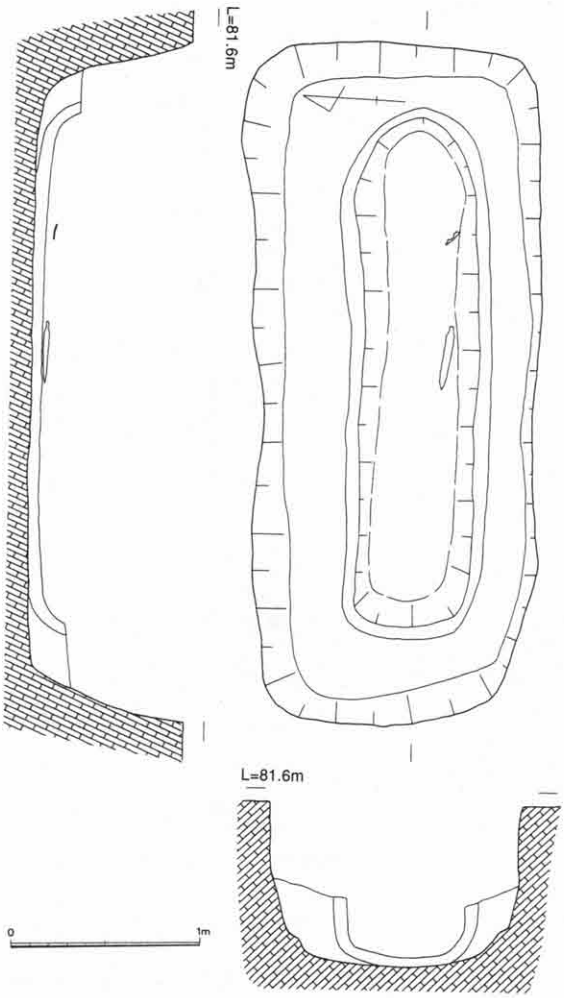


第２図　調査前地形測量図及び遺構配置図

が「U」字状を呈し、小口部分縦断面も垂直には立ち上がらず、カーブを描いて立ち上がる。この木棺については現状では「舟形木棺」として捉えている。なかでも、第１主体部や第６主体部(第３図)では一方の小口が鋭角的に造られており、あたかも、舟の舳先を意識したかのような構造をとっている。木棺の規模も第１主体部では長さ3.9m・幅0.8mを測る長大なものが採用されている。

もう一つは通有の箱形木棺であり、福永伸哉氏分類のⅡ類に相当する(注1)。この木棺は10基の主体部で確認された。棺底材の痕跡の確認できたものでは、いずれも棺底板の上に長側板と小口板がのる構造のものであった。また、いずれの箱形木棺でも長側板が小口板を挟み込む。箱形木棺の規模は平均的なもので長さ1.6m・幅0.6mを測り、人体を埋葬する最低限のスペースが確保されたものとなっている。

墳頂部で確認された８基の主体部についてみてみると、切り合い関係から当墳墓築造の契機となったと考えられる第１主体部は平坦面中央をさけ、わざと西に寄せられて造られている。これは、隣接する第２主体部の埋葬を想定していたためと推測される。また、こ



第３図　第６主体部実測図

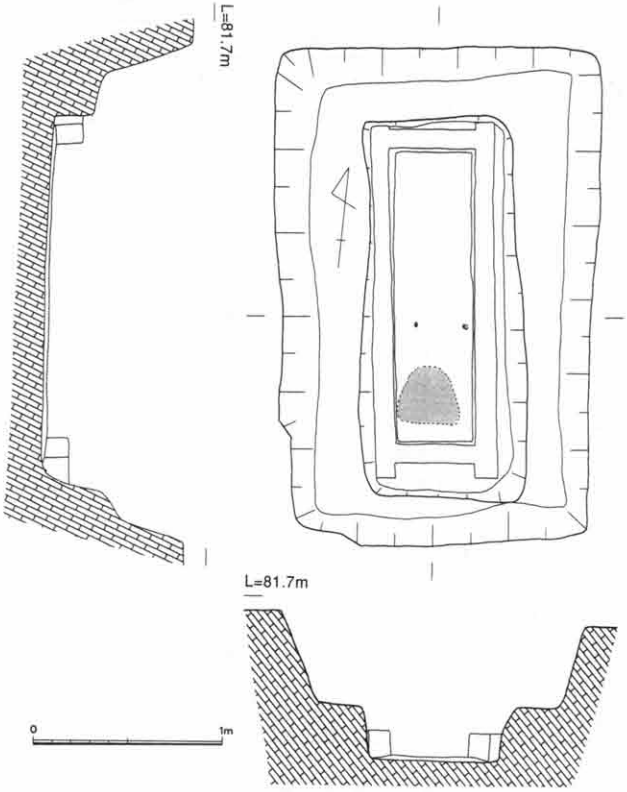
れらの周辺に配置される主体部も他の主体部との切り合いを最小限に押さえるように造られている。木棺の型式に目を向けてみると、南北に主軸をとる第１主体部が舟形木棺であり、それに平行して２基の箱形木棺(第２・第３主体部)が造られている。東西に主軸をとるものは第４～第５主体部であるが第４主体部が箱形木棺である以外は舟形木棺が採用される。第７・第８主体部は箱形木棺であるがこの２者は他の箱形木棺に比べ規模も小さく副葬品も認められなかった。また、主軸方向も他の主体部とは異なり、空いたスペースを利用して埋葬されたものと考えられる。以上のように墳頂部では２種類の木棺が混在した状況を呈している。

一方周辺テラス部分では、木棺形態の違いにより一定のまとまりが認められる。西側テラスでは舟形木棺は認められず、いずれも箱形木棺が採用されている。南側テラスにおいては西側部分に３基の舟形木棺、東側部分に２基の箱形木棺が一つのまとまりをもっており、木棺の形態によりあらかじめ埋葬される場所が決められていたものと推測される。特に第12・14主体部を切る第13主体部はテラスにわざと直交させて造られており、極めて厳密に埋葬箇所が設定されていたものと思われる。なお、当墳墓唯一の土器棺である第16主体部は第15主体部を切って造られている。壺を身に、脚部を打ち欠いた高杯を蓋に転用したものであり、小児棺として使用されたものと考える。

出土遺物には弥生土器、鉄製品、玉類が認められる。土器類は墓壙上面に供献されたと考えられるもののほか、墓壙内に破砕された後にまかれたものも確認された。これら土器の破砕供献は丹後地方や但馬地方で広く認められる。器種には甕、壺、器台、高杯、蓋な

どがある。これらの土器の示す年代観については、今後さらに詳細に検討する必要があるが、現段階では弥生時代後期末から庄内併行期にかかるものと考えている。

玉類は３基の主体部から検出された。いずれも箱形木棺であり、舟形木棺からの出土は認められなかった。中でも第３主体部からは500点近くの玉類が出土している。玉類はガラス小玉が主体であるが、そのほかに翡翠・蛇文岩・ガラス製の勾玉、緑色凝灰岩・碧玉・ガラス製の管玉などがある。



第４図　第３主体部実測図

鉄製品は６基の主体部から検出された。器種には鉄剣、ヤリガンナ、鉄鏃などがある。特殊な出土状況を示すものとして第10主体部をあげることができる。この主体部では墓壙上面に鉄鏃２点の他、破砕された鉄剣、素環頭を模したと考えられる鉤手状に折り曲げられた刀子の柄のみ、鉄斧状鉄製品など約10点の鉄製品が置かれていた。墓壙上面に鉄製品を供献するものとして第15主体部でも鉄鏃が置かれていた。鉄製品を破砕し、供献した例として丹後地方では弥栄町太田４号墳下層土坑１で破砕された鉄剣の供献が確認されている。

３．まとめ

以上のように、金谷１号墓では２種類の木棺が存在する点、鉄製品や玉類など当該期の墳墓としては比較的豊富な副葬品をもつ点などを明らかにすることができた。なかでも、舟形木棺の存在を明らかにする事ができた点は重要である。従来、弥生墳墓では舟を木棺材として転用したものの存在は知られていたが、今回の検出例は舟形木棺が木棺の形式として定着しているものと考えられる。丹後半島では環状乳画文帯神獣鏡を出土した弥栄町大田南２号墳や大宮町左坂古墳群など前期古墳を中心に舟形木棺が検出されている。また、

付表　金谷１号墓検出主体部一覧表

主体部	墓壙形態	墓壙規模(m)	棺形態	棺規模(m)	出土遺物
第１主体部	二段墓壙	５×2.7以上	舟形木棺	3.9×0.8	高杯・赤色顔料
第２主体部	二段墓壙	3.5×1.9	箱形木棺	2.5×0.7	甕・赤色顔料・玉類
第３主体部	二段墓壙	2.7×1.7	箱形木棺	1.6×0.4	玉類(ガラス勾玉・ガラス小玉・緑色凝灰岩製管玉)・環状鉄製品
第４主体部	素掘り墓壙	2.8×1.1	舟形木棺	2.3×0.5	なし
第５主体部	二段墓壙	2.2×1.5	箱形木棺	1.6×0.4	鉄剣・赤色顔料
第６主体部	二段墓壙	3.6×1.55	舟形木棺	2.7×0.6	鉄剣・ヤリガンナ
第７主体部	二段墓壙	2.5×1.2	箱形木棺	1.9×0.5	赤色顔料
第８主体部	素掘り墓壙		箱形木棺	1.6×0.4	なし
第９主体部	素掘り墓壙	2.4×1.0	箱形木棺？	－	なし
第10主体部	素掘り墓壙	2.1×1.5	箱形木棺	1.9×0.5	鉄鏃・不明鉄製品・刀子・壺
第11主体部	素掘り墓壙	1.9×0.9	箱形木棺	1.6×0.4	玉類(翡翠勾玉・ガラス小玉・碧玉製管玉)
第12主体部	素掘り墓壙	3.3×1.9	舟形木棺	2.6×0.7	甕(破砕供献)・高杯・ヤリガンナ
第13主体部	二段墓壙	2.8以上×1.9	舟形木棺	2.6以上×0.8	高杯
第14主体部	二段墓壙	2.7以上×1.5	舟形木棺	2.7×0.7	鉄剣・ヤリガンナ
第15主体部	二段墓壙	3.8×2.4	箱形木棺	2.2×0.8	高杯・器台・ヤリガンナ・鉄剣
第16主体部	円形素掘り	径0.5	土器棺	－	高杯(蓋)＋壺(身)
第17主体部	二段墓壙	2.65×1.0	箱形木棺	2.0×0.5	甕(破砕供献)

滋賀県雪野山古墳や佐賀県久里双水(くりそうずい)古墳など各地の前期古墳からも舟形木棺が検出され類例が増加してきている。金谷１号墓で検出された舟形木棺はこれら古墳時代へ受け継がれていく要素とも考えられ興味深い。現在、出土遺物など整理中であり、さらに検討していくべき問題も多くあるものと思われる。多くの方々にご教示を願う次第である。

（いしざき・よしひさ＝当センター調査第２課調査第１係調査員）

注１　福永伸哉　「５.木棺墓」(『弥生文化の研究』８　雄山閣)　1987年

市坂瓦窯の発掘調査

森島康雄

1．はじめに

市坂瓦窯の発掘調査は住宅・都市整備公団の依頼を受けて行なったもので、相楽郡木津町大字市坂に所在する。

市坂瓦窯は奈良時代の大規模な瓦工房が確認された上人ヶ平遺跡の南西側の小さな谷に所在する。周辺は、太平洋戦争後、筍栽培用の竹林として開墾されたために、谷には多数の瓦片が散布しており、付近に瓦窯が存在することは早くから知られていた。『京都府遺跡地図』では6基以上の瓦窯が存在するとされているが、平成5年度の試掘調査によって、谷の北東側斜面に5基、南西側斜面に3基、合計8基の平窯が確認された。今回はそのうち2基の窯跡の発掘調査を行なった。

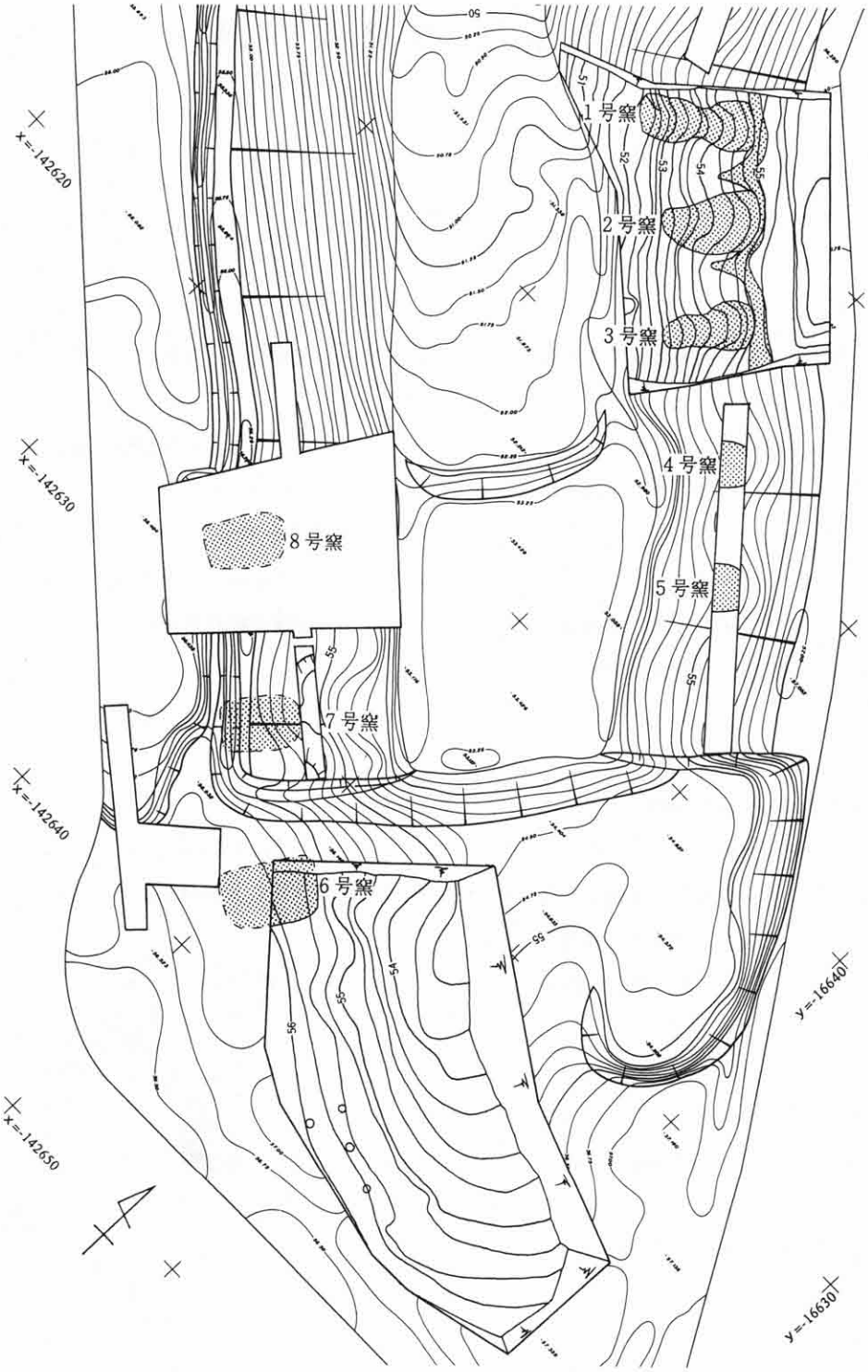
2．調査概要

1）2号窯の発掘調査

2号窯は北東側斜面に築かれた地下式平窯である。2号窯は当初構築された窯の一部が崩落した後に大規模な改修を受けているが、遺跡が保存される方向が固まったために、原則的に改修後の段階までの調査にとどめている。したがって、以下は、改修後についての記述である。

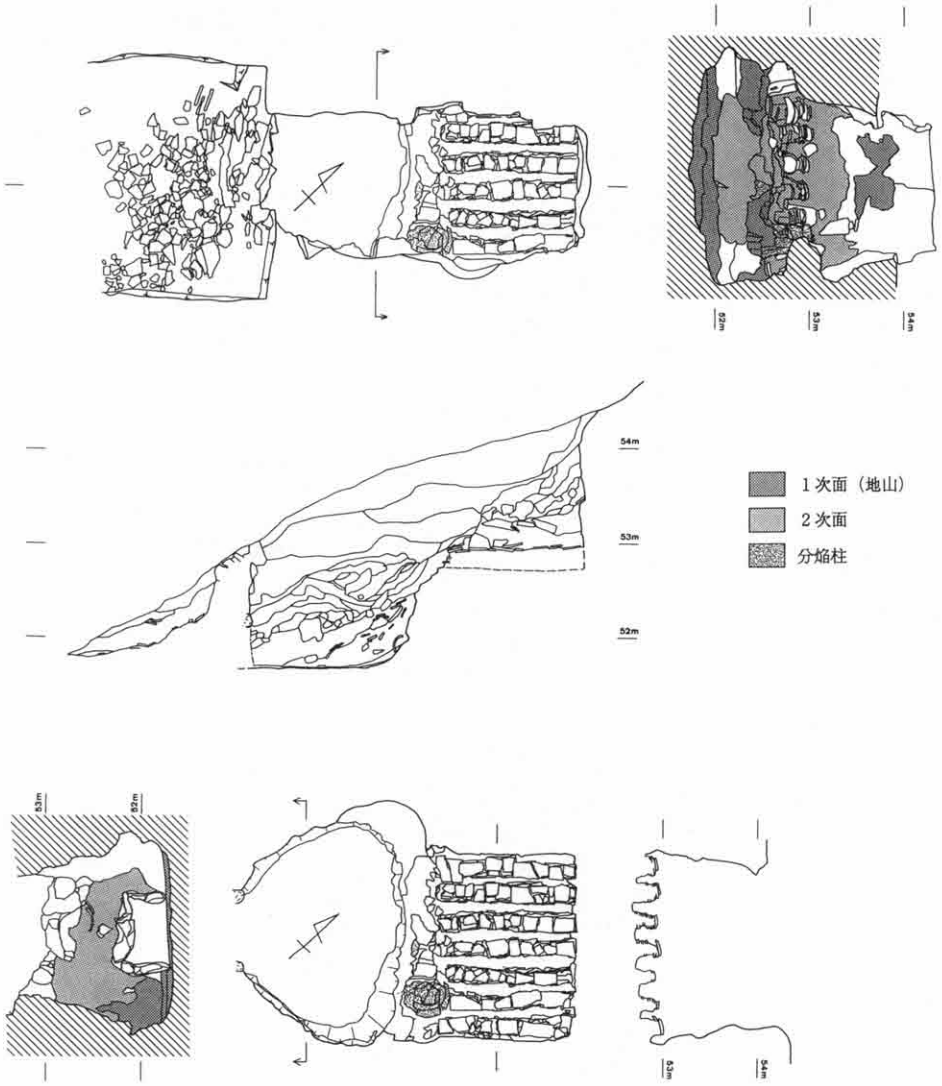
焚口（たきぐち）から奥壁までの全長は3.6mを測る。焼成室床面は幅2.0m、奥行1.4mの長方形を呈し、高さ0.25m、幅0.2m前後の火床が7条設けられている。焼成室側壁は内傾し、側壁が良く残っている部分では検出面における焼成室の幅は1.3mであった。これに対して、焼成室奥壁は床面から垂直に立ち上がっており、奥壁に煙道は認められなかった。焼成室

第1図　調査地位置図(1/50,000)
1.市坂瓦窯　2.上人ヶ平遺跡

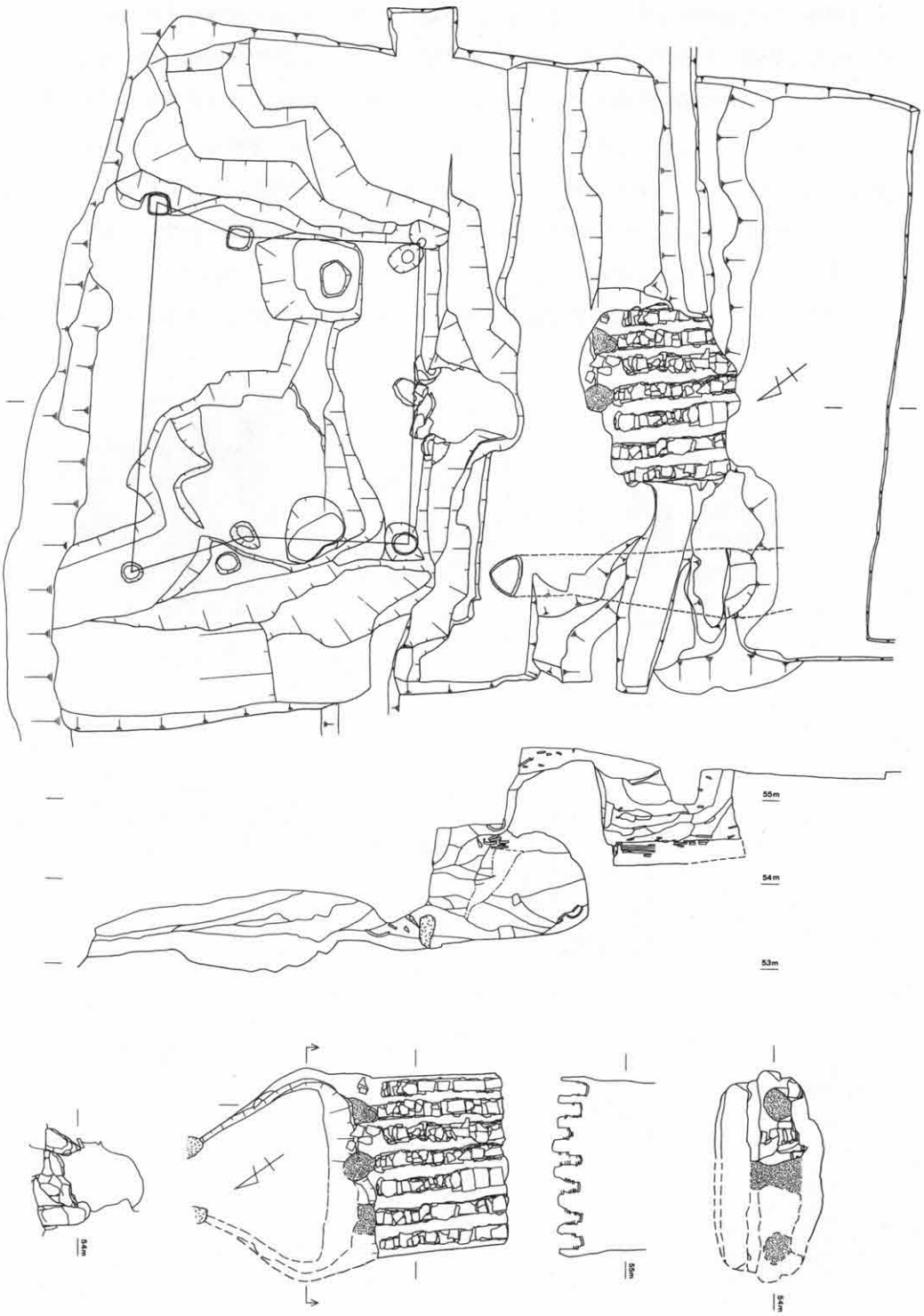

1号窯
2号窯
3号窯
4号窯
5号窯
6号窯
7号窯
8号窯
x=-142620
x=-142630
x=-142640
x=-142650
y=-16640
y=-16630

第２図　検出遺構配置図

と燃焼室を隔てる隔壁は残っていなかった。分焔柱(ぶんえんちゅう)は中央の火床と両側壁から２列目の火床の前面に合計３本設けられていたようで、奥壁に向かって右側の分焔柱だけが残存していた。この分焔柱は地山を掘り残して作られた構築当初の分焔柱の残欠を利用して作られたもので、平瓦および軒平瓦を円形に組合せた中にスサ入り粘土を充填し、外側を粘土で覆ったものであった。７条の火床は３本の分焔柱と、４つの分焔孔にそれぞれ１条が対応している。燃焼室は隅丸三角形を呈し、最大幅2.4m、奥行1.7mを測る。燃焼室床面はほとんど水平で、火床上面との比高差は1.3mを測る。焚口はカコウ岩を鳥居形に組み、幅0.6m、高さ0.35mを測る。焚口の水平に架け渡したカコウ岩の上部は瓦をスサ入り粘土で塗



第３図　市坂瓦窯２号窯実測図(1/80)



第４図　市坂瓦窯８号窯実測図(1/80)

り固めた窯壁が垂直に立ち上がり、燃焼部の天井に続いていたようである。

窯体内の埋土の状況は、以下のとおりである。燃焼室では3㎝程度の炭層の直上に分焔柱が崩落したものと思われるスサ入り粘土と瓦の層が堆積し、その上には窯体片を多量に含んだ崩落土が見られた。したがって、この窯は操業中に分焔柱の崩落をきっかけとして燃焼室天井が陥没したものと考えられる。これによって燃焼室の上部にできた凹みが土層断面図にも明瞭に表れている。これに対して焼成室は、火床上面より20㎝程度上まで流入土が堆積している。製品と考えられる瓦が残っていないことも考えると、燃焼部の崩落にもかかわらず、焼成室から製品を取り出し、しばらくは開口したままの状態で置かれていたものと推測される。焼成室はその後、改修後の奥壁の一部が倒れ込むなどし、やがて窯全体に流入土が堆積したものと思われる。

焚口前面では垂直に立てられた瓦や並べて置かれた窯体片などが検出され、最終操業時に焚口が閉塞された状態を残している可能性が高いと思われた。前庭部の調査は行なわなかったが、1・3号窯が近接しており、後述する8号窯のように独立した前庭部を設ける余地はない。

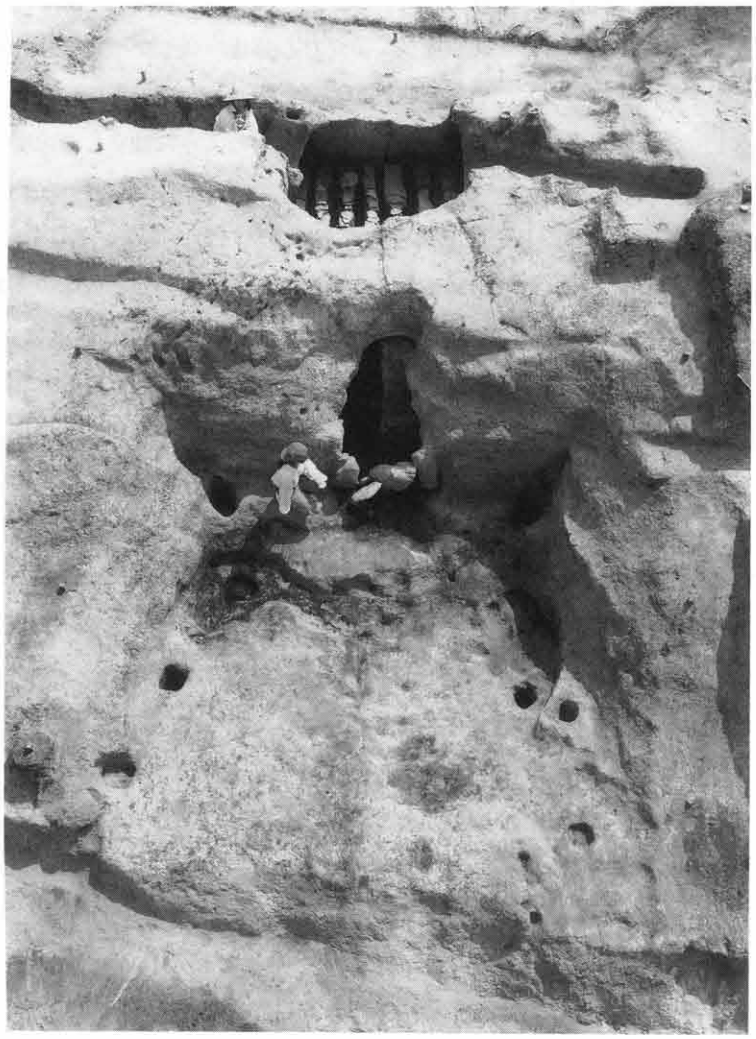
8号窯は南西側斜面に築かれた地下式平窯である。焚口から奥壁までの全長は3.9mを測る。焼成室床面は幅2.1m、奥行1.6mと、2号窯よりも大きいが、火床の条数が2号窯と同様であるために火床の間隔はやや広くなっている。焼成室側壁は垂直に立ち上がり、奥壁が前方に傾斜することは2号窯と対照的である。奥壁に煙道は認められなかった。隔壁の焼成室側の壁面は垂直に立ち上がっている。隔壁には4つの分焔孔が開けられ、地山を掘り残した部分が3本の分焔柱となっている。分焔柱および分焔孔の位置と火床の位置が対応していることは2号窯と同じである。燃焼室は天井が残っていたが、分焔柱に亀裂が入っているなど崩落の危険性が高く、また、遺跡が保存される方向が固まったこともあって南東側半分のみを掘削するにとどめた。燃焼室床面は焚口から奥に向かって緩やかに高くなり、低い段を持って焼成室床面に続く。天井の高さは最も高いところで1.0mを測る。天井は窯体主軸と直交する方向に軸を持ったアーチを描く。焚口は2号窯と同様にカコウ岩を鳥居形に組んで作っていたが、水平に架けた石が折れて落下していた。前庭部は斜面を大きく切り開いて平坦面を作り出している。前庭部にはピットが検出され、上屋が掛けられていたことが判明した。

3．まとめ

市坂瓦窯は、瓦窯において定型化したロストル式平窯が出現する時期に位置付けられるものである。今回の調査では、この時期の瓦窯の構造について多くの新しい知見を得るこ

とができた。また、２基の窯は類似点が多いにもかかわらず、側壁が内傾する２号窯と奥壁が内傾する８号窯、平坦な燃焼室床面から高い段を持って焼成室に続く２号窯と緩やかに傾斜した燃焼室床面から低い段を持って焼成室に続く８号窯というように、相異点も認められた。試掘調査で判明した北東側斜面と南西側斜面の窯の間隔の違いが、独立した前庭部の有無に起因すると見られることも考えると、谷の両斜面で窯を築いた工人集団が異なっていた可能性を指摘することができる。このように、市坂瓦窯の調査は窯構造ばかりではなく、一連の瓦工房跡である上人ヶ平遺跡の調査成果と合わせて当該期の瓦生産の実態を解明するためにも貴重な資料を提供するものと思われる。

（もりしま・やすお＝当センター調査第２課調査第３係調査員）



市坂瓦窯８号窯全景

平成６年度発掘調査略報

12. 北　谷　古　墳　群

所 在 地　熊野郡久美浜町大字女布（にょう）小字北谷（きたたに）・南谷（みなみだに）

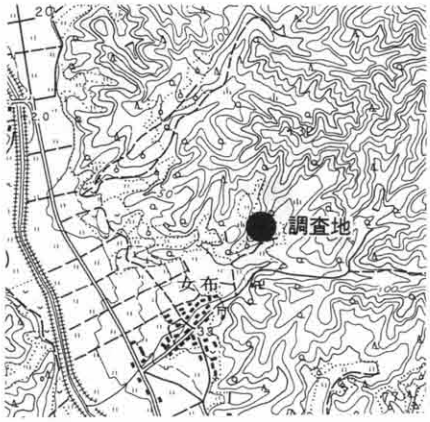
調査期間　平成６年４月25日～同年10月30日

調査面積　約3,500㎡

はじめに　この発掘調査は、農林水産省近畿地方建設局が計画推進している「丹後国営農地開発事業」の女布団地造成に先立ち、同局の依頼を受けて実施した。

北谷古墳は、久美浜町東部を北流して日本海に注ぐ佐濃谷川中流域に位置し、佐濃谷川（さのたにがわ）東岸の丘陵上に位置する。佐濃谷川は、久美浜町域では川上谷川に次ぐ流域面積をもち、集落遺跡、古墳など、数多くの遺跡が分布する。河口部の函石浜遺跡は、弥生時代前期の遺跡としてよく知られている。遺跡は、中流域に集中し、北谷古墳もその一つである。

調査概要　北谷古墳群は、10基からなる古墳群である。古墳は、丘陵頂部と丘陵稜上に５基ずつ分布するが、このうち南にある丘陵稜上の４基を調査した。丘陵先端の１号墳は、南北約36m・東西約40mの大型の楕円形墳である。墳頂部には東西約15m・南北25mの平坦面があり、この平坦面の南よりに東西主軸の主体部が１基設けられていた。主体部は、２段墓壙で長さ7.8m・幅約3.8mで、下段墓壙は6.5m・幅約２mを測る。墓壙底面で全長約６m・幅約70cmの組合式木棺痕跡を検出した。出土遺物には、墓壙埋土上面に列状に配置された土器群と、棺内の西木口付近で出土した紡錘車形石製品、鉄製槍先、鉄製のみなどがある。前期古墳である。３～４号墳は、径10mの小円墳で３基が裾を接して築造された木棺直葬墳である。３号墳墳丘から５世紀末の須恵器瑳の口縁部、４号墳主体部から鉄剣、鉄鏃、刀子が出土した。中期から後期初頭にかけて築造された古墳であろう。この丘陵の基部側で京都府教育委員会が５号墳を調査し、径20mの前期古墳であることがわかった主体部から碧玉製管玉、琥珀製勾玉などの玉類が出土した。　（田代　弘）



調査地位置図(1/50,000)

13. 奈具墳墓群・奈具古墳群

所 在 地　竹野郡弥栄町黒部奈具・溝谷

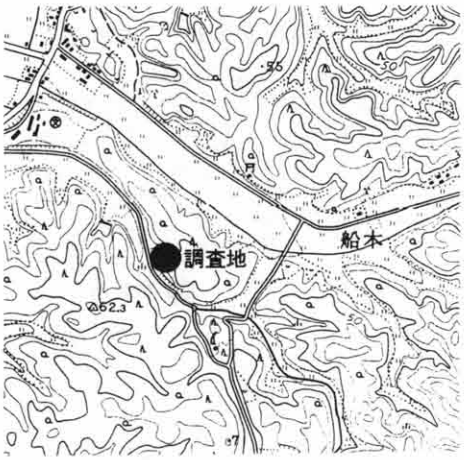
調査期間　平成６年５月13日～同年10月７日

調査面積　3,030m²

はじめに　奈具墳墓群・奈具古墳群は、竹野川右岸の沖積地に張り出した、舌状の台地上にある(第１図)。調査地周辺、特に奈具の集落から黒部にかけてはゆるやかな台地であり、弥生時代以降の土器片の散布が各所で認められる。

平成２年度には、国営農地造成に伴って、調査地の向かい側の丘陵斜面(奈具岡遺跡)と水田部(奈具谷遺跡)が発掘調査され、注目すべき成果があった。まず、奈具岡遺跡では、弥生Ⅲ期後半の緑色凝灰岩と水晶を原料とする一貫した玉作り工房が確認された。また、奈具谷遺跡ではトチの実の灰汁抜き場が見つかり、丁字頭勾玉をはじめ、大量の土器・木製品が出土した。これらの成果は、丹後地域の他の弥生集落と比較しても破格であり、この地区が弥生時代中期の竹野川流域の拠点集落の一つであったことは確実である。

今回の発掘調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の奈具岡団地造成工事に先立ち、同局の依頼を受けて実施した。着手前には、雑木林中にマウンドや階段状地形が認められ、古墳を想定して試掘坑を設けたが、弥生土器が検出されたため、弥生墓の可能性も考慮して面的調査へと切り替えた。なお、この遺跡は遺跡地図には載っていない。したがって、弥生墓の地点を奈具墳墓群、古墳の地点を奈具古墳群と名付けたが、奈具古墳群は別に1～12号墳があって、本遺跡の西方500mに位置するため、この地区の古墳は13～15号墳とすることにした。



第１図　奈具墳墓群・奈具古墳群位置図(1/25,000)

調査概要　奈具墳墓群の調査では丘陵頂の平坦面に７基の弥生墓が築かれていた(第２図)。築造時期は、弥生時代中期後半である。これらは墳形・規模などにより、

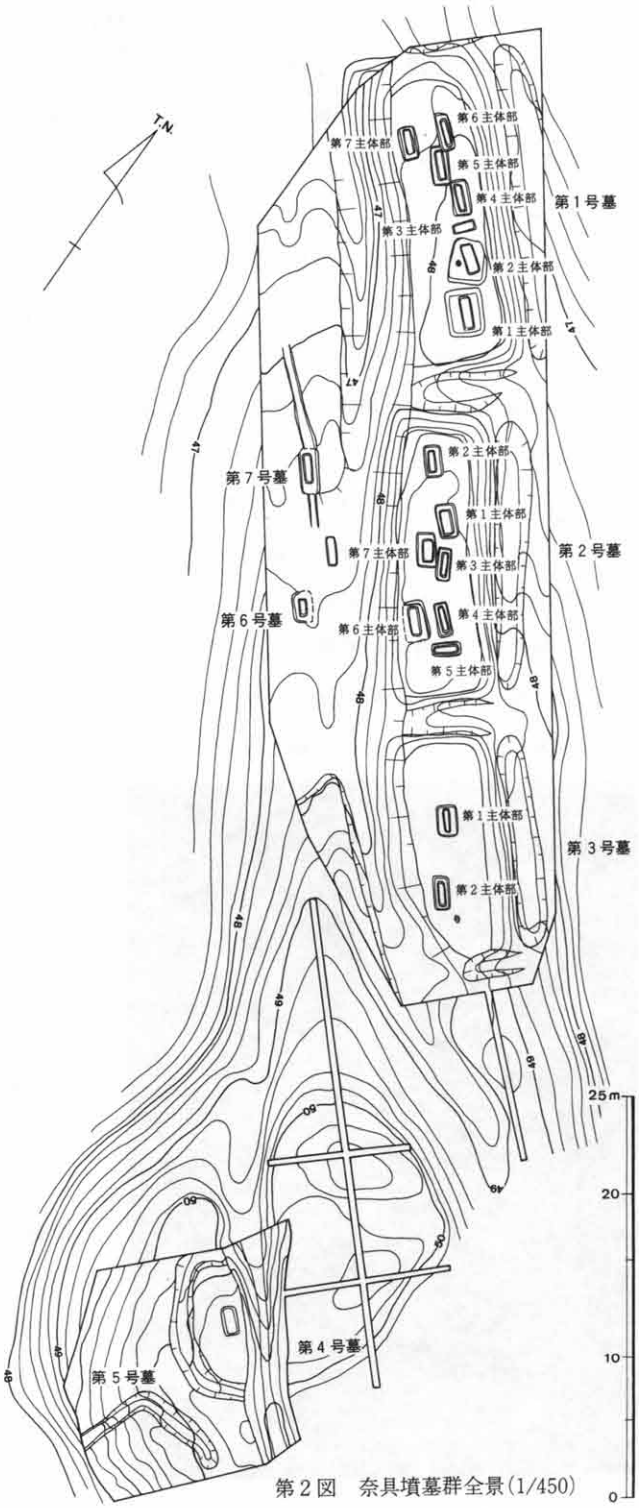
３群に分けられる。まず、第１群は、字義通りの墳墓で１～３号墓が該当する。一辺10m以上の大型の長方形墓である。これらは表土に約40cm程度盛り土し、周囲に断面「U」字形の浅い溝を持つ様式である。第２群は方形周溝墓で４・５号墓が該当する。これは、１～３号墓とは立地が異なり、連接しない。第３群は２号墓の墳裾に築かれた墓で、６・７号墓が該当する。

個々の墳丘の規模は、１号墓が長さ21.2m・幅10.7m・高さ1.5m、主体部は７基ある。

２号墓は、長さ20m・幅7.7m・高さ1.5m、主体部は６基ある。

３号墓は、長さ15.8m・幅9.3m・高さ1.1m、主体部は２基ある。墳墓の長幅比はおおむね１：２となる。

これらの墳墓に伴う



第２図　奈具墳墓群全景(1/450)

溝は四周にはめぐらず、コーナー部では閉じるか開放されている。この理由は丘陵頂に築かれたために地山が浅く、最小限の労力で見かけ上高く見えるという効果をねらったものと思われる。盛り土は、短辺側を先に盛り上げた後に中央を充填するようで、北西から南東(3号墓の方向)に向かって進行する。このことから、築造は1号墓からなされたことが想定される。

また、3号墓出土の土器は弥生Ⅳ期のものであるが、1号墓でⅢ期の特徴を含んだものがみられることからも裏付けられる。だが、Ⅲ・Ⅳ期以外の弥生土器は全くなく、この墓地はきわめて短期間に営まれたことがわかる。

第2群の規模は、4号墓が一辺8m、5号墓が一辺5mを測り、主体部は1基前後であったと推定される。

第3群は、山道で削平されたために規模は不明であるが、6号墓は墓壙長1.8m・幅0.8mで、中に長さ1.2m・幅0.6mの箱形木棺を納める。

奈具墳墓群の埋葬様式には箱形木棺と土壙墓があり、旧表土を掘り込んで棺を安置させる。奈具墳墓群の主体部の特徴は次の2点である(写真2)。第1は、3号墓第1主体部と6号墓の2基で長径30cm程度の石が棺上に置かれていた。これは、いわゆる標石で、墓標の役割を果たしたと思われる。類例には、大阪府巨摩廃寺遺跡の方形周溝墓が知られるが、意外と普遍性があるのではなかろうか。第2は、土器破砕供献(副葬する前に意図的に壊して供献すること)の行為が認められたことである。これは、弥生墓の発掘調査例が多い但馬で提唱されたもので、前期末にさかのぼる豊岡市駄坂(ださか)墳墓の例があるが、丹後でも報告例が増加してきている。奈具墳墓群の例はほとんどが甕であり、棺上か棺側に置かれている。また、2号墓第3主体部に破砕供献された甕には、土器片と混じって灰や少量の炭が検出され、埋葬の直前に土器の破砕を伴う儀式が執行されたことをうかがわせる。それは、いわゆる「共飲共食」であろうか。

写真1　奈具古墳群全景

写真２　奈具墳墓群の主体部
1.土器破砕供献（２号墓第３主体）　2.標石（３号墓第１主体）

出土遺物には、弥生土器のほかに、石鏃と石英・緑色凝灰岩片がある。第１群では、後述するように、土器の器形の別と墳丘での出土位置がほぼ対応する。使用された甕は主体部内に納められ、広口壺・無頸壺・水差などは墳頂あるいは斜面から出土する。但し、４号墓の周溝内からは、甕１点と火を側面に受けた短頸壺１点が検出され、主体部は無遺物であった。この点も、第１群と第２群の埋葬様式の違いを際だたせている。石鏃は６号墓の棺上から検出され、凸基式の薄い作りのものである。石英片は１号墓第４主体部、２号墓第４主体部、緑色凝灰岩片は３号墓第１主体部のいずれも埋土中から出土した。いずれも、他所から意図的に持ち運ばれたと推定され、奈具岡遺跡の玉作り工房との関連が非常に注目される。

奈具古墳群は、丘陵の下降部分を階段状にカットして築かれた３基の古墳群である（写真１）。13号墳は、長さ17m・幅14.5m・高さ３m、主体部は１基で、箱形木棺である。14号墳は、長さ15.6m・幅10.8m・高さ2.75m、主体部は割竹形木棺・箱形木棺・壺棺の３基である。15号墳は、長さ7.8m・幅7.8m・高さ1.5m、主体部は箱形木棺１基である。これらは、斜面上方の13号墳から下に向かって築造されたと思われ、遺物では13号墳の鉄剣、14号墳の土師器甕棺などが注目される。推定される頭位方向は、13号墳と14号墳の中心主体が西頭位、15号墳が東頭位であった。時期は、古墳時代前期と思われる。

まとめ　奈具墳墓群・奈具古墳群の発掘調査の成果をまとめると、次のとおりである。

①奈具墳墓群では、弥生時代中期末の墳墓群が判明したこと。丹後半島内では、弥生時代前期末にさかのぼる墳丘を持った弥生墓が、峰山町七尾遺跡で確認されているが、奈具墳墓群のように群集した例はあまり知られていない。唯一、峰山町カジヤ遺跡の様式が、

近似した例といえるが、土器や副葬品の扱いに大きな差がある。この一方で、奈具地区においては、丹後の弥生中期後半以後に特徴的な貼石墓が調査されている。これが、奈具墳墓群のような墳丘のみの例と階層的な差が認められるのか、類例の増加を待って判断するべきである。いずれにしても、大阪府加美遺跡、同瓜生堂遺跡など、弥生社会における墳丘を持った墓の問題とも関連するだろう。

②奈具古墳群は、丹後地域で普遍的な丘陵を階段状にカットして築かれたものである。

③奈具墳墓群と奈具古墳群の墓の比較によって、同一の単位集団において、弥生時代と古墳時代の埋葬法の特徴の差異が明らかになった。弥生墓では等質的な規模の埋葬が集積した結果として大型の墳丘が築かれるのに対して、古墳では埋葬者が限定されて棺周辺の儀礼が重視されるように変わったと理解できる。

以上のように、今回の発掘調査では、弥生・古墳時代の埋葬法について興味ある事例を呈示することとなった。

（河野一隆）

14. 裾 谷 横 穴

所 在 地　中郡大宮町口大野裾谷（すそたに）

調査期間　平成６年５月17日～同年10月13日

調査面積　約3,800㎡

はじめに　裾谷横穴は、丹後国営農地開発事業の大野団地造成予定地内において、平成５年度に京都府教育委員会が実施した立会調査によって発見された遺跡である。裾谷横穴では、Ａ～Ｄ地区の４か所の平坦面が確認され、このうちＤ地区については、平成５年度に京都府教育委員会によって発掘調査が実施されている。

調査概要　今回調査を実施したのは、Ａ～Ｃ地区の３か所である。このうち、Ａ地区については顕著な遺構・遺物は確認されなかった。

Ｂ地区では竪穴式住居跡４棟を検出した。出土遺物から奈良時代前半に属する。ＳＨ22からは、土器とともに鉄滓・鍛造剝片・湯玉が出土しており、鍛冶炉の存在が想定される。

Ｃ地区では、全長40m・奥行き15mの三日月状の平坦面や斜面部分から竪穴式住居跡21棟・小横穴２基などを検出した。住居跡のうち古墳時代に属するものが２棟あるほかは、おおむね飛鳥時代前半に属する。ＳＨ13からは須恵器甕・杯や土師器竈・甑・甕・杯などが一括して出土しており、飛鳥時代前半の土器編年の良好な資料になると思われる。

横穴は、小横穴が２基のみである。前庭部に土器を供献しており、奈良時代前半の築造と思われる。３号横穴から焼骨片が１点出土しており、この小横穴が焼骨埋納用のものであることを確認することができた。このほか、Ｃ地区では縄文土器（押型文）や弥生土器（後期）も少量出土している。

まとめ　今回検出の遺構は、一部に古墳時代や弥生時代の遺構を含むが、大半が飛鳥から奈良時代に営まれたものである。Ｃ地区では飛鳥時代前半に集落が営まれた後、奈良時代前半に小規模な横穴を築造している。Ｃ地区ではこの時期の集落は確認されておらず、Ｂ地区に移動すると思われる。また、縄文土器（押型文）の出土や奈良時代の鍛冶炉の検出なども注目される。　（筒井崇史）

調査地位置図（1/50,000）

15. 宇治市街遺跡

所在地　宇治市乙方52-8・東内29-1他

調査期間　平成6年10月4日～同年12月20日

調査面積　約400㎡

はじめに　今回の調査は、府道京都宇治線の街路整備工事に伴うもので、京都府宇治土木事務所の依頼を受けて実施した。この遺跡は、宇治川を挟んで現市街地一帯に広がる古墳時代から近世に至る集落遺跡で、これまでに数回にわたって発掘調査が行われている。今回の調査地は、『京都府遺跡地図』に記されている範囲の北端部分にあたる。

調査概要　調査対象地は、府道京都宇治線に沿って北から順に3か所に分けられる。A～Cトレンチを設定し、調査を開始した。Aトレンチは、東西幅約6m・南北長30mに設定し、北端から重機掘削を行った。しかし、トレンチの中央付近まで攪乱を受けていた。中央付近で地山を確認した。トレンチ最南部で包含層を検出したため、南北を7m、東西幅を約8mに拡張したが、攪乱が多く、検出遺構の大半は、近・現代の溝状遺構とピットであった。さらに、包含層が南に広がりを見せていたため、拡張を行ったが攪乱を受けており、遺物としては弥生第Ⅳ様式と思われる土器片や、須恵器高杯の脚部などが包含層から出土しただけで、遺物を伴う遺構は検出できなかった。Bトレンチの現地表面は、Aトレンチより低く比高差が約1mある。そこに東西約2m・南北約10mのトレンチを設定し掘削を行ったが、表土下約5～10cmで地山になり、遺物は全く出土しなかった。Cトレンチは、包含層の上層で土師器や須恵器の破片を多量に含んだ土層を確認したが、A・Bトレンチ同様、宅地造成時に攪乱を受けているものと思われる。トレンチ内は大きく2か所に分類できる。遺物を多く含んでいたのはトレンチ中央より北半分であるが、遺物を伴う顕著な遺構は検出できなかった。

調査地位置図(1/50,000)

まとめ　今年度の試掘調査では顕著な遺構を検出できなかったが、出土遺物から調査地周辺に弥生～古墳時代の生活面が存在したと思われる。

（森正哲次）

16. 金ヶ辻遺跡

所 在 地　相楽郡加茂町例幣小字金ヶ辻19-2他

調査期間　平成６年８月22日～同年９月28日

調査面積　約80㎡

はじめに　この調査は、蛇吉川小規模河川改修事業に伴うもので、京都府木津土木事務所の依頼を受けて行った。当初は恭仁京跡として調査に着手したが、恭仁京関連の遺構は検出されず、下層から縄文時代などの遺物が出土したため、遺跡名を金ヶ辻遺跡とした。

調査概要　４か所のトレンチを設定して調査を行った。各トレンチの概要は以下のとおりである。

１トレンチ　現地表下約0.9mまでは水平堆積層で、層中からは奈良時代の遺物がごく少量出土した。以下は、北西から南東に下がる斜めの堆積が見られ、その中には無遺物の砂礫層をはさんで、弥生時代前期と縄文時代晩期の遺物包含層を確認した。遺構は検出されなかった。

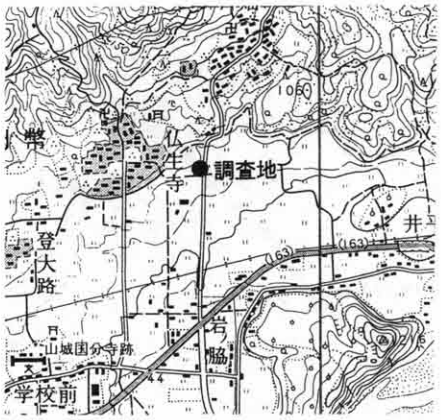
２トレンチ　堆積状況は、１トレンチと同様であるが、現地表下１m付近以下は湧水の多い砂礫層が堆積していた。遺構ならびに遺物包含層は認められなかった。

３トレンチ　現地表下0.6m付近までコンクリート片などの廃棄物が多量に捨てられていた。その下に旧耕土、床土がみられ、床土の直下で湧水の多い河川堆積の砂礫層となった。遺構ならびに遺物包含層は認められなかった。

４トレンチ　現地表下1.6m付近までは水平堆積が続き、以下は湧水の多い河川堆積の砂層となった。遺構ならびに遺物包含層は認められなかった。

まとめ　１トレンチで検出された縄文土器は、主に滋賀里Ⅲｂ期と、突帯文２期のもので、包含層資料ではあるが、資料の少ない南山城地域の該期の土器研究に有益な資料になると思われる。

（森島康雄）



調査地位置図(1/25,000)

17. 甕原離宮推定地

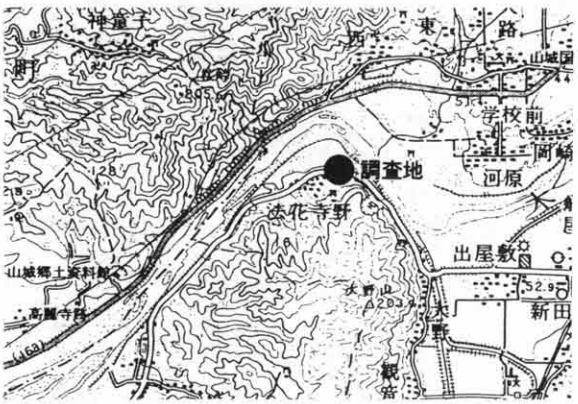
所 在 地　相楽郡加茂町法花寺野

調査期間　平成６年11月７日～同年12月15日

調査面積　約250m²

はじめに　今回の調査は、府道加茂木津線改良工事に伴い、京都府木津土木事務所の依頼により当調査研究センターが事前調査を行った。調査対象地は、相楽郡加茂町法花寺野の集落の東側にあたり、現府道の南北両側に細長く、全長約200m・最大幅約16mの範囲内に計８か所に大小のトレンチを配置した。

法花寺野地区周辺は、以前より、奈良時代に造営された甕原離宮の推定地であるとともに、国分尼寺が営まれた場所として比定されてきた地域である。しかし、この地区ではこれまで発掘調査例が少なく、必ずしも遺跡の様相は明らかでない。都合、今回が第３次調査と言える。第１次調査は、1927年に集落の西方約150m付近で行われ、奈良時代の瓦とともに土壁様遺構の検出報告がなされ、宮殿あるいは寺院の周壁として推定されている。今回の調査直前に、1927年の調査地付近においてロストル式瓦窯と判断できる遺構が露出しており、土壁様遺構は、同様の瓦窯跡と推定できよう。第２次調査は、加茂町教育委員会によって、この地区の遺跡の内容を明らかにすることを目的として、1987年２月に集落内において実施している。成果としては、江戸時代以降の土坑などの遺構、サヌカイト石核、奈良時代の須恵器、瓦、中・近世土器類が出土している。



第１図　調査地位置図(1/50,000)

調査概要　調査対象地は、集落の東側にある溜池に続く開析谷を東西にまたぐ形になった。谷を挟んだ東西両岸の丘陵端部付近は、もとの地形の削平が著しく、若干の瓦片などを採取したほか、顕著な遺構は検出できなかった。開析谷付近に設定したトレンチでは、奈良～中世にかけての遺物包含層のほか、ピット・溝などの遺構を

検出した。主な出土品は、奈良時代の瓦片が最も多く、須恵器(杯蓋・身、甕、壺)、土師器(甕・杯)、瓦器椀、青磁椀、サヌカイト剝片などが出土している。ピット類は、トレンチの面積の関係上、建物になるかどうか確認できなかった。溝類は、中世から近世にかけての鋤溝と考えているものが大半である。しかし、今回の調査地内の西端に設定したトレンチでは、奈良時代の溝状遺構を検出した。遺構の性格は不明であるが、溝内からは、丸・平瓦、須恵器・杯蓋・甕、土師器・甕などの遺物が、拳大より大ぶりの河原石とともに出土している。このうち、文字瓦が１点出土しているので報告しておきたい。

文字瓦は、丸瓦の内面左下付近に押印した状況が観察できる例で、須恵質に堅く焼けて青灰色を呈する。文字は、「老」と読め、すでに恭仁宮跡で出土し、分類報告されているKJ18に該当する。今回の例と、恭仁宮跡出土例の拓本を京都府教育委員会の御厚意により、直接比べる機会が得られたので確実であると考えている。

まとめ　今回の調査においても、甕原離宮、国分尼寺に直接つながる遺構・遺物は検出できなかったが、法花寺野地区の東側の平地部分にも遺跡が広がっていることが確認できたことは大きな成果であろう。とくに、文字瓦の出土は、恭仁宮との関係を含め、甕原離宮につながる可能性を示す注目すべき例と考える。今後の調査によってこの地区の遺跡の内容がさらに明らかにされることを望みたい。

なお、今回の調査地は、当初、法華寺野遺跡の名称で調査を実施したが、周辺地は、加茂町によってすでに表題の遺跡名で登録されており、今回の調査地も甕原離宮推定地として報告した。

(有井広幸)

第２図　文字瓦拓影(1/3)

18. 梅 谷 瓦 窯 跡

所 在 地　相楽郡木津町大字梅谷小字中ノ島

調査期間　平成６年４月11日～平成７年１月20日

調査面積　約600㎡

はじめに　梅谷瓦窯跡の調査も1985・1993年度に行った試掘調査に続いて、本年度で３回目の発掘調査の実施となった。すでに行われた調査により、興福寺関連の瓦窯跡の存在を裏付ける成果をあげるとともに、昨年度の試掘調査により、興福寺の創建瓦を焼いた７基の瓦窯の位置と３基の窯の構造を確認することができた。昨年度調査した窯は、東から１・２号窯、そして西端の７号窯を掘り下げ、１・２号窯は、窖窯（あながま）と平窯（ひらがま）の中間の構造をしていることがわかり、７号窯では、藤原京関連の瓦を焼いた日高山瓦窯に近い形態の平窯であることが判明した。その結果、同一形式の瓦を、複数の構造形態を持ち、ほぼ同時期に操業している窯跡群であることがわかった。

今回は、昨年度、窯操業時の最終床面を検出して調査を止めていた２号窯下層の調査と、３・４号窯の計３基の調査及び斜面の下手に広がる灰原の調査を行った。

調査地位置図（1/50,000）

なお、今回の調査も、住宅・都市整備公団関西支社関西文化学術研究都市整備局による造成事業に伴い、同公団の依頼を受けて実施した。

調査概要　２号窯は、昨年度の成果として、窯の全長約4.2m・最大幅2.3mで、煙導部（直径0.9m）・焼成部（長さ1.75m）・燃焼部（長さ1.55m）からなり、丘陵斜面を一部掘り込んだ半地下式窖窯である。生瓦を焼く焼成部には、窯の長軸（主軸）と直交するように平瓦を斜めに重ね合わせて積みあげるとともに、燃焼部との段差付近には丸瓦を繋いで３～４段積み重ねて、傾斜を持つ第１床面（最終床面）を作っていた。この積み上げた平瓦の下層には、割れた平瓦を粘土で、固定して、焼き締った傾斜を持

つ第２床面が造られていた。

今回の成果としては、まず第２床面の下層には瓦と土を使った裏込めがあり、その下に、地山を平らに削って成形した第３床面(創業時床面)を確認した。また、第３床面で瓦を焼いていた頃には、丸瓦の大きさに近い土管状の瓦をその中央に立て、煙導部両側壁に軒平瓦を立てて、それらの上部に平瓦を橋架けにした２穴の構造の烟導部にしていた。

３号窯は、窯の全長約4.9m・最大幅2.1mで、煙導部(直径1.1m)・焼成部(長さ1.8m)・燃焼部(長さ1.7m)からなり、丘陵斜面を一部掘り込んだ半地下式窖窯である。焼成部の第１床面は、２号窯の第２床面と同様に、瓦片を粘土で固定していた。この床面も改修を受けており、下層にさらに床面があり、地山を平らに削った床面を検出した。この窯は、平面形が２号窯と似ていたので、掘る前は、２号窯と同構造のものと考えていたが、異なる構造が何か所か明らかとなった。

まず、第１床面(最終操業時)には焼成部と燃焼部の間に明瞭な段差がなく、床面の傾斜角度が若干違う程度であった。しかし、第２床面では焼成部と燃焼部間に支柱があったようで、中央床面に表面が平らな自然石が１つ、粘土で固定してあり、燃焼部と焼成部には明瞭な段差があった。この点は、２号窯と似た構造といえる。煙導部の構造も、丸瓦の大

窖窯群全景北から(東から１～５号窯)

きさに近い土管状の瓦を３本用い、窯の主軸方向に間隔を空けて横たえて床に粘土で固定し、その上に丸瓦を３枚程度横に連結したものを５～６段垂直に積んで壁を作っている。炎を窯の内部にこもらせる障壁のような工夫と考えている。煙が抜けていたのは、土管状の瓦の間２か所で、土管状の瓦の内部は焼けしまった焼土が詰まっていた。また、この窯は主軸に対して左右対象形でなく、特に焼成部は左右に後から拡張した兆候があり、当初の窯の形は、隣りの４号窯のような窖窯であった可能性もある。

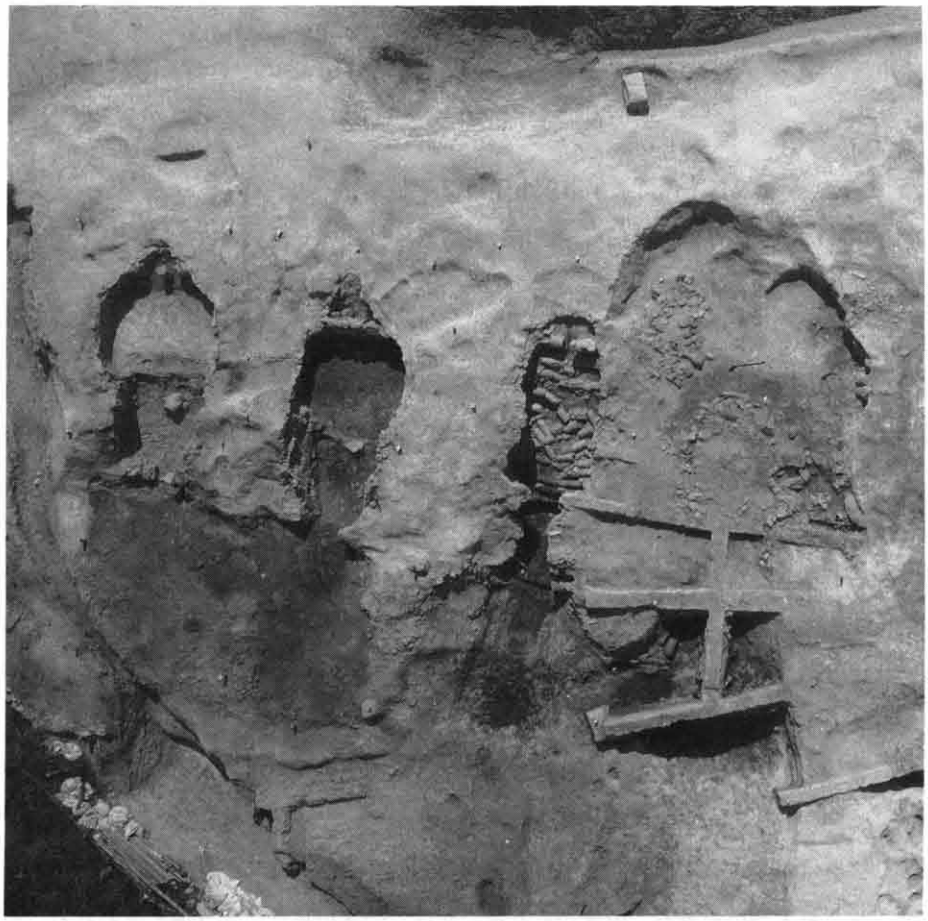
４号窯は、窯の全長約5.3m・最大幅1.5mで、煙導部(直径0.5m)・焼成部(長さ3.5m)・燃焼部(長さ1.3m)からなり、丘陵斜面をトンネル状に掘った地下式窖窯である。

焼成部は、床面に丸瓦などを使って９段の階段状の施設をもっていた。焼成部の中央付近の丸瓦の列が乱れており、窯が廃業になった後、天井部が落ちた影響か、雨水の流入によるものと考えている。焼成部と燃焼部の間には、基礎に軒平瓦を４枚並べ、その上に平瓦・丸瓦を積み重ねてスサ入り粘土で固定した明瞭な段差を設けている。燃焼部の側壁は、軒平瓦を大量に積み重ねていた。この部分は、地山が砂礫のため崩れやすく、かなりの補強が必要であったと考えている。特に、西壁では、軒平瓦の瓦当を焚き口方向に向けて、床面から６段ほど垂直に積み重ねて、さらにその上は、燃焼部の屋根を造るために、軒平瓦の瓦当面を窯の内部に向け、上に行くに連れて内側に競りだすように持ち送っていた。また、燃焼部の瓦積み部分の表面は、スサ入り粘土で覆っていた。煙導部は、粘土と平瓦を主軸に直交するように積み上げて障壁を造り、中央部に１か所穴をあけていた。この障壁付近の窯壁の観察から、窯が造られた当初この部分はなく、瓦を何回か焼くうちに、３か所の煙導穴を設けたあと、最終的に１穴にしたと判断している。

灰原　灰原は、１号窯から５号窯の下方にかけて、多量の瓦とともに炭の厚い堆積の広がりを確認した。各窯の焚き口付近には前庭部があり、特に４号窯と５号窯の前庭部は、周囲より一段と深く掘り下げており、溝状の灰原が下方へとのびていた。また、２・３号窯の前庭部では、不揃いながら幾つかのピットを検出しており、１間×２間？の掘立柱建物があったと考えている。灰原の下端は、丘陵の裾よりさらに下がり、現在の水田面からさらに約２m下まで確認した。灰原は、さらに調査地の北及び東方向に向けて広がっており、調査地東側の水田部分でも炭の出土を確認している。６号・７号窯の灰原は、良好な状態では確認できなかった。その原因としては、後世の竹林などの耕作による削平が著しかったと思われること(斜面に作られていた整地土中に炭混じりの層が幾層も見られた。)と、窯の下側に谷状の窪みがあり、土砂の流出の可能性も考えている。

まとめ　昨年度の調査結果を含めて、今回の調査を以下のようにまとめておきたい。

梅谷瓦窯跡は、５基の窖窯と２基の平窯の合計７基からなり、窖窯の内１～３号窯は、



梅谷瓦窯跡

窖窯に平窯的要素がうかがえる、窖窯から平窯への過渡的な窯といえよう。また、同タイプの窯が２基ずつ並んでいる傾向があるので、１号窯の東側にもう１基窯があった可能性も考えておきたい。また、並行する７基の窯は、その窯の配列から、近接した時期に操業された窯で、異なった窯構造のものが併存している例である。このことは、各窯から出土している軒平瓦・軒丸瓦の種類が興福寺の創建瓦にほぼ限定されていることからも確認できる。そして、窖窯群は、それぞれかなりの改修が行われており、瓦の焼成が窖窯から平窯へ移っていく技術的な過渡期の、試行錯誤のようすが観察できるとともに、平窯の技術と窖窯の技術が交流していた可能性を指摘しておきたい。

（有井広幸）

19. 弓　田　遺　跡

所 在 地　相楽郡木津町大字市坂小字弓田・上大条

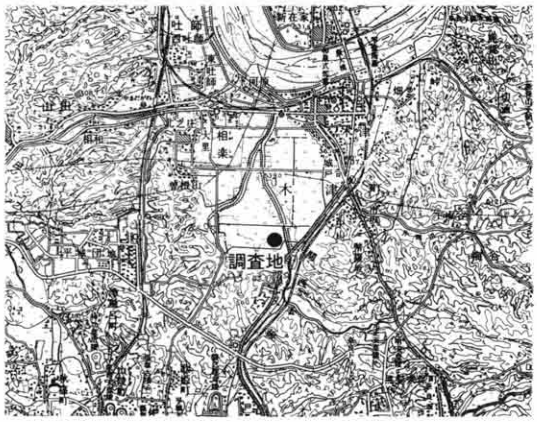
調査期間　平成６年４月18日～同年12月27日

調査面積　約4,400m²

はじめに　今回の調査は、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所の依頼を受け、国道24号京奈道路の建設工事に先だって実施した。調査地は、木津町南部の奈良市との境界を接する付近の水田地帯に立地する。東側の丘陵に瓦谷・上人ヶ平遺跡、歌姫瓦窯、また西側の丘陵に相楽山銅鐸出土地、音乗谷古墳、音如ヶ谷瓦窯、その麓には弥生中期の集落跡である大畠遺跡などが周辺の遺跡として存在する。調査は、27か所の試掘トレンチを設定し、その成果をもとに南北Ａ、Ｂ２か所に調査地を限定した。今年度の調査は、南のＡ地区に限り、Ｂ地区は次年度に予定している。Ａ地区では、中央の工事用道路をはさんでトレンチを東西にわけて調査した。

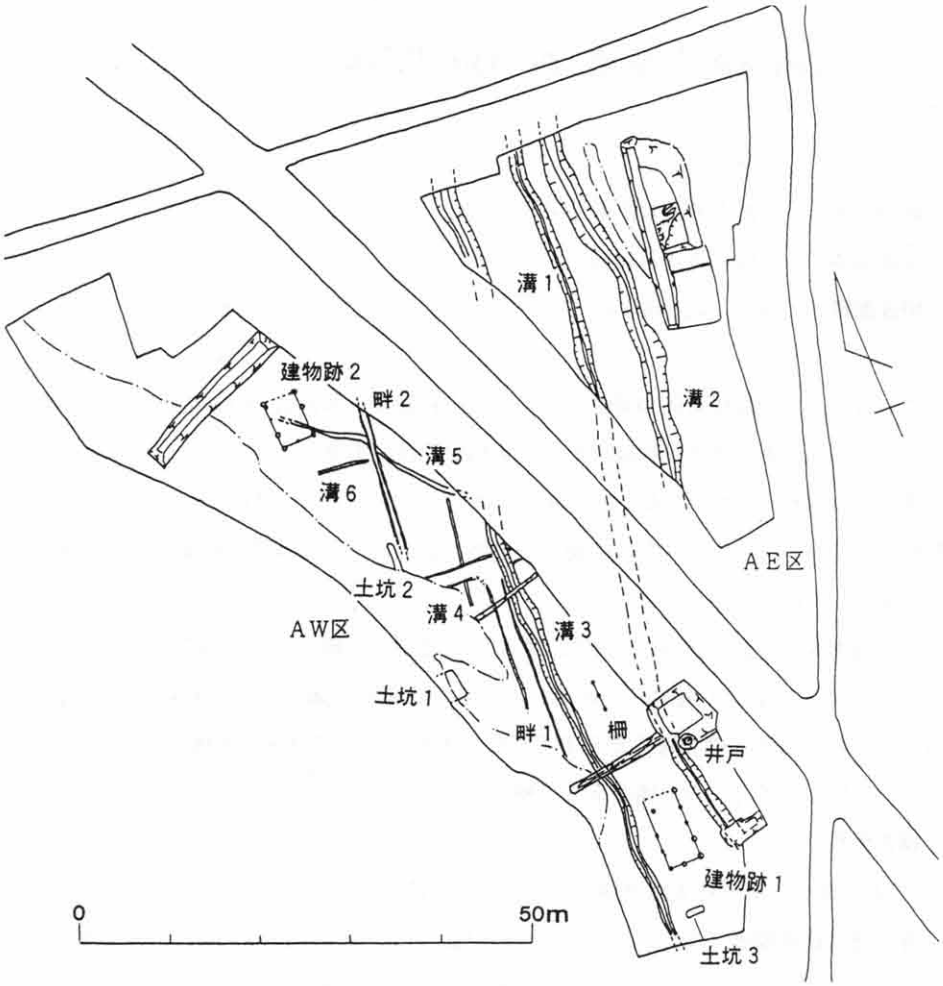
調査概要　上・下２面の遺構面を確認したが、調査地西側では河川の氾濫によって遺構が大きく削平を受けていた。上層面では中世から近世にかけての素掘り溝群を検出した。素掘り溝群は現在ある水田方向と平行して東西方向、南北方向にそれぞれ連なり、幅15～30cm・長さ最大18mを測る。中世から近世にかけての水田耕作に伴う溝と思われる。西側中央では江戸時代末期の直径約１mの野井戸の跡を２か所検出した。

下層面　弥生時代後期から平安時代前期にわたる遺構を検出した。弥生時代後期の溝２条、奈良時代の土坑２か所、平安時代の井戸を伴う２間×４間の掘立柱建物跡１棟を検出した。井戸は一辺約１mの方形を平面形とし、深さ約1.5mを測る。いわゆる縦板横桟に木材を利用した井戸で、縦板が内側に倒れ込んだ状態で検出した。底面には３～５cmの円礫が敷かれていた。



第１図　調査地位置図(1/100,000)

他に出土遺物が少なく、時期が特定できない遺構として溝２条、幅約



第２図　下層遺構平面図

１ｍの畦状遺構、柵などを検出した。また、トレンチの広い範囲にわたり、基盤面に縄文時代晩期(船橋式)の遺物を包含していたので、さらに一部下層を調査したが遺構などは確認できなかった。

まとめ　周囲の丘陵に古墳群、瓦窯跡があり、それらを支えた人々の集落、または工房等の遺構を予想したが、その関係を指摘できる遺構はなかった。しかし、縄文時代後期の土器や、弥生時代後期の溝、平安時代の建物跡などを検出し、各時期にこの地における人間の足跡をうかがうことができた。まとまった遺構の検出を今後の周辺の調査に期待したい。

(橋本　稔)

20. 長岡京跡左京第329・330・331次(7ANVKN-3、7ANVST-3・4地区)

調 査 地　京都市南区久世東土川町金井田・正登

調査期間　平成６年４月11日～同年10月13日

調査面積　Ａ２；約1,000㎡、Ａ３；約1,480㎡、Ｂ２；約840㎡

はじめに　名神関係遺跡の発掘調査は、中央自動車道西宮線(名神高速道路)の拡幅工事に伴い、日本道路公団大阪建設局からの依頼を受けて実施している。

調査は、昭和63年から開始し、今年で７年目になる。ＰＡ工区は、京都市南区に所在し、仮称「桂川パーキングエリア」の建設予定地にあたる。この地域での調査は、平成５年度から実施している。

この調査地は、長岡京跡の北東部にあたる。また、長岡京期以外の遺跡として、弥生時代を主とする「東土川遺跡」に近接している。昨年度の調査では、長岡京の条坊関連遺構・建物跡のほか、縄文時代から平安時代・中世にいたる遺物や遺構が確認されている。以下、検出した各時代の遺構のうち、長岡京期を中心に資料紹介を行いたい。

調査概要

(1)Ａ２地区　東三坊大路東側溝、掘立柱建物跡、柵列跡などを検出した。

東三坊大路東側溝　幅1.2～1.5ｍで、検出面からの深さ約40cmを測る。この溝からはほとんど遺物が出土していない。溝の中心座標はX=-117,486.0のときY=-25,230.4となる。

掘立柱建物跡　１間×１間以上のＳＢ32901と規模の明瞭でないものＳＢ32904がある。

柵列跡　調査地の中央部で検出した東西方向に柱穴が並ぶもので、町内を南北に二分割する位置になる。

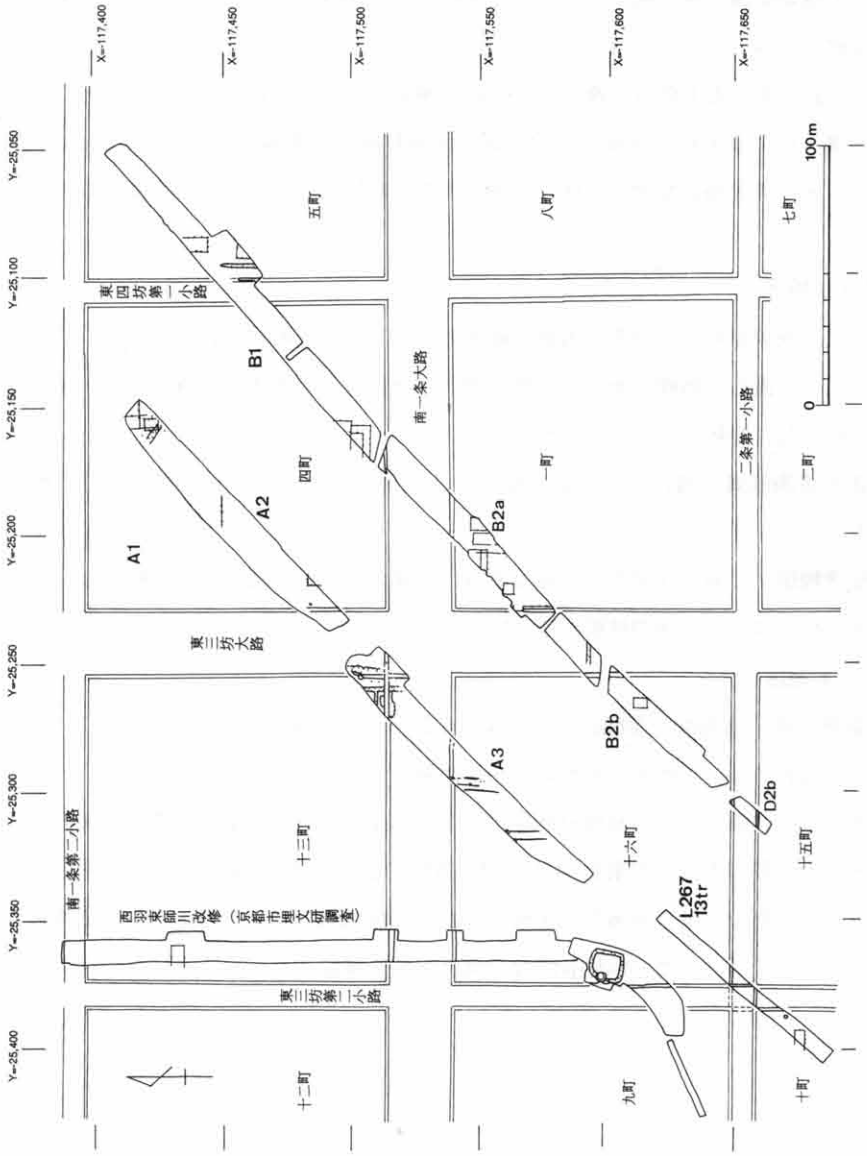
付表　長岡京条坊推定地

調査次数	地区名	工区・トレンチ	新呼称	旧呼称
左京第329次	7ANVKN-3	ＰＡ工区　Ａ２	東三坊大路東側溝 左京二条四坊大路二町	東三坊大路東側溝 左京一条四坊大路四町
左京第330次	7ANVST-3	ＰＡ工区　Ａ３	東三坊大路西側溝・二条条間大路南北側溝 左京二条三坊十四町	東三坊大路西側溝・南一条大路南北側溝 左京二条三坊十六町
左京第331次	7ANVST-4	ＰＡ工区　Ｂ２	東三坊大路西側溝 左京二条三坊十四町	東三坊大路西側溝 左京二条条間第一小路南北側溝

下層には、古墳時代～弥生時代と考えられる流路跡がある。

(2) Ａ３地区

東三坊大路西側溝　検出幅1.3～1.8m・検出高20～30cmで、11.4mにわたって検出した。溝心の座標値はY=-25,255.0(X=-117,510.0)を測る。



検出遺構平面図

南一条大路北側溝　検出幅1.1～1.55m・検出高45cmで、13.7mにわたって検出した。東三坊大路西側溝との合流地点では、約10cmこの溝の方が深く掘削されており、東西に杭列の痕跡を認めた。また、土層観察によっても、東三坊大路西側溝から南一条大路北側溝に水流が入り込んでいたことを確認した。検出した溝心の座標値はX=-117,514.5(Y=-25,270.0)を測る。

南一条大路南側溝　検出幅1.1～1.4m・検出高40～50cmで、16.5mにわたって検出した。溝心の座標値はX=-117,539.6(Y=-25,290.0)を測る。

東三坊大路と南一条大路は、埋土から同時に埋まったことがわかった。

雨落ち溝　南一条大路北側溝に伴う築地の雨落ち溝で、溝幅0.95m・深さ20cmを測る。この溝は、南一条大路北側溝の北側に、溝心々間で4.3m・幅3.1mの平坦面を隔てて検出している。

(3) Ｂ２ｂ地区

平安時代と長岡京期の二時期の遺構を確認している。平安時代には、小規模な洪水があったらしく、氾濫した砂礫が東三坊大路の側溝、路面及びその周辺に堆積している。出土遺物は、軒平瓦、凝灰岩、釘などが出土した。

東三坊大路西側溝　幅1.2～1.5m・深さ0.4mを測り、土師器、須恵器、木片、獣骨などが出土した。

掘立柱建物跡　２間×３間の南北棟である。柱間の寸法は、梁間７尺・桁行６尺を測る。南側の棟持柱には太さ15cmの柱根が残っていた。

(4) Ｄ２ｂ地区

南一条南小路　両側溝の溝幅は１ｍ、深さ0.3～0.4mを測る。両側溝の間隔は9.3mを測る。出土遺物には、土師器、須恵器の小片がある。

まとめ　今回の調査地は、長岡京跡左京二条三坊十六町と同二条四坊四町にあたる。調査の結果、十六町の大きさが東西400尺・南北370尺とやや横長であることが判明した。また、同町では一町を二分する南北溝を検出した。四坊四町では、一町を二分する東西溝を検出した。下層では、古墳・弥生各時代の溝、土坑を検出した。

(戸原和人)

研究ノート

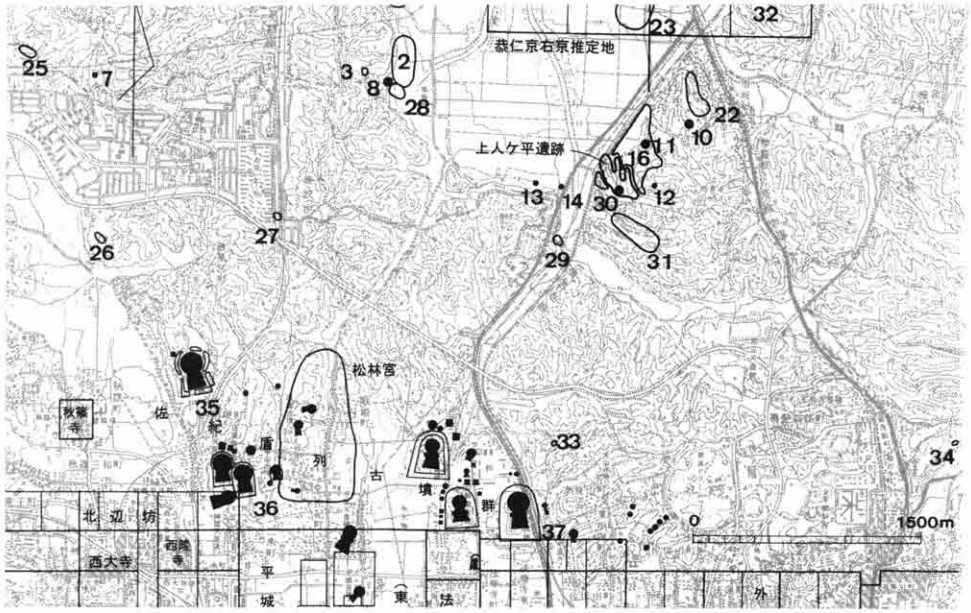
上人ヶ平遺跡の馬形埴輪

—馬形埴輪の一例—

石井清司・河野一隆

1．はじめに

京都府相楽郡木津町市坂に所在する上人ヶ平埴輪窯では、昭和63年度の試掘調査で三基の埴輪窯を確認しており、そのうち西端にある1号埴輪窯の発掘調査を同年に実施している。平成5年度の第二次調査は、1号埴輪窯の東に隣接した2・3号埴輪窯について窯体構造を明らかにするとともに、1・2・3号埴輪窯にともなう灰原の全容を明らかにするため、発掘調査を実施した。その結果、2・3号埴輪窯は1号埴輪窯と同様、地下式構造の窖窯で、1号窯に隣接した2号埴輪窯では排水施設と思われる溝状遺構も検出した。また窯体および灰原内からはコンテナー・バットにして約50箱程度の埴輪が出土した。出土した埴輪には、普通円筒埴輪のほか、甲冑形埴輪・家形埴輪などの形象埴輪を含んでいる。



第1図　調査地位置図及び周辺遺跡分布図

第2図　上人ヶ平埴輪窯遺構配置図

そのうち、特に馬形埴輪は良好な状態で出土しており、上人ヶ平埴輪窯の年代を検討する上での有効な資料と考えられるため、今回は上人ヶ平埴輪窯出土の馬形埴輪について簡単に紹介する。

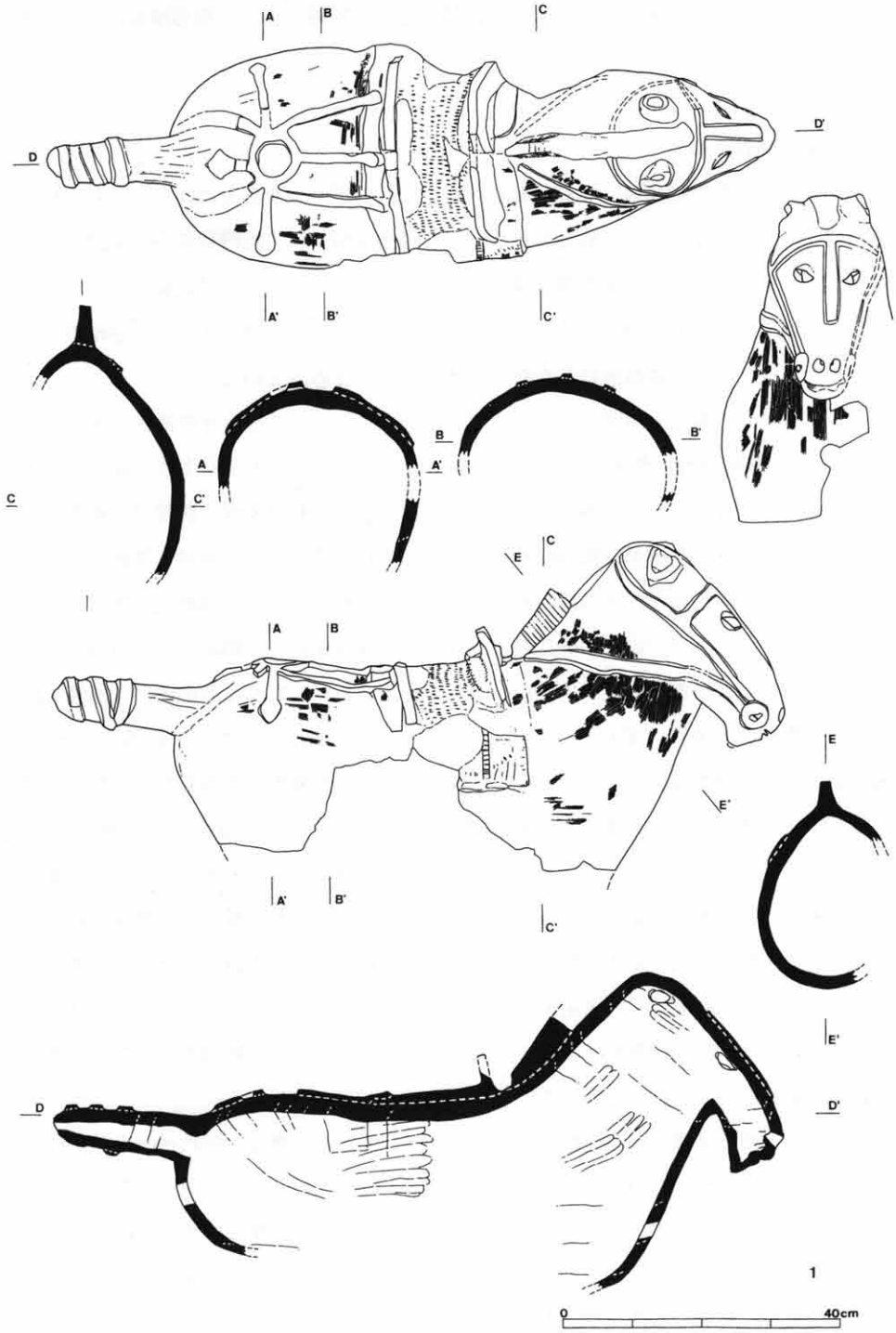
2．馬形埴輪の概要

今回紹介する馬形埴輪は、2号埴輪窯の焚き口部付近から北方向に約10m離れた地点で、灰原内から比較的まとまった状態で出土した。この灰原は、古墳時代前期の流路の上面に堆積していること、また3基の窯が隣接しているため、1・2・3号埴輪窯のいずれの灰原にともなうものであるかは明確にできなかった。ただ、今回紹介する馬形埴輪の大半は、その出土地点から2号埴輪窯にともなう可能性が高いと考えている。

馬形埴輪1は、脚部と胴部下半・頭部の一部が欠損しているが、比較的よく残っており、全長104cm・胴幅26cm・顔幅10cmを測る。成形は粘土紐を積み上げた中空の脚部を四本作成したのち、腹部によって前脚と後脚を接合したものと思われるが、腹部は欠損しているため明らかではない。胴部は腹部から幅6cmの粘土紐を積み上げて胸部・胴側部・尻部を成形する。この際に脚部外面は縦方向の、胴部下半は横方向のハケ調整を、内面はナデ調整をおこなうが粘土紐の痕が明瞭に残る。背部は尻部背を残して順次粘土紐を積み上げていく。尻部内面が横あるいは斜め方向のナデ調整であるのに対して背部内面は頸部に向かって縦方向のナデ調整に変わる。頸部も3～5cmの粘土紐を継ぎたして楕円形に成形し、頸部製作の延長で頭部を成形している。頭部は顔面部分を成形したのち板状の粘土で塞いで顎部を表現する。尻尾はあらかじめ棒状のものに粘土を巻き付けたものを用いており、尻尾の挿入位置にヘラ状工具で穴をあけたのち尻尾部分を接合するが、この際には塞いでいない尻部の背部から手を差し込んで接合し、その接合ののち、最後に尻背部を粘土槌で塞いでいる。鬣（たてがみ）は板状の粘土を貼り付けたのち、ヘラ描きで毛を逆立てたように表現している。透かし穴は頸部下半と尻尾下位の2か所にある。

馬体の表現は、粘土の微妙な厚みで頭部の鼻梁や胴部の曲線・瞼の膨らみなどを表現しており、実物の馬の形態を忠実に描いている。

馬装は粘土の貼り付けとヘラ描きによって表現している。轡（くつわ）は、幅約10cmの粘土紐を円形に貼り付けて鏡板（かがみいた）を表現している。頭絡（とうらく）は幅約1cm程度の粘土紐で頂革・額革（ひたいがわ）・頬革（ほおがわ）・鼻梁革（びりょうがわ）を表現するが、辻金具（つじかなぐ）の表現はない。馬形埴輪の中には鬣を頭頂部で円筒形に立ち上げてまとめ、そこへ頂革と額革を結わえる例もあるが、本例では両耳を巡らせることで処理している。なお、頬革は轡と結合するが立聞（たちぎき）がなく、鏡板の下にもぐり込んでいる。手綱も鏡板の下に入り込んでおり、引手（ひって）の表現がない。したがって、一見すると轡は銜（はみ）の



第３図　上人ヶ平埴輪窯　出土遺物(1)

端環に引手と鏡板を結合した内側連結の型式にみえるが、轡の表現に製作者による省略が働いているとみた方が無難なのかもしれない。

鞍は、いわゆる直立鞍で後輪の大半が欠損しているが、鞍褥・障泥が認められる。前輪と後輪は厚さ1cmの粘土板を立てて表現している。海金具・覆輪の表現はないが、鞍と思われる表現がある。

鞍褥は、軟質の材料であることを表現するために全体をヘラ刺突している。障泥の大半は欠損しているが遺存する部分でみると、端部は障泥金具あるいは端部を糸で結ったものを表現するためにヘラで刺突して縁取りされている。なお、障泥の上で鞍褥の下にみられるヘラ描きされた梯子状の表現は前輪の居木から垂下する鐙の力革と思われる。

尻部には尻繋・雲珠・杏葉の表現がある。雲珠は粘土幅約1cm・直径6cmの円形の粘土で表現しており、これに五本の尻繋と三本の杏葉を下げる革が取り付く。杏葉は後面で雲珠に接している剣菱形のものと側面で長く吊り下がったハート形のものがある。なお、ハート形の杏葉の例は瓦谷2号埴輪窯でも出土している。尾は別の革で束ね、雲珠から伸びてきた革は尾を巡らせて処理している。

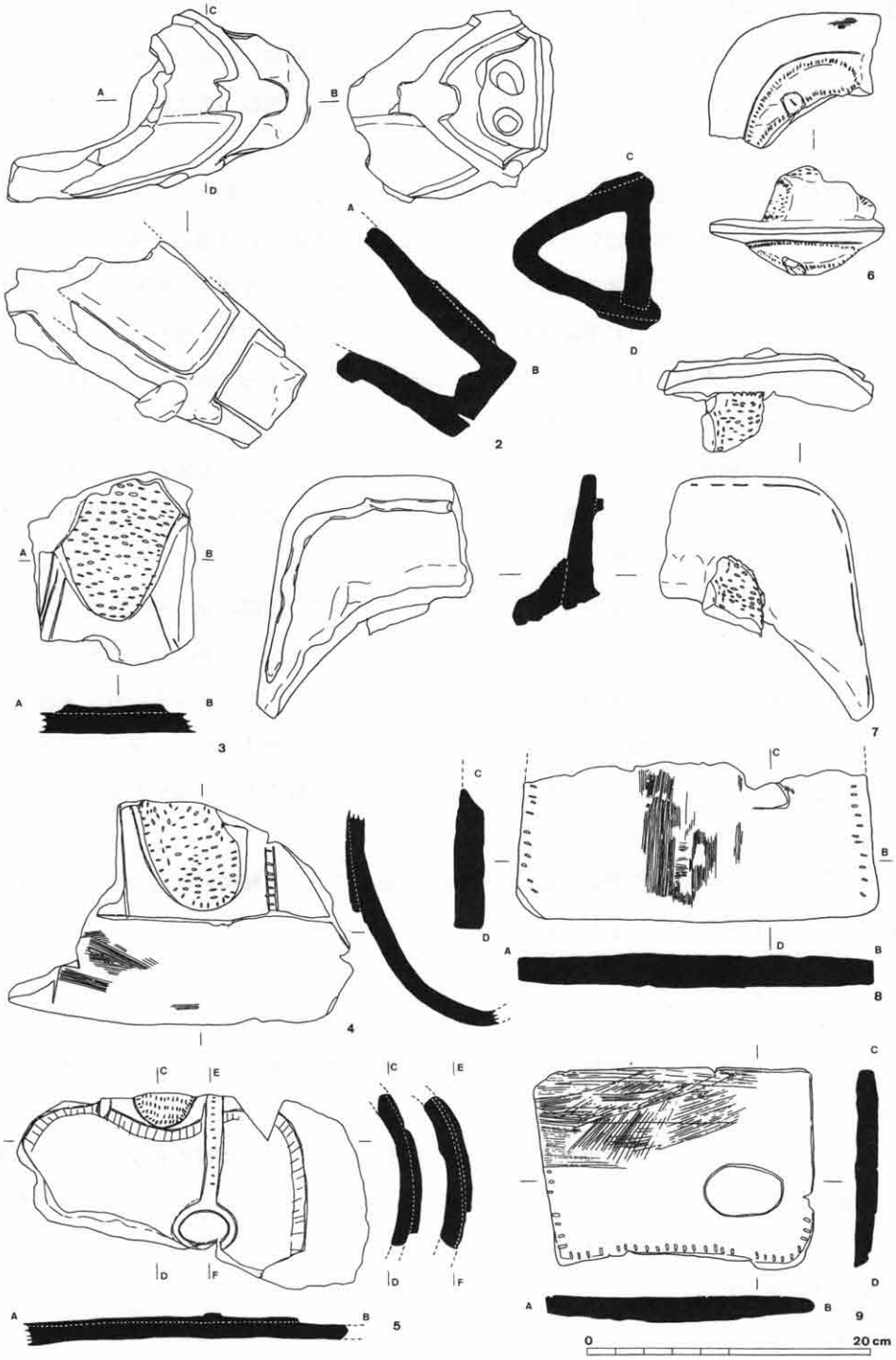
2は、頭片で1に比べてやや写実性に欠けるものである。頭部は粘土を板状にのばしたのち、鼻梁を頂点として山形につくり、そののち下面の顎と鼻の位置に粘土板を貼り合わせている。鼻は平坦でやや馬面の表現には似ない。口はヘラで切り込みをいれて表現している。馬装は1と同様、幅1cmの粘土紐を貼り付けて頂革・額革・頬革・鼻梁革を表現している。鏡板は1のような円形のものではなく、f字形鏡板を表現するかのように幅約5cmの粘土を貼り付けている。

3は鞍で、1と同様ヘラ刺突で軟質の材料を表現している。鞍褥の下端から斜め下方にむかってヘラ描きされているが、鐙の力革とおもわれる。

4は、3と同様の鞍褥部分である。鞍褥の下方には粘土板と思われる剝離面があり、下方には障泥があったものとおもわれる。なお、3・4とも鞍褥の刺突文には赤色顔料が付着しており、灰原内にこの埴輪を廃棄する前には赤色顔料を塗布していたことが明らかである。

5は、鞍褥と障泥・鐙を表現したものである。鞍褥は3・4と同様の表現で、障泥は鞍褥の部分を避けるかのように弧を描いて表現しており、端部にはヘラ描きで縁取りを表現している。その障泥の上部で鞍褥のうしろに幅1.5cmの粘土紐で力革を、鞍褥前には力革と輪鐙を表現している。

6は、後輪の一部と思われる。厚さ約2cm・高さ約6cmの粘土板で鞍を表現し、その両側には磯金具と思われる高まりを表現している。この磯金具の縁にもヘラによる刺突文が



第４図　上人ヶ平埴輪窯　出土遺物(2)

ある。鞍の背後には尻繋の一部と思われる粘土紐が貼り付いている。

7は、前鞍とおもわれるもので、厚さ約3cm・高さ約8cmの粘土板で鞍を表現しており、鞍の前部には粘土槐を貼り付けたのち、ヘラによる刺突文を規則性に欠ける状態で描いて軟質の材料を表現している。鞍の背後には幅1.5cm・厚さ1cmの細い粘土紐を鞍の縁に沿うように貼り付けて覆輪を表現している。

8は、厚さ4cm・長さ50cmの板状を呈したもので、障泥を表現したものと思われる。この粘土板にも短部に刺突文が描かれている。また欠損した右上部ではヘラ描きで円弧を描いており、輪鐙の表現と思われる。8は、他の馬形埴輪が灰原から出土しているのに対して2号埴輪窯の燃焼部から出土したものである。

9は、長辺約40cm・短辺約39cm・厚さ約3cmの粘土板で障泥を表現している。障泥の下方には刺突文を、またその上方には楕円形のヘラ描きがされており、輪鐙を表現したものと思われる。

3．若干の考察

馬形埴輪は製作者の馬具に対する理解・模倣技術・材質的制約・現在の馬具研究(特に遺存しにくい有機質部分の復元)などに規制されて、実際の馬装の反映か否かで議論が分かれよう。その点、この馬形埴輪1は写実性が高く、実体に近いものと思われる。以下はこれを中心に検討を加えたい。

まず、轡から議論する。この埴輪の轡は5世紀前半の滋賀県新開(しんがい)1号墳例か長野県鳥羽山洞穴例などの搬入品を別とすれば、楕円形鏡板付轡が候補となろう。これは、下縁刳り込み楕円形鏡板あるいは鞆形(ともがた)鏡板とも呼ばれる5世紀中葉～6世紀前半にみられる楕円形鏡板(注1)と、6世紀中葉以降の装飾性が高い楕円形鏡板のいずれかをうつした可能性がある。次に杏葉は、一方は剣菱形杏葉で差し支えないが、もう一方の心葉形の例は2つの候補がある。第一は、5世紀中葉から6世紀前半に見られる鉄製心葉形杏葉、第二は、6世紀中葉以降に盛行した金銅製または鉄地金銅張の心葉形杏葉である。轡と杏葉は一方だけでなく、両者を連動して決めねばならない。この時、後者の心葉形杏葉は楕円形からの突出が小さく、この馬形埴輪の例から見ると前者の形態に近い。さらに、剣菱形杏葉の盛行期は、6世紀中葉以降もあるが、前者の盛行期とほぼ重なっている。以上の理由から、この馬形埴輪は鉄製楕円形鏡板付轡と鉄製心葉形杏葉・剣菱形杏葉をセットとすると考える。この場合、他の馬装も決まってくる。鉢の表現が無い雲珠は、宇治市二子山南墳にあるような鉄環に責金具を持った脚金具を取り付ける形式、鐙は輪鐙の可能性が高くなる。仮に、この馬形埴輪が伝世馬具を装着したと見ない限り、この馬装が示す年代観は、5世紀中葉か

ら6世紀前半に押さえることができる。

では、実際にこの馬形埴輪のような馬具を出土した古墳があるのだろうか。現在、鉄製楕円形鏡板付轡の最古例である大阪府長持山古墳では、鉄菱部本体が金銅で、鉄製縁金と金銅鋲で留める剣菱形杏葉が共伴するが、心葉形杏葉ではない。一方、鉄製心葉形杏葉の最古の例である大阪府御獅子塚古墳第1主体では、轡が見つかっていない。両者の共伴例は多くはないが、6世紀初頭の兵庫県鬼神山古墳では轡が鉄地金銅張だが、このセットが確認されるから、さらに年代を絞るならば、この時期であろう。

ところで、府内の馬形埴輪の出土地を見ると、木津周辺を主体とする南山城とは別に、福知山市稲葉山10号墳や綾部市以久田野17号墳などの中丹地域にも集中する傾向がある。(注2) ここは綾部市沢3号墳の鉄製f字形鏡板付轡・同市荒神塚古墳の鉄製心葉形杏葉など、5世紀末に馬具を受容した地域でもある。荒神塚古墳の鉄製心葉形杏葉は、杏葉本体の裏面から錐状の工具で連続的に刺突した装飾がある。これは、奈良県・静岡県にもあるが、福井県きよしの2号墳、同県二子山3号墳や石川県滝3号墳などの日本海岸の鉄製楕円形鏡板付轡で見られる特徴であり、この馬形埴輪で見られた馬装は、実際の馬具においても製作技法上で近い関係にあることが知られる。また、馬形埴輪は出土していないが、京都市穀塚古墳では鉄製楕円形鏡板付轡が鈴付剣菱形杏葉と共伴している。この地域には山田桜谷2号墳など、形象埴輪を持った古墳が知られており、将来的に馬形埴輪の出土が予測される。さらに、近年、南丹地域では園部町今林2号墳第1主体で、丹後地域では、結合方法がやや特殊だが、峰山町大耳尾2号墳第1主体からこの型式の轡が出土している。以上の府内の例をみる限り、南山城・京都盆地(北部)・南丹・中丹・丹後の各地域に、遅くとも、6世紀前半には鉄製楕円形鏡板付轡が受容されている。ともあれ、5世紀の導入期の馬具では、f字形鏡板付轡と剣菱形杏葉に目が行きがちだが、鉄製楕円形鏡板付轡のセットの存在も注意すべきである。花谷浩氏は両者の差に甲冑副葬の有無をあげている。(注3) 図式的に示すならば、前者は首長などに拠点的に導入されるのに対し、後者はそれより階層的には低い首長へと受容され、乗馬の風習を普及させたのではなかろうか。

最後に、上人ヶ平遺跡出土の馬形埴輪のモデルと推測される被葬者を指摘したい。南山城地域での馬具の導入は、木津町吐師七つ塚2号墳で出土し、現在は京都大学文学部博物館にある古式の馬鐸(5世紀中葉か?)を挙げることができる。だが、セットとして導入されるのは5世紀末で、城陽市青山2号墳と田辺町トツカ(十塚)古墳に見られる。特に後者は、今、問題にしている鉄製楕円形鏡板付轡を持っている。しかもこの古墳は、当時、南朝から舶載されたと見られる神人歌舞画像鏡などを副葬し、この地域では飯岡車塚古墳からの首長系譜にのる、南山城を一定程度、統治した被葬者であったと思われる。上人ヶ平

で作られたこの馬形埴輪の製作者のイメージには、かつて見たトツカ古墳の被葬者とその愛馬の雄姿が浮かんでいたのかもしれない。

（いしい・せいじ＝当センター調査第２課調査第３係主任調査員）
（かわの・かずたか＝当センター調査第２課調査第１係調査員）

注１　この種の轡の名称は決まっていないが、本稿は、この轡が金銅製の楕円形轡を鉄製に材質転換したと考えるので、鉄製楕円形鏡板付轡と呼ぶ。

注２　高橋美久二『全国埴輪出土地名表　VER2.0』でカウントした。

注３　馬具研究の大綱は小野山節氏によって確立されたが、特に、この轡に関する論考としては次の２例をあげたい。

鹿野吉則「大和における馬具の様相―鉄製楕円形鏡板付轡を中心に―」（『考古学と地域文化』）　1987年

花谷　浩「3）　馬具―日本出土鉄製鏡板付轡に関する覚え書き」『川上・丸井古墳発掘調査報告書』）　1991年

資料紹介

京都府の古墳時代鉄鏃

野島　永

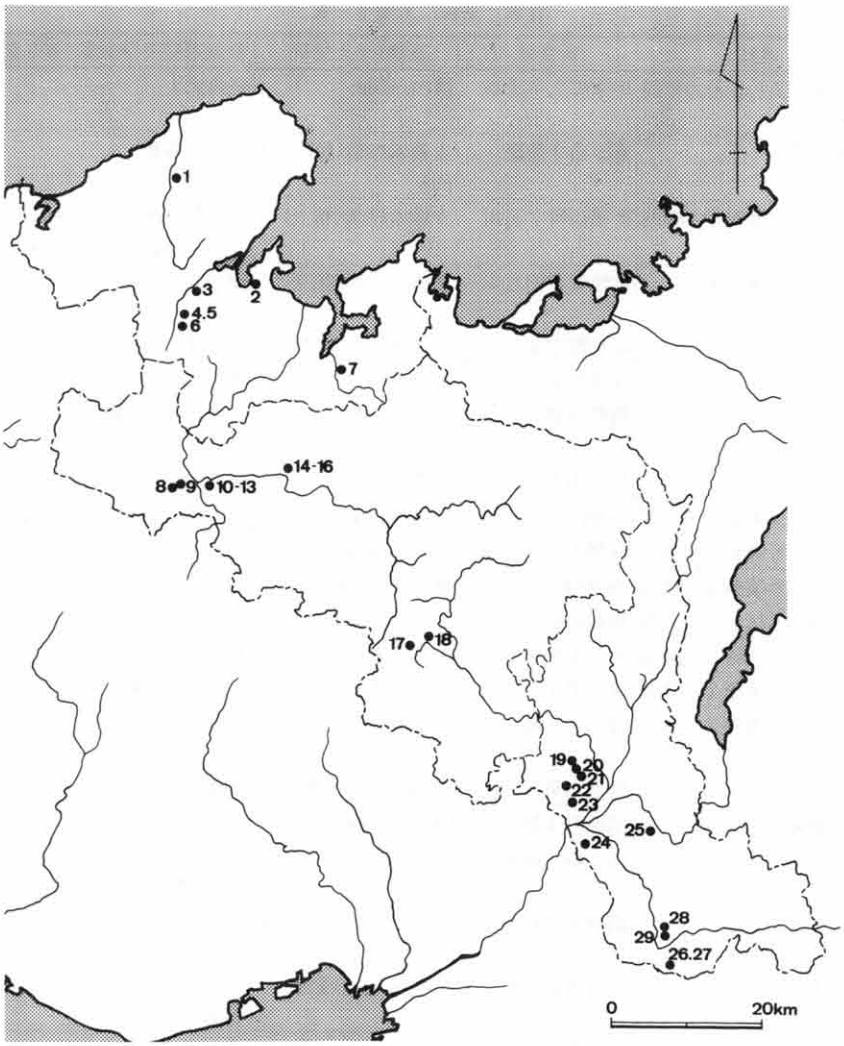
1．はじめに

我が国に鉄製品が普及するのは弥生時代であり、鉄器の加工製作が行なわれるのも弥生時代前期末に遡ると考えられている[注1]。弥生時代中期には、楽浪郡の設置により、戦国時代の燕の地域の鋳造鉄斧に起源をもつ鋳造鉄斧の舶載が知られ、前漢昭帝の馬弩關(ばどかん)廃止により[注2]、中国の鉄製武器などの将来とその影響が考えられている[注3]。弥生時代後期には鉄鏃や農工具などの鉄製品が北部九州を中心にして激増する。弁辰の鉄の開発と列島への鉄素材の供給に起因するものと思われ、鉄素材の流通量が大幅に増加し、鉄器加工技術の普及も容易に推測できる。このため、古墳時代初頭における鉄製品の加工技術が弥生時代後期のそれに系譜をもつものであることは否定しえない。しかし、古墳時代の鉄製品の出土量は弥生時代のそれを遥かに凌駕するものであり、副葬される鉄製品だけでも弥生時代に出現した鉄製品のほとんどをみることができることから、古墳時代初頭において、鉄器製作技術や鉄素材確保の経路、生産組織等を含めた変革が想定される[注4]。

古墳時代成立期に西日本を中心とした各地の古墳から定角式(じょうかくしき)、柳葉式(やないばしき)、鑿頭式(のみがしらしき)といった、小形の有稜系鉄鏃[注5]が多量に検出されるが、これを、畿内を中心とした政治体制下の生産組織の創設と見るか、政治秩序確立のための、より広域な軍事組織の発生と見るかは別にせよ[注6]、一つの政治的体制を維持するために生産、流通されはじめた財であるとみなすことに異論はない。古墳時代前期の鉄鏃資料の提示は所謂、古墳時代開始論に係わる点で重要性を帯びることとなる。

2．京都府の古墳時代前期の鉄鏃

今回は、京都府内における弥生時代終末から古墳時代前期を中心とした時期の鉄鏃の集成と、若干の整理を行ないたい(第1図および付表参照)。京都府域は丹後、丹波、山城の旧三国を含み、畿内から山陰道を通じて日本海にぬける、南北に細長い地域である。現代の地方行政区域ではあるが、一つの交通路を共有する中枢と辺境の構造を内在する地域ケ



第１図　関連墳墓位置図(付表と番号対応：1/1,000,000)

ースとして、府内各地域の比較研究を行なう意義もあるものと思われる。以下に各地域の出土鉄鏃の主なものを紹介したい。

丹後地方(第３図１～24)

奈具岡遺跡(注7)は奥丹後半島のほぼ中心にある弥栄町に所在する。Ｓ２号とＳ３号の二つの方形周溝墓の共有の溝内から、所謂、類銅鏃式とされた厚手の有稜系定角式鉄鏃が検出された(第３図１)。両者ともに埋葬施設は検出されていない。弥生時代以来の墓制を踏襲しているが、出土土器からは布留式初頭段階にくだる。

波路(はじ)古墳は宮津湾に面した位置にある。墳丘形態は明瞭ではない。長方形の二段墓壙に直葬された割竹形木棺内から靫(ゆぎ)が出土した(第２図)。靫内からは鋒(きっさき)の広い有稜系定角式鉄

付表　鉄鏃出土墳墓一覧

	遺跡	所在地	遺構(出土位置)	鉄鏃形態及び数量(第３図番号)
1	奈具岡Ｓ２・３号方形周溝墓	弥栄町大字溝谷	溝内(床面)	定角式１(１)
2	波路古墳	宮津市字波路	土壙木棺墓(棺内,靫内)	定角式多数
3	霧ヶ鼻３号墳第１主体部	野田川町字石川	土壙木棺墓(棺上)	有茎腸抉柳葉式3 柳葉式2 圭頭式1 方頭式１(7･11～14･23･24)
4	内和田５号墳ＳＸ01	加悦町字明石	土壙木棺墓(棺上？)	鑿頭式９ 柳葉式１(８･15･17～20)
5	内和田５号墳ＳＸ12	加悦町字明石	土壙木棺墓(棺外)	鑿頭式１(16)
6	蛭子山古墳	加悦町字明石	石棺外	柳葉式12 定角式７(3～5･9･10)
7	切山古墳	舞鶴市伊佐津境谷	組合式石棺(棺内)	方頭式３ 柳葉式１ 定角式１(２･６･21･22)
8	論田９号墳	福知山市字篠尾	土壙木棺墓(棺内)	柳葉式２
9	谷尾谷１号墳第２主体部	福知山市字篠尾	土壙墓(棺内？)	有茎腸抉三角式２(43･44)
10	宝蔵山４号墳第１主体部	福知山市字前田	土壙木棺墓(棺外)	圭頭式３(36～38)
11	宝蔵山４号墳第４主体部	福知山市字前田	甕棺墓(棺外)	定角式２(25･26)
12	宝蔵山１号墳第１主体部	福知山市字前田	土壙木棺墓(棺外)	柳葉式他５(35)
13	宝蔵山２号墳第３主体部	福知山市字前田	土壙木棺墓(棺内)	鉄鏃６
14	久田山３号墳第１主体部	綾部市里町	土壙木棺墓(棺内)	圭頭式２ 柳葉式１
15	久田山４号墳第２・３主体部	綾部市里町	土壙木棺墓(棺内？)	鉄鏃２
16	久田山５号墳第１主体部	綾部市里町	土壙木棺墓(棺外)	柳葉式２
17	黒田墳墓	園部町字黒田	土壙木棺墓(棺外？)	柳葉式18～(27～32)
18	垣内古墳	園部町内林東畑	粘土槨(棺外)	圭頭式56 無茎平根式26 方頭式16 柳葉式11(33･34･39～42)
19	寺戸大塚山古墳	向日市寺戸町	竪穴式石室(棺内,棺外)	定角式17 有茎腸抉柳葉式５他(46･50･51･66･67)
20	妙見山古墳	向日市向日町	竪穴式石室(副室)	有茎腸抉柳葉式18 無茎腸抉三角式12(68～71)
21	元稲荷古墳	向日市向日町	竪穴式石室(不明)	圭頭式７(90)
22	長法寺南原古墳	長岡京市長法寺	竪穴式石室(棺外多)	柳葉式123(54～58)
23	鳥居前古墳	大山崎町円明寺	竪穴式石室(棺外)	有茎腸抉三角式他７(96～98)
24	八幡石不動古墳	八幡市八幡	南粘土槨(棺内？)	有茎腸抉三角式,圭頭式,方頭式他30～(91)
25	丸山古墳	宇治市宇治	粘土槨(不明)	鑿頭式25 定角式21 圭頭式４
26	瓦谷古墳第１主体部	木津町大字市坂	粘土槨(棺内)	圭頭式24 腸抉柳葉式４ 有茎腸抉三角式３ 柳葉式１他(85～87･94･95)
27	瓦谷古墳第２主体部	木津町大字市坂	粘土槨(棺内,靫内)	柳葉式23 圭頭式18(59～65･88･89)
28	平尾城山古墳	山城町平尾	竪穴式石室(粘土床)	鑿頭式36 定角式４他(47･48･73～82)
29	椿井大塚山古墳	山城町椿井	竪穴式石室(不明)	柳葉式84～ 圭頭式50～ 鑿頭式40～ 有茎腸抉三角式17他(45･49･52･53･72･83･84･92･93)

鏃が多数検出されている。土師器壺が東小口部から出土しているが、畿内地域との詳細な併行関係は明確ではない。靫の出土例は福島県会津大塚山古墳(注8)や滋賀県雪野山古墳(注9)、京都府瓦谷古墳など、前期でも中葉以降に検出例が増加することから、本例も前期中葉にまで下る可能性もある。

霧ヶ鼻3号墳、内和田5号墳は宮津湾に注ぐ野田川中流域に位置する。ともに弥生時代台状墓から系譜を引く方形墳で、組合式木棺を直葬する主体部をもつ。霧ヶ鼻3号墳第1主体部は柳葉式(7)や寺戸大塚古墳出土例に類する有茎腸抉(わたくり)柳葉式(12～14)などをもち、内和田5号墳SX01も柳葉式(8)、鑿頭式(15・17～20)などの有稜系小形鏃を複数副葬する。前期前半に比定できる。

蛭子山(えびすやま)古墳(注10)も野田川中流域に位置する。全長145mの前方後円墳で3基の埋葬施設の中の、舟形石棺の東側に鉄刀、鉄剣、鉄鏃が一括して出土した。有稜系に属するやや大形の定角式(3～5)と柳葉式(9・10)がある。4世紀後半とされる。

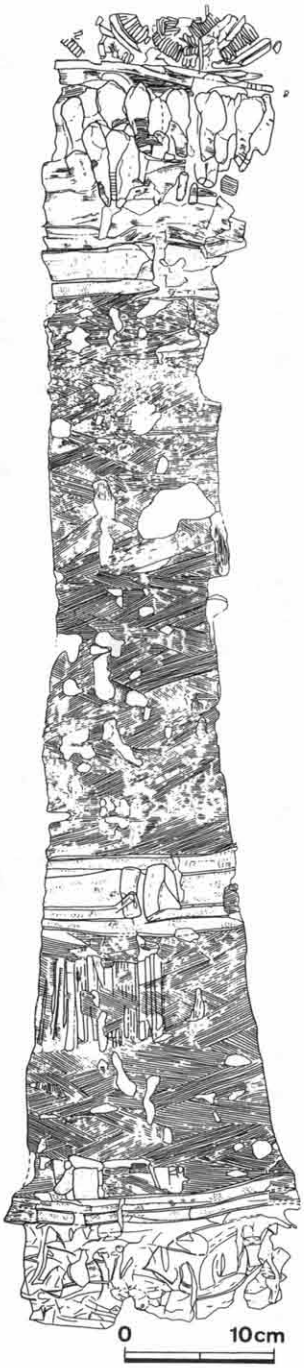
切山(きりやま)古墳は、墳丘は遺存しなかったが、組合式石棺内には鉄剣、鉈(やわがな)とともに鉄鏃が出土した。これも定角式(2)、柳葉式(6)、鑿頭式(21・22)の有稜系小形鏃三種が揃う。前期初頭段階の山陰系二重口縁壺を伴う。

丹波地方(第3図25～44)

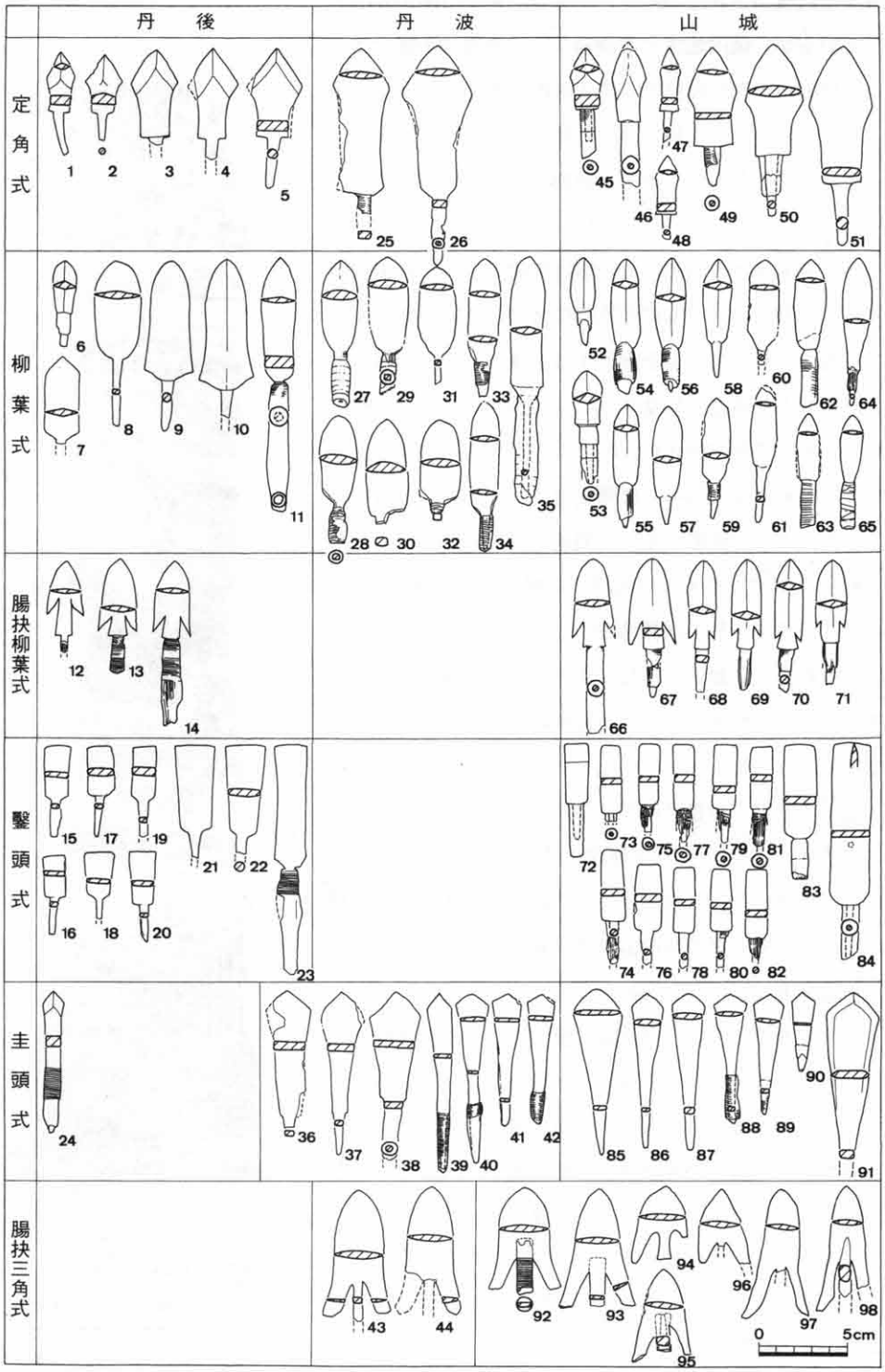
丹波地方では由良川中流域に広がる福知山盆地周辺と園部町周辺の大堰川上流域の二地域に出土例がある。

由良川中流域には谷尾谷(たにおだに)1号墳、論田(ろんでん)9号墳、宝蔵山(ほうぞうやま)古墳群、久田山(きゅうたやま)古墳群がある。その多くが方形墳丘を基調とし、土壙に木棺を直葬した主体部であり、竪穴式石室墳は普及してはいない。また有稜系小形鏃は認められず、平造りで偏平大形の定角式(25・26)や圭頭式(36～38)など、前期でも後出する様相が強い。

園部町周辺では、全長52m、前方後円形の墳丘をもつ



第2図　波路古墳出土靫
実測図(1/5)



第３図　鉄鏃実測図(1/4)

黒田(くろだ)墳墓がある。棺内には位至三公鏡や管玉があり、鉄鏃は18点以上が棺外の南側小口付近にまとめられていた(27～32)。柳葉式であるが、両丸造りで鎬をもたない。左右非対称で、片関に近い形態もあり(28・30・32)、有稜系小形柳葉式の範疇には入らない。次世代墳が周辺にみられず、礫床をもつ特異な埋葬施設の構造や、庄内式前後の弥生墳丘墓に通有な漢鏡破鏡行為は、竪穴式石室に三角縁神獣鏡を副葬する定型化した前方後円墳成立以前の墳丘墓といえる。

垣内古墳は全長84mの前方後円墳で、割竹形木棺を覆う粘土槨を主体部とする。前期古墳特有の銅鏡、石製腕飾類、鉄製武器など多くの副葬品とともに鉄鏃145点以上が棺外から検出された。多くが細長くなった柳葉式(33・34)、圭頭式(けいとうしき)(39～42)で、有稜系小形鏃とはいえず、前期古墳の鉄鏃様式としては最終的な様相を示している。

山城地方(第3図45～98)

山城地方はおもに向日丘陵近辺と南山城地域の木津川流域に出土例がある。

向日丘陵近辺では、寺戸大塚古墳、妙見山古墳、元稲荷古墳、南原古墳、鳥居前古墳がある。全長が50～100mを越す山城地方屈指の前方後円墳、前方後方墳であり、竪穴式石室を埋葬施設とする。鉄鏃はその多くが竪穴式石室内の棺外に多量に副葬されるが、その形態はそれぞれ異なり、寺戸大塚古墳は定角式(46・50・51)、妙見山古墳は有茎腸抉柳葉式(68～71)と無茎腸抉三角式、南原古墳は柳葉式(54～58)が主体となる。

一方、木津川流域では木津町で瓦谷古墳が発掘され、全長48mの前方後円墳であることが判明した。鉄鏃は2基の粘土槨から検出され、第2主体部では鞆に収まって出土した。細長い柳葉式(59～65)、圭頭式(85～89)、左右非対称の有茎腸抉三角式(94・95)は園部垣内古墳同様に、前期末の様相を示している。

山城町内では平尾城山古墳と椿井大塚山古墳がある。平尾城山古墳は全長110mの前方後円墳である。竪穴式石室1と粘土槨2があり、鉄鏃は竪穴式石室粘土床から検出された。鑿頭式(73～82)を主体とする。定角式(47・48)はやや形態が崩れており、椿井大塚山古墳より後出する。前期前葉とされる。

椿井大塚山古墳は全長184mの前方後円墳であり、竪穴式石室から200点以上検出された。定角式(45)、柳葉式(52・53)、鑿頭式(72)など有稜系小形鏃がもっとも多く、その組成は前期初頭の鉄鏃形式のほとんどすべてを含むものである。

3．小結

所謂、類銅鏃式とされる有稜系小形鏃群は現在のところ、丹後地域と山城地域にあるが、丹波地域では顕著な出土例はない。山城地域でさえも椿井大塚山古墳の様に、偏平大形鏃

群と有稜系小形鏃群を多種、多量に集積される例は他になく、多くが二種類ほどの鏃群でおさまる。しかし、山城地域では出土例の多くが全長50m以上の前方後円(方)墳で、竪穴式石室棺外に多量に副葬されるのに対して、丹後地域では蛭子山古墳を除いては、前方後円墳出土例はなく、方形墳などの木棺直葬墓から少量複数例検出される。有稜系小形鏃群は、丹後地域では、方形周溝墓や台状墓、組合式石棺など弥生時代以来、踏襲された墓制にも副葬されることが指摘できる。有稜系小形鏃群の汎列島的(注11)に共通した形態や斉一的な出現時期などから、この鏃群が各地で多元的に生産されはじめたとは考えがたい。畿内中枢地域か吉備中枢地域において集中的に生産されはじめたと仮定するならば、丹後地域の有稜系小形鏃群の副葬からは、遠隔地域との交易、あるいは、中枢地域とは墓制を異にした広範な地域への配布を想定することができ、前方後円墳成立時期に広域の流通経路を把握する活動が窺われるのではなかろうか。

また、細長い両丸造りの柳葉式鏃群と圭頭式鏃群の組み合わせは前期でももっとも後出する園部垣内(かいち)古墳、瓦谷古墳などに見られ、八幡市ヒル塚古墳出土例に継続される(注12)。さらに、鳥居前(とりいまえ)古墳、瓦谷古墳などの有茎腸抉三角式も長岡京市恵解山(いげのやま)古墳出土例(注13)に継続され、中期前半には茎部の長頸化により、篦被が発生する。

なお、今回の作業は当調査研究センター平成３年度共同研究事業の一環として田代　弘氏と筆者が行なった古墳時代鉄鏃集成の成果の一部である。鉄鏃実見、実測にあたり、下記の諸機関に便宜を図っていただき、各氏にご指導頂いた。記して感謝したい。

綾部市郷土資料館・京都大学文学部博物館・京都府立丹後郷土資料館・京都府立山城郷土資料館・園部町教育委員会

高橋美久二・近澤豊明・辻健二郎・菱田哲郎・細川康晴・森下　衛(敬称略)

(のじま・ひさし＝当センター調査第２課調査第２係調査員)

注１　橋口達也「ふたたび初期鉄製品をめぐる二、三の問題」(たたら研究会編『日本製鉄史論集』1983)

注２　江上波夫「馬弩關と匈奴の鐵器文化」『ユウラシア古代北方文化　匈奴文化論考』全国書房 1948

注３　川越哲志「金属器の普及と性格」(大塚初重他編『日本考古学を学ぶ』２　有斐閣選書)　1979 弥生時代の鉄器文化の様相については川越哲志氏の近年の業績に詳しい(川越哲志『弥生時代の鉄器文化』1993　雄山閣出版)。

注４　古墳時代の成立にあたって、畿内中枢地域において、鉄素材流通経路や鉄器製作技術の掌握が重要であったことは既に述べたことがある(野島　永「弥生時代鉄器の地域性」(潮見浩先生退官記念事業会編『考古論集』　1993)　なお、拙文中、第５図(p440)と第６図(p441)の実測図

が入れ替わっていた。訂正してお詫びしたい。)。

注5　松木武彦「古墳時代前半期における武器・武具の革新とその評価」『考古学研究』第39巻第1号　1992

注6　川西宏幸「儀仗の矢鏃」『考古学雑誌』第76巻第2号　1990
松木武彦「前期古墳副葬鏃の成立と展開」『考古学研究』第37巻第4号　1991

注7　京都府内の鉄鏃出土墳墓の文献は付表・図版出典文献を参照した。

注8　藤原妃敏・菊地芳郎編『会津大塚山古墳の時代』　福島県立博物館　1994

注9　杉井　健「滋賀県雪野山古墳棺内出土の靫」『考古学研究』第38巻第2号　1991

注10　佐藤晃一『蛭子山古墳発掘調査概要』　加悦町教育委員会　1985

注11　近年、金海大成洞29号墳でも有稜系小形鏃群が検出され、洛東江下流域との関係も注目される(李海蓮『金海大成洞29號墳に関する研究―洛東江下流域の出現期古墳の一様相―(文學碩士學位論文)』　慶星大學校大學院　1993)。

注12　桝井豊成ほか『ヒル塚古墳発掘調査概報』　八幡市教育委員会　1990

注13　山本輝雄ほか『史跡恵解山古墳』　長岡京市教育委員会　1990

付表・図版出典

川西宏幸ほか『京都府弥栄町奈具岡遺跡発掘調査報告書』、財團法人古代學協會　1985　(付表1、第3図1)

中嶌陽太郎『波路古墳・波路城跡・荒神社跡』宮津市文化財調査報告第16集、宮津市教育委員会　1988　(付表2、第2図)

中嶌陽太郎ほか『霧ヶ鼻古墳群発掘調査概要』野田川町文化財調査報告第6集、野田川町教育委員会　1990　(付表3、第3図7・11～14・23・24)

森　正「(1)内和田古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第49冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1992)　(付表4・5、第3図8・15～20)

梅原末治「桑飼村蛭子山・作り山両古墳ノ調査」上・下、(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第12冊・第14冊、京都府　1931・1933)　(付表6、第3図3～5・9・10)

樋口隆康「第四　舞鶴切山古墳」(『京都府文化財調査報告』第22冊、京都府教育委員会　1960)(付表7、第3図2・6・21・22)

増田孝彦ほか『豊富谷丘陵遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第1冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1983)　(付表8・9、第3図43・44)

堤圭三郎「9　宝蔵山古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』、京都府教育委員会　1967)　(付表10～13・第3図25・26・35～38)

大槻真純『久田山』綾部市文化財調査報告第5集、綾部市教育委員会　1979　(付表14～16)

森下　衛・辻健二郎『船坂・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』園部町文化財調査報告書第8集、園部町教育委員会　1991　(付表17、第3図27～32)

森　浩一・寺沢知子ほか『園部垣内古墳』同志社大学文学部考古学調査報告第6冊、同志社大学文学

部文化学科　1990　(付表18、第3図33・34・39～42)

梅原末治「第一　乙訓郡寺戸大塚古墳」(『京都府文化財調査報告』第21冊、京都府教育委員会　1955)　(付表19、第3図46・50・51・66・67)

梅原末治「第四　向日町妙見山古墳」(『京都府文化財調査報告』第21冊、京都府教育委員会　1955)　(付表20、第3図68～71)

西谷眞治『向日町元稲荷古墳』　西谷眞治先生還暦祝賀会刊　1985　(付表21、第3図90)

梅原末治「第一　乙訓郡長法寺南原古墳の調査」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第17冊、京都府　1937)　(付表22、第3図54～58)

杉原和雄「鳥居前古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』、京都府教育委員会　1970)　(付表23、第3図96～98)

梅原末治「第二　八幡石不動古墳」(『京都府文化財調査報告』第21冊、京都府教育委員会　1955)　(付表24、第3図91)

岩井武俊「近時発掘城、河の二古墳とその発見遺物」(『考古学雑誌』第3巻第7号　1913)　(付表25)

伊賀高弘「瓦谷古墳」(『京都府遺跡調査概報』第46冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1991)　(付表26・27、第3図59～65・85～89・94・95)

近藤喬一編『京都府平尾城山古墳』古代學研究所研究報告第1輯、財團法人古代學協會　1989)　(付表28、第3図47・48・73～82)

近藤義郎編「京都府山城町椿井大塚山古墳」(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告』第3集、山城町教育委員会　1986)　(付表29、第3図45・49・52・53・72・83・84・92・93)

研 修 だ よ り

平成６年度全埋協近畿ブロック海外研修報告

－中国　北京・西安を中心に－

引原茂治・戸原和人・岡崎研一・杉江昌乃

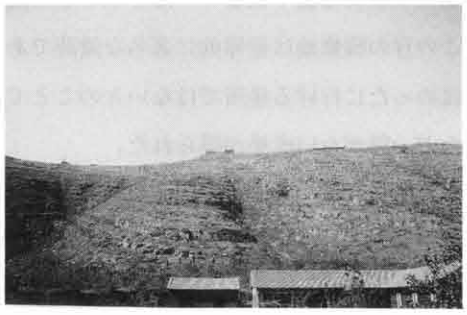
第３回目となる海外研修は、中国の北京・西安を拠点とし、その周辺の遺跡や博物館に限定して行われた。近畿圏の７団体から19名が参加し、当センターからは上記４名が参加した。日時は、平成６年11月２日～11月９日である。以下、日毎に内容を略報する。

11月２日　晴。開港間もない関西空港から昼過ぎに北京入りし、研修の始めに、中国社会科学院考古研究所を表敬訪問した。任式楠所長から考古研究所の1944年設立以来の説明があり、その後、所蔵遺物などを見学した。来年日本に貸し出される予定の遺物も西安から運ばれていた。なお、同研究所の馮浩璋氏には、北京周辺での研修に同行していただき見学先及び道中での案内をしていただいた。

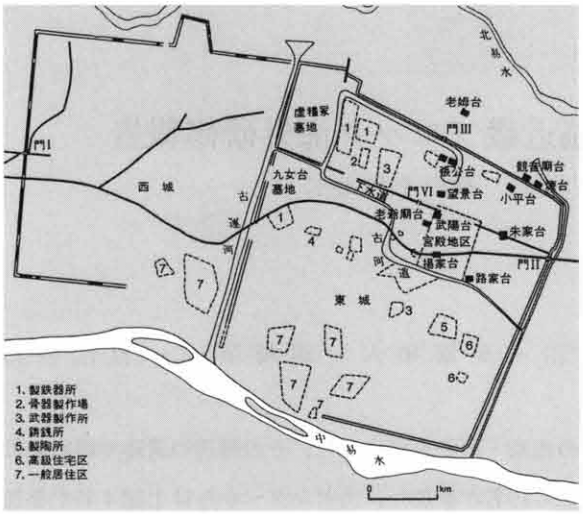
歓迎の宴までの間、わずかな時間ではあったが瑠璃廠（るりちゃん）を散策する。中国では遅い時間のためか、閉店している店が多かった。

中国社会科学院考古研究所にて

11月３日　晴。早朝に北京を発ち、車中約３時間、河北省満城県の満城漢墓に到着。ここでは、かつてこの漢墓の調査を担当された河北省文物研究所前所長鄭紹宗氏に説明していただいた。漢墓は、石灰岩の岩山である陵山山頂部付近に位置する。岩山をくり抜いた大規模な墓が２基、東側に開口して南北に並ぶ。南側が１号墓で前113年に没した中山靖王劉勝（武帝の庶兄）の墓、北側の２号墓がその夫人の竇綰（とうわん）の墓とされる。墓の平面形は十字形状である。１号墓は墓道・甬道・中室・後室が東西に一直線



満城漢墓遠景



燕下都遺址

に並び、甬道の左右に耳室(南耳室･北耳室)を設ける。中室には木造瓦葺建築があったことが判明しており、復元されている。遺体を納める後室の周囲には、岩をくり抜いた回廊が巡る。2号墓は1号墓とほぼ同様であるが、後室が中室の南側に設けられる。また、後室を巡る回廊がない。設備では1号墓が2号墓に勝るが、墓全体の容積は2号墓が大きい。両墓とも目立った外部施設がないため盗掘をまぬがれ、多数の副葬品が出土した。中でも、金縷玉衣は完全に復元できた最古のものとして有名である。なお、1号墓の南側には未発掘の3号墓があるという。また、陵山山頂部には祠廟と考えられる建築遺構があり、陵山から南東側に延びる尾根上には墳丘をもつ陪葬墓が18基点在する。

午後は、満城から河北省易県に向かって約2時間半北上し、戦国時代後半期(前400年頃)の燕の都城である燕下都遺址に着いたのは陽も暮れかかる頃であった。燕下都工作站(えんかとこうさくたん)で高全福所長の説明を聞き、若干の遺物を見学した。燕下都は、北易水・中易水という2本の河川の間に位置し、東西約8km・南北約4kmである。その中央に2本の河川をつなぐ運河が南北に設けられ、運河より東を東城・西を西城という。東城は政治・文化を担当する区域で、中央北側には宮殿域が、北西側には王墓群がある。また、様々な工房跡なども確認されている。西城は軍事を担当する区域といわれている。工作站を後にして、たそがれのうす明かりの中、石永士氏に説明していただきながら王墓群を遠望し、老姆台(ろうほだい)という大規模な版築基壇や城壁の一部を車中から見ながら、北京への帰途についた。

この日の研修地は世界的に著名な遺跡であるが、行程的にかなり無理があり普通の旅行ではめったに行ける場所ではないとのことである。確かに今回の研修中最も強行軍にはなったが、得がたい成果が得られた。

11月4日　曇。車中、中国語の勉強をしながら北京南西の蘆溝橋に到着。石彫獅子の装飾付の美しい石橋だが、かつて日中戦争勃発の原因になった蘆溝橋事件の現場でもある。おりから映画のロケ中で国民政府軍や八路軍がたむろしており、奇妙な臨場感があった。次に、北京郊外の豊台区郭公庄に位置する大葆台(だいほだい)漢墓(前漢)へ向かう。ここでは、2基の

漢墓のうち1号墓が建物で覆われて、北京大葆台西漢墓博物館として公開されている。張文生館長と張蓉華副館長に案内していただく。1号墓は大型木槨墓で、墓室は凸字形状である。墓道から馬車3両(外側から儀仗車・乗用車・喪車の順)が並んで出土している。墓道の奥には2重の外回廊・黄腸題湊(こうちょうだいそう)・内回廊に囲まれた中室・後室が中央に位置する。黄腸題湊は、10cm角・長さ約90cmの檜の心材を小口積みにして築いた壁で、城壁を表しているとのことである。1号墓の黄腸題湊では15,880本の角材が用いられている。5重の棺内から玉衣片が出土し、満城漢墓と同様に、遺体は玉衣で覆われていたと考えられる。被葬者は、武帝の息燕王劉旦と武帝の孫広陽王劉建の2説がある。

大葆台漢墓

金城壁の水門遺構

大葆台から故宮へ向かう途中、考古研究所の馮氏のはからいで、開館準備中の遼金城垣博物館を見学することができた。館の外観は城壁をイメージしている。ここでは北京市文物研究所の趙福生副所長に案内していただいた。この博物館は、金・中都の南側城壁水門基底部の遺構(841年前)を建物で覆い、保存・公開する。この水門は、下部構造として太い角材を敷詰め杭で固定し、その上に切り石を敷詰め長い鉄釘やくさびを用いて、溶かした鉄を石の継ぎ目に流し込んで固定する。実に強固な仕事である。城壁の内および外の水路部分には石敷はなく、両岸に木杭を打ち護岸している。館内ではこの木杭の保存処理が行われており、メンバーの中の保存科学担当者と意見交換がされた。

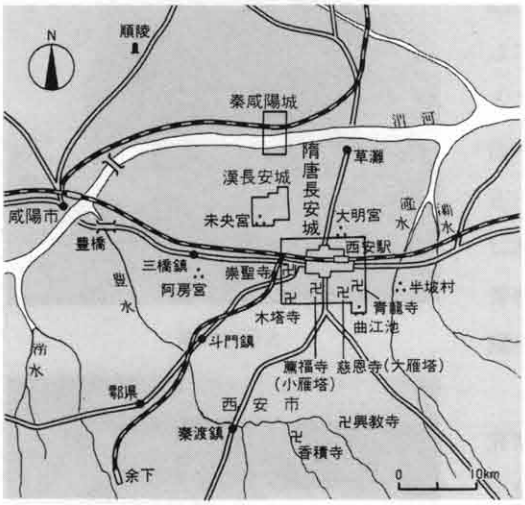
故宮へ向かう。中山公園の社稷壇から午門前に出る。その大きさに声もない。圧倒されるのみ。午門から太和門・太和殿・中和殿・保和殿・乾清門・乾清宮・交泰殿・坤寧宮・御花園・神武門と、南から北へ一直線に見てまわるだけでも大変である。それにしてもこ

中国社会科学院考古研究所西安研究室にて

の広さ・高さ・大きさ・豪華さ、まさに宮殿、何をか言わんや、である。

急ぎ空港へ向かい西安へ発つ。沈む夕陽を追いかけて西へ飛ぶが、西安に着いた時には陽はすっかり落ちていた。

11月５日　曇のち晴。中国社会科学院考古研究所西安研究室を表敬訪問。張連喜副主任から1956年設立以来の説明があり、その後、所蔵遺物を見学。興味深い遺物が多数ある。この日は、同研究室の馮孝唐氏に同行・案内していただいた。馮氏はボーリング調査を長年行われており、西安周辺の地下には非常に詳しい。また、西北大学文博学院副教授王建新氏には西安滞在中ずっと同行・案内していただいた。王氏は、日本留学の経験があり日本語も達者である。どこでも、わかりやすく説明していただいた。



遺址配置図

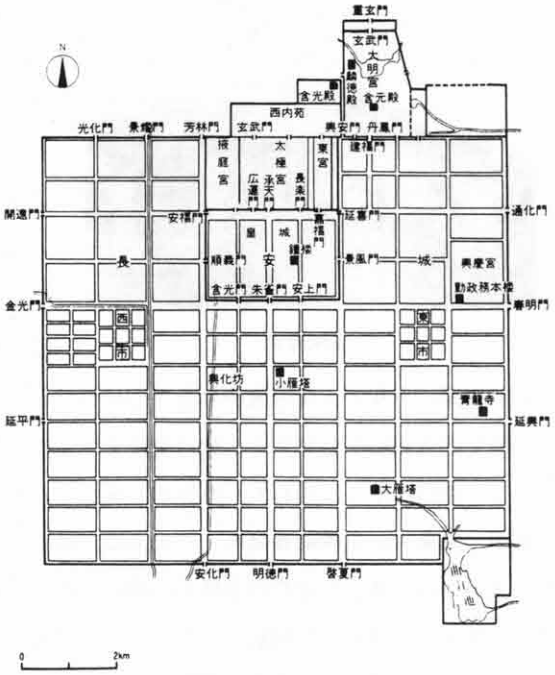
この日は西安の都城関係の遺跡を中心に見学した。まず、唐長安城南東隅にあった園池の跡である曲江池遺址へ行く。広大な池の跡は、今は静かな農村である。次に、皇帝が冬至の日に祭祀を行った唐天壇遺址を見る。４段築成の版築円形基壇で、最下段径約80m・高さ約10m、建物はなかったとのことである。次に、日本の都城でいえば羅城門にあたる唐明徳門遺址へ行く。周辺の開発が進むなかで空地として保存されている。

唐大明宮遺址　麟徳殿跡

午後は唐長安城北東側の大明宮遺址を見学する。まず、西安市大明宮遺址保管所で、高本宪所長に説明していただき遺物・模型などを見る。次に、宮廷の宴や外国使節の応接などが行われた麟徳殿の跡へ行く。基壇が整備されている。壮麗な様子が偲ばれる。大明宮

の中心建物含元殿の跡。雑然とした市街地の中に忽然と広大な空間が開け、壮大な基壇が横たわる光景は、感動的ですらある。

唐長安城を後にして、漢長安城に向かう。田園風景の中にそびえる未央宮前殿遺址の壮大な基壇。ボーリング調査によると遺構の残存状況はかなり良好とのことである。漢長安城の城壁を車中から見ながら、秦阿房宮遺址に向かう。



唐長安城平面図

広大な秦阿房宮遺址の一角で、馮氏が実施しているボーリング調査を見学する。洛陽鑽（らくようさん）という長い柄がついた道具を地面に何度も突き刺し、穴の深さが柄の長さ以上になれば紐をつけ穴の中に落として土壌をサンプリングして版築層をさがし、その厚さを調べる。これを広大な遺跡範囲の中で一定間隔ごとに繰り返す。根気の要る調査である。

ボーリング調査状況

11月6日　晴。この日は、西安の東側郊外の遺跡を中心に見学した。まず、仰韶文化（前4800～前3000年）前半の半坡遺跡。検出された遺構全体を建物で覆い、西安半坡博物館として公開している。王志俊副館長の説明で、特徴的な人面文・魚文が描かれた彩陶などを見る。遺構では、環濠の深さに目を見張る。

次に、小山のような秦始皇帝陵を車窓から眺めながら、秦始皇兵馬俑博物館へ。3基の兵馬俑坑をそれぞれ建物で覆い、発掘調査そのものを公開している。呉永琪副館長、張仲立氏、張志軍氏、周鉄氏に説明・案内をしていただく。あまりにも有名な遺跡であり、内容については多言を要しない。各建物内部の通風装置が現在の課題である、とのこと。

西安へもどり、陝西歴史博物館へ。外観は唐の宮殿風で、現在中国では最も広い展示面積を持つ博物館である。茂陵陪葬墓出土の未央宮で使用された鍍金銀薫爐や永泰公主墓な

乾陵遠景

どの唐墓の壁画、法門寺出土遺物など注目すべきものが数多く展示されている。なお、ここでは、博物館をじっくり見学するコースと重点的に見学して大雁塔方面へ行くコースの二つに分かれた。

11月7日　晴。出発前に有志で小雁塔を見学。西安市内に残る数少ない唐建築である。この日は、西安の北を流れる渭河を渡り、北西側に点在する皇帝陵や墓を中心に見学した。まず、乾陵へ行く。唐第3代皇帝高宗の陵で則天武后を合葬する。梁山を陵とする山上陵で、唐の皇帝陵の中では唯一未盗掘という。参道の左右には石人・石馬・石碑などが立ち並ぶ。また、版築の楼閣跡も残る。

永泰公主墓は、乾陵陪葬墓の一つである。地下へ下る墓道の奥に前後2室の墓室をもつ大型墓である。地上には截頭方錘形の墳丘を築く。後墓室に置かれた家形の石槨には宮女図や唐草文がのびやかに線刻されている。この墓に画かれた壁画は、唐代絵画の代表作である。今、その壁画は陝西歴史博物館に移され、現地のものは模写である。永泰公主李仙惠は、唐第4代皇帝中宗の七女であるが、中宗を廃位して皇帝となった祖母則天武后の怒りに触れ、17歳で死を賜った悲劇の王女である。中宗復位後、永泰公主と追封され、乾陵に陪葬された。なお、この永泰公主墓一帯が乾陵博物館となっている。

唐の陵墓群を後に、前漢の陵墓群に向かう。やがて、ひときわ大きい茂陵が見えてくる。とりあえず通り過ぎて茂陵博物館へ行く。博物館は、茂陵陪葬墓の一つである霍去病(かっきょへい)墓を取り込んでいる。霍去病墓は、彼が匈奴との戦争で戦功を立てた祁連山をかたどって造られたといわれ、その回りに置かれていた石獣が展示されている。中でも、匈奴を踏む馬の石彫は有名である。霍去病墓付近には、衛青墓などの茂陵陪葬墓がある。

茂陵は、前漢の武帝陵で、渭河北岸の咸陽原と呼ばれる河岸段丘上に点在する前漢皇帝陵の中では最大のものである。また、その中でも西端に位置する。陵の周囲にかなり広範囲にわたり散在する陪葬墓や建物基壇は、陵の空間的大きさを実感させる。

茂陵遠景(手前は訪中団長：福岡澄男氏)

西安へ戻り、西安碑林博物館を見学する。北宋の頃、各地にあった石碑が散逸するのを防ぐため、この地に集められたのを起源とする。現在、漢から清に至る各時代の石

碑や墓誌、石仏などのあらゆる石造物が多数収蔵されている。教科書などで有名な唐の大秦景教流行碑や、王羲之や顔眞卿などの書の大家の碑など、興味深いものも多い。

西安碑林博物館の南側には、明初期(14世紀後期)に創建された西安城城壁が連なっている。この城壁は、ほぼ完全に残っているところが貴重である。この城壁で囲まれた街中には明の木造大建築である鐘楼なども残る。西安は、明の面影をも留めている。

茂陵博物館　匈奴を踏む馬の石像

11月８日　曇のち晴。王建新氏が勤務されている西北大学文博学院を訪問する。葛承雍副院長から、1912年に大学が創立・1937年から考古学研究の専門講座を設立・それ以後の調査研究の成果などの説明がある。その後、王氏に案内・説明していただき所蔵遺物を見学。大学構内出土の唐の遺物・耀州窯址出土遺物など、豊富な資料が展示されていた。

再び渭河を渡り、北岸の河岸段丘の下に車を止め、徒歩で咸陽原に登り、陽陵へ行く。陽陵は、前漢の景帝(武帝の父)陵である。咸陽原上の前漢の皇帝陵の中では東端に位置する。時間の関係上、当初は遠望するだけの予定であったが、王氏に案内されるまま、ついに有志で墳丘に登ることになった。陵の東側には王皇后陵が並んでいる。墳丘に登ると、陵の空間的広さを実感する。陽陵は、西安から咸陽の空港方面への高速道路のすぐそばにあるが、駐停車できないため旅行者が訪れることは滅多にないとのこと。

西安から空路北京へ。北京着後、答礼の宴の会場、北海公園内の仿膳へ直行する。

11月９日　晴。最後の研修地、北京大学博物館へ行く。旧石器から現代まで多くの資料が展示されている。照明も良く、説明のプレートも読みやすい。ここでは、北京大学助教授蘇哲氏に説明・案内していただいた。蘇氏は、日本に留学されており、日本語も流暢である。メンバーの中にも知り合いが多い。

全ての研修を終了し、空路関西空港へ帰着。空港で解散した。

今回の研修では、多くの方々のご配慮によって、当初の予定以外の遺跡や施設へも行くことができた。これは、地域を限定したためにスケジュールの多少の変更・調整が可能であったことにもよるものであろう。天候にも恵まれ、有意義な研修であったといえる。

(ひきはら・しげはる＝当センター調査第２課調査第２係主任調査員)
(とはら・かずと＝当センター調査第２課調査第４係主任調査員)
(おかざき・けんいち＝当センター調査第２課調査第１係調査員)
(すぎえ・まさの＝当センター総務課総務係主事)

府内遺跡紹介

65. 栗栖野瓦窯跡

栗栖野（くるすの）瓦窯跡は、京都市左京区岩倉幡枝（はたえだ）町に所在する遺跡で、現在までに40数基の窯跡の分布が確認されている。大正時代までは、栗栖野瓦窯は、『延喜式』に「小野瓦屋」とともに「栗栖野瓦屋」と出てくることは知られていたが、具体的な場所については、京都市山科区の栗栖や、西賀茂の御栗栖野などが候補地として挙げられていたにすぎない。昭和に入って、現在の左京区東幡枝地区でこの窯跡群の一角が発見されたことで、1934年に国史跡に指定されている。

この窯跡は、1930年、1976年、1985年、1992年に発掘調査が実施されており、立会調査や踏査などを含めると、8回に及んでいる。このうち、特に注目されるのは、1930年の発掘調査である。その結果、木村捷三郎氏は、出土した瓦に「栗」・「木工」などの刻印があることから、この窯は平安京遷都に伴って設けられ、その後も操業されたもので、『延喜式』木工寮式にある「栗栖野瓦屋」に比定された。この比定は、現在でも変更する必要はないばかりか、その後の研究の進展で、この地域にはかなりの数の瓦窯が存在することがわかった。

窯跡群は、左京区の深泥ヶ池北方の丘陵だけでなく、木野の集落の中間にある小さい丘陵の南側にも点在しているため、最近では「幡枝古窯址群」とか「岩倉窯址群」、または「岩倉幡枝古窯跡群」と総称されることが多い。これらの窯跡群は、少し離れた小野瓦窯跡（小野瓦屋に比定されている）や芝本瓦窯跡を含めると別表のとおりであり、時期も飛鳥・白鳳時代から平安時代にまたがっている。

第1図　遺跡所在地（1/50,000）
番号は付表に対応

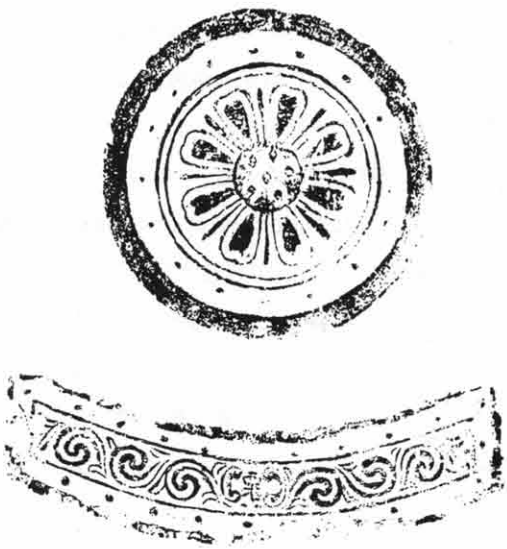
この表からみると、すでに6世紀末から7世紀にかけて、須恵器の窯が築かれており、比較的早い時期から岩倉地域では窯業生産の盛んな地域であったことがわかる。

付表　主要岩倉古窯跡群一覧表

番号	窯跡名	種別	時期
1	皆越窯跡群	須恵器	白鳳・奈良
2	中の谷窯跡群	須恵器	白鳳・奈良
3	木野窯跡群	須恵器	白鳳・奈良
4	元稲荷窯跡	瓦・須恵器	飛鳥・白鳳
5	妙満寺前窯跡	須恵器	?
6	妙満寺裏窯跡	須恵器	?
7	栗栖野窯跡	瓦・須恵器・緑釉製品	飛鳥・白鳳、平安
8	木野墓窯跡	瓦・須恵器	白鳳・奈良
9	南庄田瓦窯跡	瓦	平安?
10	円通寺瓦窯跡	瓦	平安?
11	ケシ山窯跡群	瓦・炭	飛鳥・白鳳、平安
12	御用谷池窯	瓦	飛鳥・白鳳、平安
13	深泥池南岸窯跡	須恵器	?
14	深泥池東岸窯跡	須恵器	飛鳥・白鳳
15	芝本瓦窯跡	瓦	平安
16	小野瓦窯跡	瓦	平安

栗栖野瓦窯も、この窯業生産の伝統にのっとって行われたようで、平安京遷都に伴い、全く窯業とは関係のない地域に瓦窯が設けられたものではなかったことがわかる。元来、栗栖野の地は、平安時代の初めの桓武朝～仁明朝にかけての時期に、天皇が遊猟をよく行ったところであり(『類聚国史』延暦14(795)年10月辛卯条など)、また栗栖野氷室が置かれたりして、比較的史料上に見える地域である。このように、伝統的に窯業生産を行った地域であるだけでなく、天皇の遊猟場所に選ばれたり、供御料としての氷室が置かれるような地域に瓦窯が築かれたのである。

ところで、平安京遷都の時期は、造営を行う官司にとって一つの画期になっている。8世紀の造営では、造宮職や造京司などの官司が臨時に設けられて造作作業にあたっていた。ところが、8世紀末から9世紀にかけての時期にこの様相が変わってくる。特に、延暦年間には軍事と造作が常に行われていたが、それが桓武天皇の死の直前に中止になり、延暦24(805)年12月10日には造宮職が廃止され、翌大同元(806)年2月には木工寮に併合されている。さらに、弘仁年間には、新たに修理職が設けられ、寛平2(890)年以降は常設の官司になった。造営作業や修理作業は、これらの官司が中心になって進められたので



第2図　軒瓦拓影(軒平瓦中央に「栗」の字あり)
(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第15冊から)

ある。栗栖野瓦窯跡で見つかっている刻印瓦の内、「木」は木工寮のことを指しており、「栗栖野瓦屋」が木工寮の下にあった官営工房であったことがわかる。ただ、『類聚符宣抄』に載せられた寛仁２(1018)年11月25日官符によれば、賀茂御祖神社に寄進された４郷の内に「栗野郷」がみえている。この栗野郷は、栗栖野に比定されており、同じ官符に「抑件諸郷所在神寺領、及齋王月料、勅旨、湿地、埴川、氷室、徭丁、陵戸等田、并左近衛馬場、修理職瓦屋、其守丁役人」とあるように、栗栖野の瓦屋は修理職の瓦屋として出てくる。この点からすれば、10世紀には木工寮の管轄下にあった瓦屋が、11世紀には修理職に移管されていることになる。事実、そのような意見もあるが、すでに11世紀には木工寮がどの程度機能していたか不明な点が多い。ただ、少なくとも11世紀に見える栗栖野の瓦屋が修理職の管轄下にあったことだけは確実である。

ところで、平安時代の作瓦は、『延喜式』木工寮式の記述によれば、「工一人日造瓱瓦九十枚、筒瓦亦同、但彫端八十三枚、宇瓦廿八枚、鐙瓦廿三枚」とあり、当時の官営工房では一人の工人が１日で造らなければならない瓦の量が決まっていたようである。また、その他の規定として、「工卌人、八十人、作瓦窯十烟、烟別工四人、夫八人、焼雑一千枚料、薪四千八百斤」とあり、工40人と夫80人の合計120人で瓦窯10烟を造ることになっていた。したがって、窯１基を造るのに12人の計算となる。しかし、小林行雄氏は、正倉院文書・天平宝字６(762)年３月１日「造東大寺司告朔解」や同年４月１日「造東大寺司告朔解」の記述から、一つの窯を築くのに40人程度の人数が必要と推定されるので、この記述は信用できないとされている。また、どれくらいの日数で構築したらよいのかは、この規定からでははっきりしない。ただ、栗栖野瓦屋は、『延喜式』にも出てくる官営工房であるため、少なくとも、１日の瓦の生産量に関する規定については順守されたことは確実である。実際、焼成段階で損益分をひいたとしても、工人の作成する瓦はほぼこの規定通りの量であったことが推定されている。

ここで生産された瓦は、平安京へ運ばれて建物の屋根に葺かれたのであるが、その運搬ルートは陸路であった。『延喜式』木工寮式車載条の記載によれば、「凡自小野栗栖野兩瓦屋至宮中、車一兩賃卌文」とあって、車１両につき40文で運搬したことがわかる。

栗栖野にあった瓦窯に関する文献史料は、これ以上はない。ただ、先に引用した寛仁２年11月25日官符によれば、賀茂御祖神社に寄進された愛宕郡の４郷の中で、朝廷の供御地は除かれている。このことからすれば、栗栖野氷室やこの瓦屋などは、その後も朝廷のために利用されたことは充分推定できよう。特に、平安時代末期には六勝寺をはじめ、かなりの造営事業が展開される時期でもある。実際、1985年の発掘調査では、平安時代後期の分焔床式平窯も６基見つかっており、相当の長期間にわたって栗栖野瓦窯で操業が行われ

ていたことが判明している。

中世以降の栗栖野瓦窯の状況については、調査でもよくわかっておらず、また文献史料もないためほとんどわかっていない。発掘調査から判明したことは、この時代以降、栗栖野瓦窯では瓦が焼かれなくなってきて、次第に衰えたということぐらいである。

（土橋　誠）

＜参考文献＞

木村捷三郎「山城幡枝発見の瓦窯址―延喜式に見えたる栗栖野瓦屋―」（『史林』15-4　史学研究会）1930

川勝政太郎「延喜式栗栖野瓦窯跡と古瓦」（『史迹と美術』1-2　史迹と美術同攷会）　1931

西田直二郎・梅原末治「栗栖野瓦窯址調査報告」（『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第15冊　京都府）　1935

横山浩一・吉本尭俊「京都市幡枝の飛鳥時代瓦陶兼業窯跡」『日本考古学協会昭和38粘土研究発表要旨』　1963

小林行雄『続古代の技術(塙選書44)』　塙書房　1964

石井　望「史跡栗栖野瓦窯跡」（『平安京跡発掘調査概要』　京都市文化観光局）　1980

長山泰孝「木工寮の一考察」（大阪歴史学会編『古代国家の形成と展開』　吉川弘文館）　1976

木村捷三郎他『坂東善平収蔵品目録』　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1980

『ケシ山窯跡群発掘調査概要報告』　京都市埋蔵文化財調査センター　1985

北田栄造「京都府栗栖野瓦窯跡」（『日本考古学年報』38　1985年度版）　1987

北田栄造「栗栖野瓦窯跡」（『歴史考古学を考える』1　帝塚山考古学研究所）　1987

梶川敏夫「京都洛北における造瓦窯―栗栖野瓦窯跡の追加調査―」（廣田長三郎編・木村捷三郎監修『古瓦図考』　ミネルヴァ書房）　1989

井下原博・氏岡真士・岸本直文・小浜　成・近藤尚明・高橋照彦・宮本康治・吉川　聡・吉田　広『岩倉古窯跡群』　京都大学考古学研究会　1992

吉村正親・本弥八郎『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』　京都市文化観光局　1993

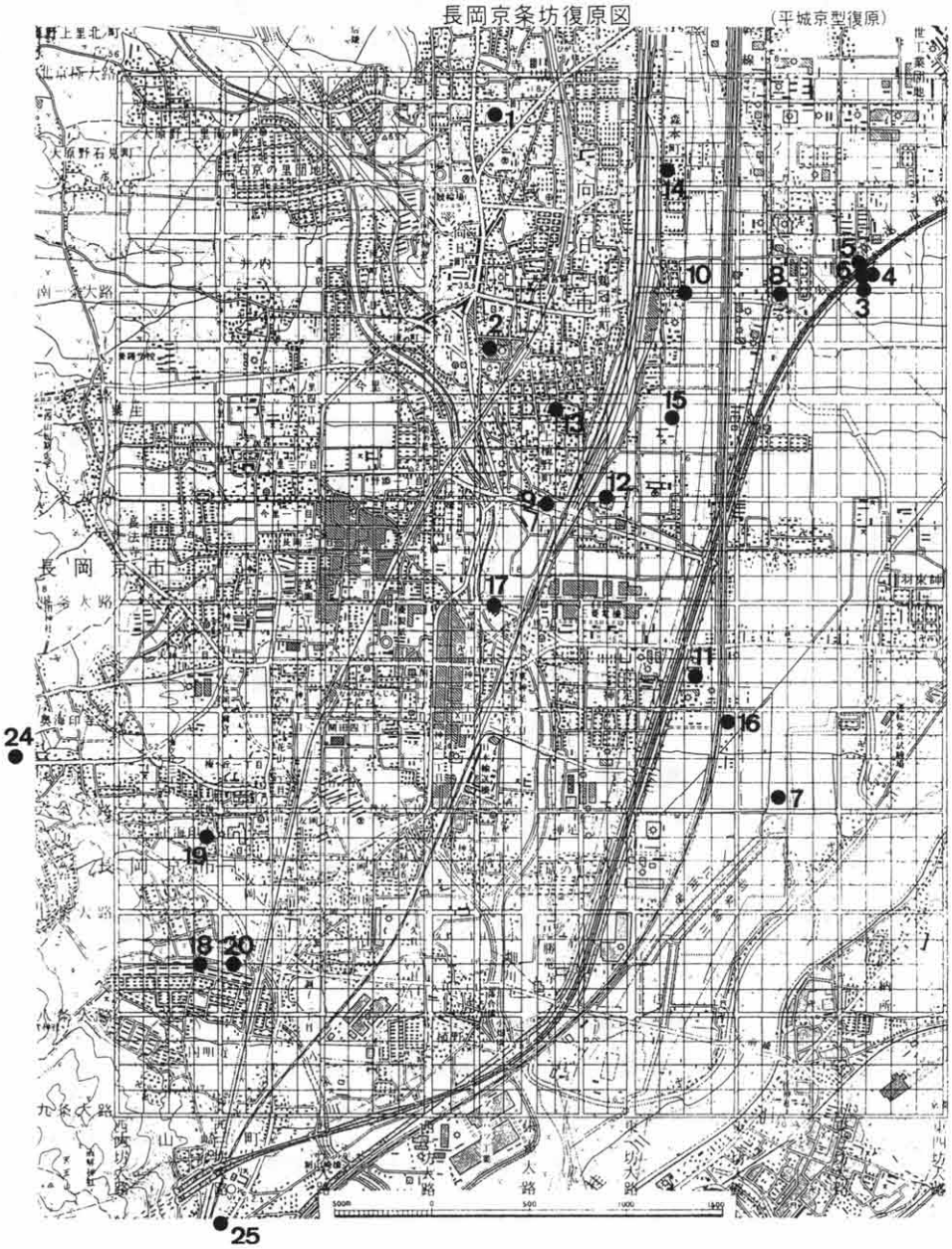
長岡京跡調査だより・52

月例の長岡京連絡協議会は、平成６年11月24日、12月21日、平成７年１月25日に開催された。報告された京内の発掘調査は、宮内２件、左京域14件、右京域４件で、京外の５件を合わせると25件となる(調査地一覧表と位置図を参照)。この内、顕著な成果のあった調査について簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1995年１月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第291次	7ANBDC-1	向日市寺戸町殿長2-1・3-1	(財)向日市埋文	9/19～
2	宮内第292次	7ANFOC-2	向日市上植野町御塔道29-4	(財)向日市埋文	10/3～10/26
3	左京第333次	7ANVST-5	京都市南区久世東土川町正登	(財)京都府埋文	7/4～1/20
4	左京第334次	7ANVKN-2	京都市南区久世東土川町金井田・正登	(財)京都府埋文	8/8～
5	左京第336次	7ANVKN-4	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	11/8～
6	左京第337次	7ANVKN-5	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	10/27～
7	左京第339次	7ANYNO-2	京都市伏見区淀樋爪町地内	(財)京都市埋文	4/1～
8	左京第341次	7ANENR-3	向日市鶏冠井町西金村５他	(財)向日市埋文	5/13～12/26
9	左京第349・350次	7ANFGN-1・2	向日市上植野町御妙林7-1他	(財)向日市埋文	10/12～11/4
10	左京第351次	7ANEHB-3	向日市鶏冠井町八ノ坪	(財)向日市埋文	10/12～
11	左京第352次	7ANMKK-4	長岡京市神足上八ヶ坪12	(財)長岡京市埋文	11/ 7～1/24
12	左京第353次	7ANFIR-2・FDN	向日市上植野町池ノ尻・大門	(財)向日市埋文	11/7～
13	左京第354次	7ANFMM-4	向日市上植野町円山３	(財)向日市埋文	11/16～12/22
14	左京第355次	7ANDSB-3	向日市森本町四ノ坪31-1	(財)向日市埋文	11/24～12/22
15	左京第336次	7ANFGB-3	向日市上植野町五ノ坪1-2他	(財)向日市埋文	1/10～
16	左京第357次	7ANMTK	長岡京市神足典薬15-5	(財)長岡京市埋文	1/17～
17	右京第483次	7ANLHK-5	長岡京市馬場二丁目217他	(財)長岡京市埋文	10/3～11/25
18	右京第484次	7ANSTE-14	大山崎町円明寺鳥居前5-1	大山崎町教委	10/11～11/4
19	右京第486次	7ANOTJ-2	長岡京市下海印寺東条39他	(財)長岡京市埋文	11/30～12/9
20	右京第487次	7ANSTE-15	大山崎町円明寺鳥居前4-2	大山崎町教委	12/13～1/13
21	中海道遺跡第29次	3NNANK-29	向日市物集女町中海道90-1	(財)向日市埋文	11/15～12/27
22	中海道遺跡第30次	3NNANK-30	向日市物集女町中海道51-8	(財)向日市埋文	1/10～
23	海印寺跡第３次	7CKPDB	長岡京市奥海印寺大見坊	(財)長岡京市埋文	1/25～
24	奥海印寺遺跡第７次	2LOPNG	長岡京市奥海印寺新郷26-3	(財)長岡京市埋文	11/14～11/25
25	百々遺跡・城味才遺跡	7YYMS'MR	大山崎町大山崎小字松原12	大山崎町教委	12/6～12/22



▽番号は一覧表・本文（）内と対応

調査地位置図

左京第341次（8）

（財）向日市埋蔵文化財センター

4,000m²に近い調査区には、二条条間大路が北半部を横切り、南半部は左京二条三坊六町にあたる。発掘調査では、長岡京期の大路が東西約60mにわたって確認され、南側の六町の宅地で、掘立柱建物跡や井戸などが検出された。建物跡は2棟、東西に並んでおり、西側の建物跡の東に南北方向の塀が4間分確認されている。建物跡はいずれも東西棟で、西側のＳＢ34106が南に廂をもつ2間×3間、東側のＳＢ34107が2間×5間で、これも南に廂がある。井戸ＳＥ34103は、調査区の南東隅近くにある。85cm×90cmの方形で、板材を縦方向に組み、四隅の柱に取り付けた横桟で支える形式の井戸枠である。

出土遺物は、長岡京期に限っても、土器類のほか、木簡・墨書土器・木製品・神功開宝など多彩である。とりわけ、二条条間大路南側溝（ＳＤ34102）から出土した木簡や立体人形は注目に値する。字の判読ができる木簡は2点の付札で、1点は長さ14.3cmで、表に「飢麻呂雑鮨一缶」、裏に「延暦十三年」と書かれている。数種の魚の馴鮨（なれずし）を入れた甕に付けた木簡である。延暦13(794)年は長岡京内出土木簡の中で最も新しい年次であるとともに、平安遷都の年でもある。奇しくも丁度1200年後に出土したことになる。もう1点の付札木簡は、上半が欠損しているが、「□〔兎ヵ〕腊（うさぎのきたい）」の2文字が書かれている（「きたい」は干し肉の謂）。文献史料では『延喜大膳式』に儒教の祭儀、釈奠（せきてん）の祭料に兎の肉醤（ししびしお）が見られるが、木簡では人名例以外で初出である。立体人形は、都城遺跡を中心に十数例が出土している。これらの例が概してこけしの様に球形の頭部であるのに対して、今回の出土例は、顎の下、つまり喉部を抉って頭部を作っている点が異なる。この表現や全体の形はむしろ陽物形に類似する。

左京二条三坊六町は、今回の調査成果と周辺の様相から、一町全体を占めるかなりの高級貴族の宅地と考えられている。

参考資料：『長岡京左京第341次調査現地説明会資料～二条条間大路、左京二条三坊六・七町(7ANENR-3)発掘調査』（向日市埋蔵文化財センター、1994.11）

（小山雅人）

センターの動向（6．11～7．1）

1．できごと

11．2～9　文化財保護研究者訪中団(全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック海外研修)北京及び陝西省各地の遺跡・博物館訪問、(参加)戸原主任調査員、引原主任調査員、岡崎調査員、杉江主事

5～6　日本考古学協会総会(於:同志社大学)田代調査員、中川調査員、野々口調査員出席

7～8　全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於：東京都)城戸局長、安田課長補佐出席

7　長岡京跡(向日市・住宅課)発掘調査開始

法華寺野遺跡(加茂町)発掘調査開始

8　平安遷都1200年記念式典(於:京都国際会議場)佐伯次長出席

24　長岡京連絡協議会

27　乙訓教育局との共催による平成6年度文化財講座開催

29　西田文化庁調査官、長岡京跡(名神PA工区)、内里八丁遺跡現地指導

30　韓国海外研修・中国遺跡視察報告会(於：当センター)

12．2　引地城跡(大江町)関係者説明会

8　ニゴレ遺跡(弥栄町)現地説明会

8～9　中沢圭二理事、藤井　学理事、大俣城跡・ニゴレ遺跡現地視察

9　法華寺野遺跡発掘調査終了(11.7～)

15　第41回役員会・理事会(於:ルビノ京都堀川)福山敏男理事長、樋口隆康副理事長、城戸秀夫常務理事、中沢圭二、川上　貢、藤井　学、足利健亮、堤　圭三郎の各理事、加藤裕之監事出席

19　弓田遺跡(木津町)関係者説明会

20　今林古墳(園部町)現地説明会

21　内里八丁遺跡(八幡市)現地説明会

長岡京連絡協議会

1.20　都出比呂志理事、長岡京跡(名神PA工区)現地視察

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於：枚方市)安藤課長、水谷係長出席

25　長岡京連絡協議会

26　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック役員会(於：大阪市)城戸局長、安田課長補佐出席

31　中国海外研修報告会(於:当センター)

2．普及啓発事業

11.27　平成6年度文化財講座(於:向日市文化資料館ほか)講演：福永伸哉「鏡と古墳」、現地見学講師：福田敏郎、渡辺　博(須田家住宅・説法石・向日神社・元稲荷古墳・物集女車塚古墳)—乙訓教育局との共催—

(安藤信策)

受贈図書一覧（6．11～7．1）

札幌市埋蔵文化財センター	札幌市文化財調査報告書ＸＬＶ　N316遺跡
釧路市埋蔵文化財調査センター	釧路市北斗遺跡Ⅳ、北斗遺跡第１地点調査報告書Ⅱ、幣舞遺跡調査報告書Ⅱ
青森県埋蔵文化財調査センター	青森県埋蔵文化財調査報告書第161集 畑内遺跡発掘調査報告書Ⅰ
(財)山形県埋蔵文化財センター	山形県埋蔵文化財センター調査報告書第17集　亀ヶ崎城跡第２次発掘調査報告書、同第18集 藤島城跡第６次発掘調査報告書
(財)いわき市教育文化事業団	いわき市埋蔵文化財調査報告第38冊 上ノ内遺跡、同第39冊 小茶円遺跡
(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター	研究紀要 第２号、栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター年報 第４号
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団年報13、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第171集 矢田遺跡Ⅴ
(財)千葉県文化財センター	千葉県文化財センター研究紀要15、研究連絡誌　第41号、二十年の歩み千葉県文化財センター創立20周年記念誌
(財)山武郡市文化財センター	文化財かわら版（財)山武郡市文化財センター設立10周年記念号
(財)印旛郡市文化財センター	(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第69集　駒形北遺跡発掘調査報告書、同第70集 佐倉市上座壱番原遺跡発掘調査報告書 佐倉市上座壱番原開発予定地内埋蔵文化財調査、同第71集　高岡遺跡群Ⅰ、同第71集 高岡遺跡群Ⅱ、同第75集 公津東遺跡群Ⅰ、同第76集 尾上柳作遺跡、同第77集 篠山新田六ツ塚遺跡発掘調査報告書、同第78集 臼井田小笹台遺跡発掘調査報告書、同第83集 木曽地遺跡、同第85集 城番塚遺跡、同第87集　二部山遺跡発掘調査報告、平成４年度 財団法人 印旛郡市文化財センター年報９、平成５年度 財団法人 印旛郡市文化財センター年報10
(財)東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター	尾張藩上屋敷跡遺跡発掘調査概要Ⅰ、同Ⅱ
神奈川県立埋蔵文化財センター	平成６年度神奈川県立埋蔵文化財センター　かながわの遺跡展 かながわの弥生文化、かながわの考古学第４集　神奈川の考古学の諸問題、神奈川県立埋蔵文化財センター年報13
(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団	新潟県埋蔵文化財調査報告書第61集　萩野遺跡・官林遺跡、同第64集 上ノ平遺跡Ａ地点
富山県埋蔵文化財センター	平成６年度特別企画展図録 古代の須恵器
(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所	埋蔵文化財年報（５）平成５年度
(財)岐阜県文化財保護センター	岐阜県文化財保護センター調査報告書第10集 尾崎遺跡、同第15集　陰地遺跡、同第16集　荒城神社遺跡、同第17集　諏訪洞砦跡、同第18集　阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡
磐田市埋蔵文化財センター	七反田遺跡発掘調査報告書、野際遺跡発掘調査報告書、平成５年度　遠

	江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書、御殿・二之宮遺跡 第８次発掘調査のあらまし、匂坂中遺跡群発掘調査報告書
(財)愛知県埋蔵文化財センター	愛知県埋蔵文化財情報９、年報　平成５年度、愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集　朝日遺跡Ⅴ、同第48集　松河戸遺跡、同第49集　室遺跡、同第50集　清洲城下町遺跡Ⅲ・外町遺跡、同第51集　跡ノ口遺跡・一色長畑遺跡・船橋宮裏遺跡、同第52集　堀之内花ノ木遺跡、同第53集　清洲城下町遺跡Ⅳ、同第55集　貴生町遺跡Ⅱ・Ⅲ　月縄手遺跡Ⅱ、同第56集 黒笹40・89号古窯跡 黒笹Ｇ２号古窯跡 立楠古窯跡
豊橋市埋蔵文化財調査事務所	豊橋市埋蔵文化財調査報告書第18集 橋良遺跡
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	東海の中世墓
(財)栗東町文化体育振興事業団	栗東歴史民俗博物館要覧、遺跡の発掘Ⅱ　岡遺跡の調査、栗東町埋蔵文化財発掘調査 1993年度 年報
(財)大阪府埋蔵文化財協会	(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第71輯　池田寺遺跡Ⅳ、同第78輯 芝ノ垣外遺跡Ⅱ発掘調査報告書、同第80輯　上フジ遺跡Ⅲ・三田古墳、同第81輯　三ヶ山西遺跡Ⅱ、同第83輯 男里遺跡、同第85輯 野々井遺跡、同第86輯　野々井西遺跡・ON231号窯跡、大阪府埋蔵文化財協会　研究紀要２、第９回泉州の遺跡展　平成５年度発掘調査成果・堺市下田遺跡の銅鐸と木製品
(財)大阪文化財センター	第12回近畿地方埋蔵文化財研究会資料
(財)大阪市文化財協会	(財)大阪市文化財協会 15年のあゆみ
(財)枚方市文化財研究調査会	財団法人 枚方市文化財研究調査会研究紀要 第３集
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告95　土師東遺跡・福里遺跡、同96　大田茶屋遺跡１、同102 大年古墳群ほか
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第117集　金売・陣開、同第118集　大歳遺跡、同第119集　入野中山遺跡、同第120集　宮風呂遺跡、同第121集　日向遺跡、同第122集　竜王堂遺跡、同第123集　山崎遺跡、同第124集　明官地東遺跡、同第125集　川東大仙山第10・11号古墳、同第126集　岡山Ａ地点遺跡、同第128集　東広島ニュータウン遺跡群Ⅳ、同第130集　山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(ＸⅠ)、年報 Ⅸ 平成４年度、研究輯録 Ⅳ
(財)徳島県埋蔵文化財センター	徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 5　平成５年(1993)度、徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第３集　四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告３、同第４集　四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告４
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター	埋蔵文化財調査報告書第53集 道後今市遺跡Ｘ
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター	松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ、松山市文化財調査報告書第44集　来住・久米地区の遺跡Ⅱ、葉佐池古墳
(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	北九州市埋蔵文化財調査報告書第130集　上清水遺跡　Ⅰ区、同第141集 釜蓋遺跡　第３地点、同第142集　浜田遺跡・脇ノ浦遺跡　こうしんのう２号墳、同第144集　貫川遺跡８、同第145集　寺内遺跡　第１・２地点、

	同第146集　京町遺跡２　西楽寺および町屋の調査、同第147集　京町遺跡３、同第148集　京町遺跡４、同第149集　京町遺跡５、同第150集　小倉城跡１、同第153集　石田・原遺跡　第５地点、同第154集　森山遺跡、同第155集　中畑遺跡　第３地点、同第156集　堺町遺跡１、同第157集　米町遺跡、同第158集　山崎八ヶ尻墳墓群、同第159集　菅生遺跡、埋蔵文化財調査室年報10 平成４年度、研究紀要　第８号
玉里村教育委員会	権現平古墳群調査報告
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財調査報告第108集　砂部遺跡、同第112集　三ノ谷東・谷館野北遺跡、同第140集　下野国分寺跡Ⅹ、同第141集　那須官衙関連遺跡Ⅰ、同第142集　古宿遺跡、同第144集　塙平遺跡Ⅰ、同第146集　三百目遺跡、同第148集　金山遺跡Ⅱ、同第149集　田間東道北遺跡、同第150集　塚崎遺跡、同第151集　石神遺跡第２次調査、同第154集　長岡百穴Ａ遺跡
前橋市教育委員会	平成５年度　市内遺跡発掘調査報告書、内堀遺跡群Ⅵ、大屋敷遺跡Ⅱ、地田栗Ⅲ遺跡、中並木遺跡、元総社明神遺跡ⅩⅡ、中原遺跡群Ⅱ
高崎市教育委員会	高崎市文化財調査報告書第107集　高崎城遺跡　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ、同第128集　高関村前遺跡、同第129集　高崎城Ⅶ　高崎城三ノ丸遺跡、同第130集　東町Ⅲ遺跡、同第131集　高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書、同第132集　八幡原灰塚Ⅱ遺跡・岩鼻坂上北遺跡・飯塚新田西・雁田遺跡・高崎市内水田遺跡調査一覧、同第133集　史跡　日高遺跡　遺構分布確認調査概要Ⅰ、上佐野舟橋遺跡、倉賀野万福寺Ⅱ遺跡発掘調査報告書、上中居西屋敷遺跡、矢島町薬師遺跡、下大類蟹沢遺跡発掘調査報告書、第12回埋もれた古代の高崎展　弥生をたずねて
鴻巣市教育委員会	鴻巣市文化財調査報告第３集　鴻巣市遺跡群Ⅲ
鳩山町教育委員会	第８回文化財展　「拓本にみる鳩山の板碑」
北区教育委員会	北区埋蔵文化財調査報告第12集　西ヶ原貝塚Ⅱ　東谷戸遺跡、同第13集　御殿前遺跡Ⅳ、同第14集　宮堀北遺跡、同第15集　田端町遺跡　田端不動坂遺跡Ⅱ　田端西台通遺跡Ⅱ
海老名市教育委員会	本郷中谷津遺跡埋蔵文化財調査報告書
八代町教育委員会	八代町埋蔵文化財調査報告書第８集　大沢谷Ａ遺跡
金井町教育委員会	佐渡近世・近代史料集　－岩木文庫－上巻
加賀市教育委員会	耳聞山遺跡
菊川町教育委員会	平成５年度文化財事業年報　第１号、御門前遺跡発掘調査報告書、堀田遺跡Ⅱ発掘調査報告書、八ッ谷遺跡発掘調査報告書、善福寺遺跡発掘調査報告書
多賀町教育委員会	多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書　第９集、多賀町文化財自然誌調査報告書第３集　びわ湖東部中核工業団地造成工事に伴う地学調査報告書（その１）、同第４集　平成５年度多賀町新指定有形文化財の調査報告　びわ湖東部中核工業団地造成工事に伴う地学調査報告、故宮神社社務所庭園保存修理報告書
能登川町教育委員会	能登川町埋蔵文化財調査報告書第32集　横受遺跡（１次調査）、同33集　平成５年度町内遺跡の調査、同第34集　山面古墳群・法堂寺遺跡（４次）・中沢遺跡（10・11次）・佐野南遺跡（２次）
大阪狭山市教育委員会	第１回狭山池フォーラム　狭山池築造の謎に迫る

藤井寺市教育委員会	ふじいでらカルチャーフォーラムⅢ資料集 倭の五王の時代
芦屋市教育委員会	芦屋市文化財調査報告第25集 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書
川西市教育委員会	川西市加茂遺跡 第117・125次発掘調査概要
広陵町教育委員会	広陵町埋蔵文化財調査概報4 ふるさと街道整備事業地内第1次発掘調査概報、同5 平尾金池遺跡発掘調査概報、同6 寺戸鳥掛遺跡発掘調査概報、同7 黒石東2号墳・3号墳発掘調査概要報告書
河合町教育委員会	河合町文化財調査報告 第9・10集(合冊)
高取町教育委員会	平成2年度 イノヲク古墳群第3次発掘調査報告(高取町文化財調査報告第11冊)、平成3年度 イノヲク古墳群第4次発掘調査報告(同第12冊)、平成4年度 高取町内遺跡発掘調査報告(同第13冊)、平成5年度越知遺跡第3次発掘調査概報(同第14冊)
和歌山市教育委員会	史跡 和歌山城 第12次発掘調査概要報告書、鳴神V遺跡発掘調査概要報告書、車駕之古址古墳範囲確認調査概報、平尾遺跡発掘調査概報
島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡発掘調査報告X
東城町教育委員会	川東大仙山古墳群
大西町教育委員会	妙見山古墳発掘調査概報Ⅰ・墳丘編、同Ⅱ・埋葬施設編、同Ⅲ・第7次調査
大野城市教育委員会	大野城市の文化財 第26集、大野城市文化財調査報告書 第42集
甘木市教育委員会	栗山遺跡Ⅱ 甘木市文化財調査報告第28集、平塚川添遺跡発掘調査概報－Ⅱ 同第29集、馬田下原遺跡 同第31集
熊本県教育委員会	熊本県文化財調査報告第112集 山田城跡Ⅰ・Ⅱ、同第113集 庵ノ前遺跡Ⅰ・Ⅱ、同第115集 今泉製鉄遺跡Ⅰ・Ⅱ、同第120集 くまもとの民俗芸能 熊本県民俗芸能緊急調査報告書、同第121集 うてな遺跡、同第122集 神の元1号墳、同第123集 小川内(烽火台)遺跡、同第125集 久保遺跡、同第127集 白鳥平A遺跡、同第128集 夏女遺跡、同第129集 御幸木部古屋敷遺跡Ⅰ、同第131集 狩尾遺跡群、同第132集 島廻遺跡、同第133集 赤池永谷遺跡、同第134集 柏木谷遺跡、同第135集 岡田、同第136集 八代大塚古墳、同第138集 大原天子遺跡、同第140集 池田遺跡、同第141集 深水谷川遺跡、同第144集 ワクド石遺跡、熊本県文化財整備報告第1集 塚坊主古墳、同第2集 横山古墳
安岐町教育委員会	小野・大魔遺跡 安岐町文化財調査報告書第3集
(社)日本金属学会附属金属博物館	金属博物館紀要 第22号
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究年報2(1993年度)、国立歴史民俗博物館研究報告 第58・59・61・62集
出光美術館	出光美術館 館報第88号
調布市郷土博物館	開館20周年記念特別展 祈りの造形
新宿区立新宿歴史博物館	東京都新宿区 三栄町遺跡Ⅵ
松本市立考古博物館	松本市文化財調査報告No.115 出川南遺跡Ⅳ 平田里古墳群
氷見市立博物館	平成5年度 氷見市立博物館年報第12号、氷見市近世史料集成第16冊 陸田家文書 その1 引網旧記并覚書
愛知県清洲貝殻山貝塚資料館	尾張彷徨 弥生の遺跡を行く、朝日遺跡Ⅰ

斎宮歴史博物館	平成５年度 斎宮歴史博物館年報、企画展 平安の姫君たち
滋賀県立安土城考古博物館	秋季特別展 残照－本能寺からの織田一族－、第７回企画展 「館蔵考古展－考古資料からみた近江の歴史－」
大津市歴史博物館	芭蕉没後300年記念企画展 芭蕉と近江の門人たち
大阪府立近つ飛鳥博物館	大阪府立近つ飛鳥博物館要覧、大阪府立近つ飛鳥博物館図録４　平成６年度冬季企画展 モノクロームの仏たち
大阪府立弥生文化博物館	大阪府立弥生文化博物館資料集４　関西国際空港開港記念シンポジウム 海の道・陸の道
吹田市立博物館	平成６年度 特別展 瓦－平安の都へ－
八尾市立歴史民俗資料館	八尾市立歴史民俗資料館 研究紀要第５号、天下の台所「なにわ」と河内
明石市立文化博物館	発掘された明石の歴史展 藤江別所遺跡
広島県立歴史博物館	開館５周年記念　広島県立歴史博物館新収蔵資料展、開館５周年記念・秋の特別企画展　日本のなかのアジア文化、古代オリエントからのメッセージ 暮らしの考古学展
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	宇佐歴史民俗資料館年報 平成５年度、縄文人の世界
国立大邱博物館	国立大邱博物館
早稲田大学所沢校地文化財調査室	早稲田大学所沢校地内埋蔵文化財調査報告書　お伊勢山遺跡の調査第５部
早稲田大学図書館	古代第98号
三重大学歴史研究会	ふびと 第46号
神戸女子大学史学会	『神女大史学』第11号
鹿児島大学埋蔵文化財調査室	鹿児島大学構内遺跡 郡元団地Ｌ－11・12区
博古研究会	博古研究 第８号
国立国会図書館	日本全国書誌 1994－45 No.1994
(株)名著出版	歴史手帖 第22巻12号、第23巻１・２号
(財)韓国文化研究振興財団	青丘学術論集 第５集
板橋区四葉遺跡調査会	板橋区四葉地区遺跡調査報告Ⅳ 四葉地区遺跡 平成５年度、四葉地区遺跡 平成６年度年報
玉川文化財研究所	登戸－８遺跡(枡形山遺跡)発掘調査報告書、片瀬山遺跡(宮畑北)発掘調査報告書、稲荷台地遺跡群Ⅰ地点発掘調査報告書
遺跡調査団	伊勢原市No.14遺跡　伊勢原市No.160遺跡、神奈川県伊勢原市　八幡谷戸遺跡
(財)山梨文化財研究所	帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第５集
富山市日本海文化研究所	富山市日本海文化研究所紀要 第７号 歴史的町並みの調査記録報告書
(財)古代學協會	古代文化 第46巻11・12号、第47巻第１号
大阪・郵政考古学会	郵政考古紀要 通巻29冊
河内長野市遺跡調査会	三日市遺跡調査報告書Ⅲ、天野山金剛寺遺跡
朝鮮学会	朝鮮学報 第153輯
(財)由良大和古代文化研究協会	研究紀要 第二集、舞谷古墳群の研究

新日本教育図書(株)	珈琲タイムの考古学
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu 通巻48号
慶州文化財研究所	慶州文化財研究所 案内書(Ⅰ)
文化財研究所	『文化財研究所』
陝西省考古研究所	陝西省考古学文献目録、考古与文物 1994年第3期、史前研究
(財)京都市埋蔵文化財研究所	平安建都1200年記念 シンポジウム平安京
加茂町教育委員会	加茂町文化財調査報告第4集
京都府京都文化博物館	京都文化博物館研究紀要 朱雀第6集、京都文化博物館研究報告第10集 宮ノ口遺跡
京都市歴史資料館	平成5年度 京都市歴史資料館年報 No.12
京都市考古資料館	京都市考古資料館年報(平成元・2年度)、京都市考古資料館年報(平成3・4年度)
亀岡市文化資料館	亀岡市文化資料館報 第3号、第10回特別展 展示図録『丹波国と平安京－都を支えた篠窯跡群－』
三和町郷土資料館	平成6年度企画展 「学校－写真で綴る三和の学校誌」
同志社大学文学部文化学科考古学研究室	同志社大学考古学シリーズⅥ 考古学と信仰、同志社大学文学部考古学調査報告第8冊 百花台東遺跡、同第9冊 糸谷古墳群
京都大学考古学研究会	第45とれんち
京都橘女子大学図書館	京都橘女子大学研究紀要 第21号
京都市文化観光局	京都市の文化財(第12集)
舞鶴市役所	舞鶴市史・年表編
加茂町役場	加茂町史 第三巻 近現代編
口丹波史談会	口丹波史料九 形原記 巻二
井上和人	条里制研究の一視点 －奈良盆地における条里地割の施工年代についての再検討－
大野左千夫	和歌山地方史研究27
亀井正道	川崎市市民ミュージアム考古学叢書1 線刻画 王禅寺白山横穴墓群の調査
椚 國男	『多摩考古』35周年記念特別号
小池 寛	『出土銭貨』第2号
高橋美久二	九州歴史大学講座 11月号、12月号
筒井崇史	文化財学論集
土橋 誠	古代の土器3・都城の土器集成Ⅲ、古代の土器研究会 第3回シンポジウム 古代の土器研究－律令的土器様式の西東3－、続日本紀の時代
松井忠春	日本文化財科学会設立10周年記念シンポジウム 科学が解き明かす古墳時代
松下正司	芦田川文庫17 備後の主要遺跡〔Ⅰ〕、同18 備後の主要遺跡〔Ⅱ〕

編集後記

３月になり、年度末が近づきましたが、情報55号が完成しましたのでお届けします。

本号は、中央研究院歴史語言研究所の杜生勝氏が『考古』に掲載された論文の邦訳を載せることができました。この論文は、考古学の方法論について、正面から取り組まれた労作であります。また、職員の日頃の研究成果の一端も掲載することができ、本号も充実したものになっています。よろしく御味読下さい。

なお、次回の56号から版型がこれまでのＢ５サイズからＡ４サイズに変更になります。ご了承下さい。

（編集担当＝土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第55号

平成７年３月27日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877 (代)

印刷　中西印刷株式会社
〒602　京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)